— 茨城県土浦市 —

北西原遺跡（第1次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集

2004

土　　浦　　市
土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

— 茨城県土浦市 —

北西原遺跡(第1次調査)

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書　第１集

2004

土　　浦　　市
土浦市遺跡調査会
土浦市教育委員会

序

茨城県土浦市は霞ヶ浦の西端に位置し、筑波山より続く新治台地と筑波稲敷台地、その間を流れる桜川の下流に位置する水と緑の豊かな都市です。市内の各所には、この恵まれた風土によって育まれた長い歴史を物語るさまざまな文化財が、今なお数多く伝えられています。

このたび、市内北部の常名地区の台地上に市総合運動公園の建設が予定されましたことから、当該地内に存在する埋蔵文化財の保存につきまして関係機関と協議を行いましたところ、遺跡の保存を図ることのできない場所については記録保存のための発掘調査を行うことになりました。

この調査によって明らかになりました数々の成果につきましては、専門の研究者のみならず、これからの土浦地域の歴史・郷土学習の資料として、広く皆様に対してご利用いただけるよう心掛けていきたいと思います。併せまして、地域に残された貴重な文化財の保護につきましても、今後とも皆様の一層のご理解をいただきたいと考えております。

結びになりますが、今回の調査にご協力いただきました関係各位に心から厚く感謝申し上げ、ごあいさつといたします。

土浦市教育委員会
教育長　冨永善文

例　言

1．本書は土浦市遺跡調査会が実施した土浦市大字常名字檜木２８２０他に所在する北西原遺跡の第１次調査報告書である。

2．本遺跡の調査は、土浦市(担当：都市計画部新運動公園課〔当時〕)から委託を受け、土浦市遺跡調査会(北西原遺跡発掘調査団)が実施した。

3．本遺跡の発掘調査は大渕淳志・小川和博(日本考古学研究所〔当時〕)が、1993(平成５)年７月12日から10月９日まで実施した。

4．本遺跡の整理作業は1993(平成５)年11月15日より1994(平成６)年２月28日まで基礎整理作業を行い、前任者退職後に藤原均(日本考古学協会会員・常総考古学研究所)が2001(平成13)年４月から2003(平成15)年11月まで引き続き担当した。また旧石器の整理は渡辺丈彦(慶応義塾大学大学院生〔当時〕)が、縄文土器の整理は福田礼子(上高津貝塚ふるさと歴史の広場臨時職員)が担当した。全体総括については石川　功(上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)が担当し、福田およびその他職員が補佐した。

5．本報告書の執筆分担は次のとおりである。

第１章　調査に至る経緯	石川	功
第２章　周辺の環境	石川	功
第３章　北西原遺跡第１次調査		
第１節　調査の経過	藤原	均
第２節　調査の概要	藤原	均
第３節　遺構と遺物		
１～５	藤原	均
６のうち旧石器	渡辺	丈彦
〃　縄文土器	福田	礼子
第４節　まとめ	藤原	均
第４章　総括	石川	功

写真撮影

遺構：大渕・小川

遺物：（縄文・弥生）嶋田　圭吾

（土器・土製品・鉄製品）藤原　均

旧石器は上高津貝塚ふるさと歴史の広場第７回企画展「土浦の旧石器」時に横山印刷が撮影したものを使用した。

なお、第２章第２節周辺遺跡の位置図については変更がないため、『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査)』2002において吉澤悟が製作したものを使用した。また第３章第３節６のうち弥生土器の記載は調査後の概報文を要約して使用した。

6．本遺跡の航空写真は中央航業㈱が実施した。また常名台遺跡群全体図は、2003年に㈱シン技術コンサルに依頼し作成したものを使用した。

7．調査及び本報告書の作成にあたり、下記の諸氏または諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。(50音順・敬称略)

歩産業㈱、(財)茨城県教育財団、茨城県教育庁文化課、小野寿美子、窪田恵一、常総考古学研究所、㈱シン技術コンサル、大和商工リース㈱、中央航業㈱、土浦市都市整備部公園緑地課、土浦市文化財保護審議会、吉澤　悟、吉田鑿泉工業

8．本報告書に関わる出土品、記録図面・写真などは一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。

土浦市遺跡調査会組織（平成５年度）

会　長　須田　直之（土浦市文化財保護審議会長）
副会長　青木　利次（　〃　教育委員会教育長）
理　事　大塚　博　（　〃　文化財保護審議会委員）
〃　広田　宣治（　〃　企画部企画課長）
〃　野口　幹雄（　〃　開発部区画整理課長）
〃　雨貝　宏　（　〃　都市計画部建築指導課長）
〃　山田　和也（　〃　都市計画部都市計画課長）
〃　内海崎保生（　〃　産業部耕地課長）
〃　大塚　重治（　〃　建設部土木課長）
〃　大渕　淳志（日本考古学研究所）
監　事　永井　進　（土浦市教育委員会教育次長）
〃　神林　栄久（　〃　監査事務局長）
幹事長　宮本　昭　（　〃　教育委員会文化課長）
幹　事　加倉井藤雄（　　〃　　係長）
〃　塩谷　修　（　　〃　　主幹兼学芸員）
〃　石川　功　（　　〃　　主事）
〃　黒澤　春彦（　　〃　　〃　）
〃　中澤　達也（　　〃　　〃　：調査担当）
〃　関口　満　（　　〃　　〃　）

(北西原遺跡発掘調査団)

主任調査員　大渕　淳志（日本考古学研究所）
〃　小川　和博（　　〃　　）
調査補助員　竹内　智信
作業員（現場）
石倉しげ　伊藤　望　海上弘義　大和田昭　大和田さだ子　大和田ふじ子　岡田次男
岡田やす子　小野まき　小野　豊　日下部智朗　郡司悦子　坂　みよ　酒井悦子　桜井秀子
島田和巳　島田初男　関野喜久代　戸崎生子　戸崎由三郎　富島栄子　仁平尚希　沼尻久子
沼尻文子　松浦澄子　松浦博子　矢口なか　簗田英樹
作業員（整理）
飯野幸子　久保光子　郡司悦子　酒井悦子　志田フミ子　鈴木恵美子　鈴木桂子　立原キミ子
徳生さち子

凡　例

1．本報告書では、図面整理から実施したために、基礎整理作業でのトレス図面とはトレス線が異なっている。また遺物については、基礎整理時に実測した５点（１～５）以外は今回実測した遺物であり、６から報告書順に番号を付した。

2．本報告書での縮尺は可能な限り統一したが、これ以外はその都度表示した。

竪穴住居跡：１／80	土師器：１／４
古墳：１／200・１／50	土玉：１／４
溝：１／100	石器：１／３・１／４
土坑：１／80	土器：１／３

3．遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

竪穴住居跡：ＳＩ　土坑：ＳＫ　溝：ＳＤ　古墳：ＴＭ　柱穴：Ｐ
撹乱：Ｋ

4．遺構・遺物の実測図中の範囲は以下の通りである。

焼土：　赤彩：　煤付着範囲：　繊維混入縄文土器：

上記以外は注釈を付して任意の表示を行った。

5．遺構・遺物の記述は以下を原則とする。

(1)　水糸レベルは海抜高度（m）を示す。
(2)　遺物番号は本文・挿図・写真図版とも一致する。
(3)　遺物の観察表の法量は、（　）が現存値、〔　〕が復元値を示す。

6．「常名台遺跡群全体図」は土浦市常名地区地形平面図（平成３年３月作成）を原図にして、これまで実施してきた個々の発掘調査の全体図を合成して作成したものである。これは未報告の調査区も含まれているため、暫定的な性格を持つことを明記しておく。なお、「常名台遺跡群」という名称は、総合運動公園建設予定地内に分布する５つの遺跡（西谷津遺跡・北西原遺跡・神明遺跡・山川古墳群・弁才天遺跡）の総称として使用している。

目　次

序
例言
凡例
目次（図版・写真・表目次を含む）
第１章　調査に至る経緯 …… 1
第２章 周辺の環境 …… 2
　第１節　地理的環境 …… 2
　第２節　歴史的環境 …… 2
第３章　北西原遺跡第１次調査 …… 7
　第１節　調査の経過 …… 7
　第２節　調査の概要 …… 7
　第３節　遺構と遺物 …… 7
　　１．竪穴住居跡 …… 7
　　２．古墳 …… 31
　　３．溝 …… 37
　　４．土坑 …… 41
　　５．遺構内出土遺物 …… 46
　　６．遺構外出土遺物 …… 53
　第４節　まとめ …… 56
第４章　総括 …… 57

挿図目次

第１図　周辺遺跡と調査区設定図 …… 3
第２図　常名台遺跡群調査全体図(2003年現在) … 5
第３図　北西原遺跡第１次調査区全体図 …… 6
第４図　第１号住居跡実測図 …… 8
第５図　第２号住居跡実測図 …… 10
第６図　第３号住居跡実測図 …… 11
第７図　第４号住居跡実測図 …… 13
第８図　第５号住居跡実測図 …… 14
第９図　第６号・第７号住居跡実測図 …… 15
第10図　第８号・第９号住居跡実測図 …… 17
第11図　第10号住居跡実測図 …… 19
第12図　第11号住居跡実測図 …… 20
第13図　第12号・第13号住居跡実測図 …… 21
第14図　第14号・第15号住居跡実測図 …… 23
第15図　第16号住居跡実測図 …… 25
第16図　第17号住居跡実測図 …… 26
第17図　第18号・第19号・第20号
　住居跡実測図 …… 28
第18図　第21号住居跡実測図 …… 29
第19図　第22号住居跡実測図 …… 31
第20図　第１号墳実測図 …… 32
第21図　第１号墳主体部実測図－１ …… 33
第22図　第１号墳主体部実測図－２ …… 35
第23図　第１号溝実測図 …… 38
第24図　第２号溝実測図 …… 39

第25図　第１～３号土坑実測図 …… 41
第26図　第４～14号土坑実測図 …… 42
第27図　第15～23号土坑実測図 …… 43
第28図　第24～35号土坑実測図 …… 44
第29図　遺構内出土土師器(1) …… 49
第30図　遺構内出土土師器(2)・土玉鉄製品 … 50
第31図　ナイフ形石器 …… 53
第32図　遺構外出土縄文土器・弥生土器 …… 55

表目次

第１表　遺構一覧表１（住居跡・古墳・溝）
第２表　遺構一覧表２（土坑）
第３表　出土遺物一覧表１
第４表　出土遺物一覧表２
第５表　出土遺物一覧表３

写真図版目次

ＰＬ．１　遺跡遠景　調査前遺跡近景　遺構全景
ＰＬ．２　第１・２号住居跡、第３号土坑全景　第３号住居跡全景　第５号住居跡、第４号土坑全景
第９号住居跡全景　第10号住居跡全景　第11号住居跡炭化材・遺物出土状況
第11号住居跡全景　第12号住居跡全景
ＰＬ．３　第13号住居跡全景　第14号住居跡、第６号土坑全景　第15号住居跡全景
第16号住居跡全景　第17号住居跡、第20号土坑全景　第18号住居跡全景
第19号住居跡全景　第20号住居跡、第７・11・12号土坑全景
ＰＬ．４　第21号住居跡全景　第２号溝、第15・22号土坑全景　第24号土坑全景
第33号土坑土層断面　第33号土坑全景　第35号土坑全景
ＰＬ．５　第１号墳全景　第１号墳主体部・墓道全景　第１号墳主体部全景
ＰＬ．６　土師器
ＰＬ．７　土玉　鉄製品　ナイフ形石器
ＰＬ．８　縄文土器・弥生土器

第１章 調査に至る経緯

土浦駅東口に近い、霞ヶ浦湖畔の川口二丁目に設置されている「川口運動公園」は、市民のスポーツ活動の拠点として1954（昭和29）年に完成したものである。その後1972（昭和47）年に施設は改修されたものの、次第に狭隘化、老朽化などが見られるようになってきた。そこで土浦市では同運動公園の機能更新について検討を重ねてきたが、その結果市北部の常名地区の台地上25.4haを移転予定地として決定し、1990（平成２）年には『土浦市総合運動公園基本計画報告書』を作成している。

ところで、本事業予定地内には1980～82（昭和55～57）年に実施された市内遺跡分布調査によって、「西谷津遺跡」「北西原遺跡」「神明遺跡」「山川古墳群」「弁才天遺跡」の5遺跡が存在することが知られていた。そこで、本事業計画の進展に伴い事業予定地内の遺跡の広がり等を確認する必要が生じたため、1990（平成２）年に事業予定地内の試掘調査を実施することとなった。この結果、各地の試掘調査区より多数の遺構が確認され、これらの遺跡は予定地内の台地上の大半に展開する可能性が高いことが想定された。そのため、工事着手前には記録保存のための発掘調査が必要であることが確認された。

1993（平成５）年６月14日付け土新運発第８号にて、土浦市長助川弘之（新運動公園課扱い）より教育長青木利次に、土浦市常名運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査（北西原遺跡のうち約2,000㎡）について依頼文が提出され、また６月17日付け土新運発第９号で文化庁長官宛てに文化財保護法第57条の３第１項に基づく事業地内５遺跡の埋蔵文化財発掘の通知が提出された。これを受けて茨城県教育委員会からは平成５年６月21日付け文第800号にて事業地内５遺跡について工事着手前に発掘調査を実施するよう指導を受けた。土浦市教育委員会（担当：文化課）では、依頼のあった北西原遺跡の一部の取り扱いについて協議したところ、土浦市遺跡調査会においてこの発掘調査を実施することに決定し、６月29日付け土教委発第572号で調査費用計算とともに新運動公園課に回答した。そして新運動公園課と発掘調査について協議したところ合意が得られたため、大至急北西原遺跡調査団を編成し、土教委発第697号にて文化庁長官に宛てて文化財保護法98条の２第１項に基づく埋蔵文化財発掘調査の通知を提出するとともに、７月９日付けで土浦市長と土浦市遺跡調査会の調査契約を締結し、７月12日より北西原遺跡の発掘調査を開始した。

第２章 周辺の環境

第１節　地理的環境

土浦市は茨城県南部の中央、霞ヶ浦の北西部「土浦入り」の最奥部に位置する。市域は北の新治台地と南の筑波稲敷台地、間には古鬼怒川の堆積作用が生んだ沖積低地があり、県西部岩瀬町付近を源とする桜川が霞ヶ浦に向かって西から東に流れている。今回の調査地点である「常名台」は桜川の北岸、標高約25～30mの新治台地上にあり、地質学的には南関東の段丘区分で成増層（Ｍ１面）に相当する台地である。桜川沿いの両台地には所謂「谷津」が発達し、茨城県南部霞ヶ浦沿岸の特徴的な地形を形成しているが、土浦入りの場合は筑波稲敷台地側の方が谷津の発達が良く、新治台地側の方は谷津の数もやや少なめである。原始古代の遺跡の多くはこの両側の台地上、特に谷津の周辺に展開している。

常名台の台地上は平坦で、土地利用は主に畑作である。ここでは長年根菜類や桑の作付けが行われているが、近年農業はやや衰退気味で、それに代わり国道125号線方向より次第に住宅地が広がりつつある。今回の総合運動公園予定地は、この台地と中央部のＹ字状に貫入する谷津から構成される南北約600m、東西約700m、面積約24haに及ぶ広大なものである。

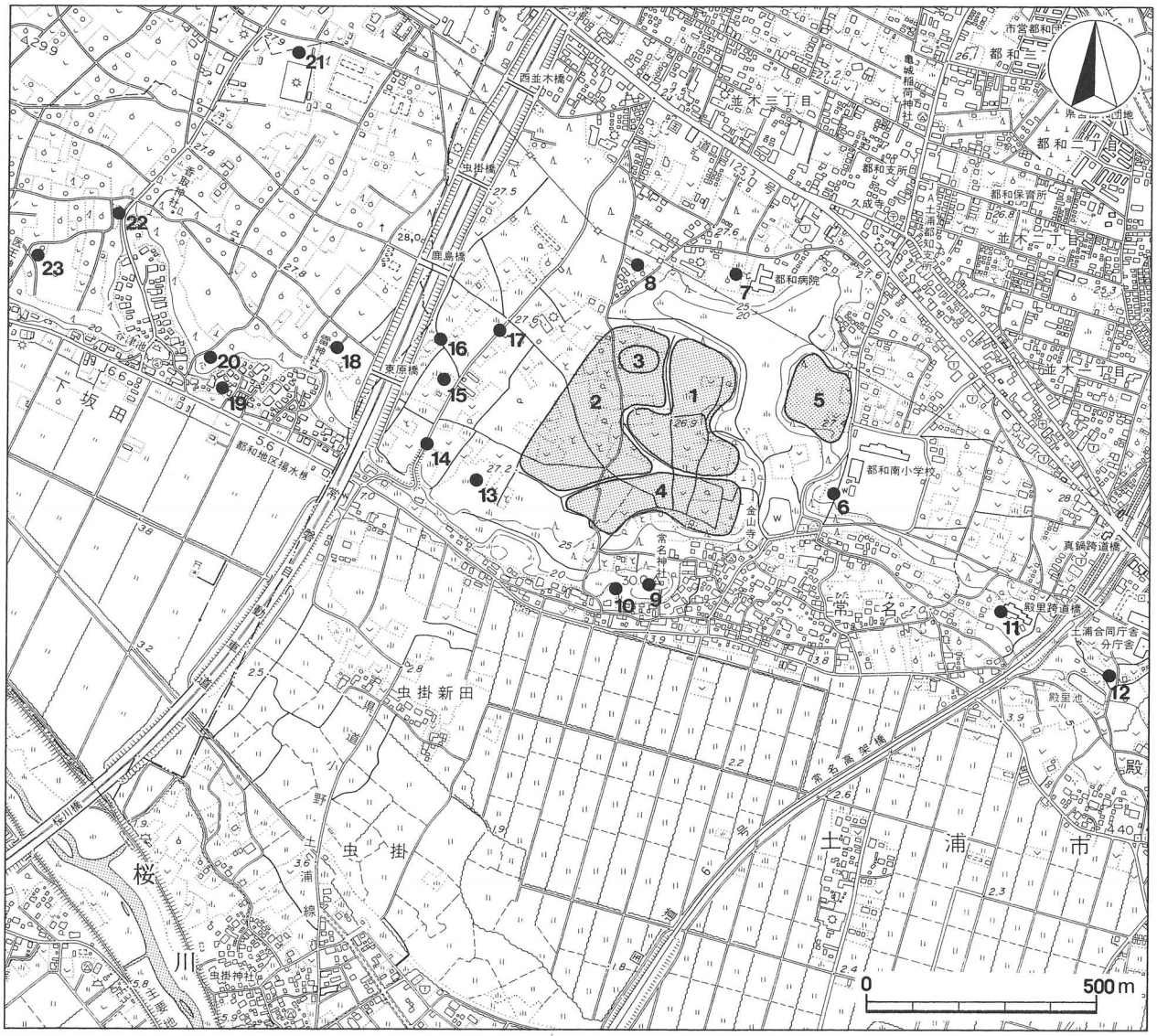
第２節　歴史的環境

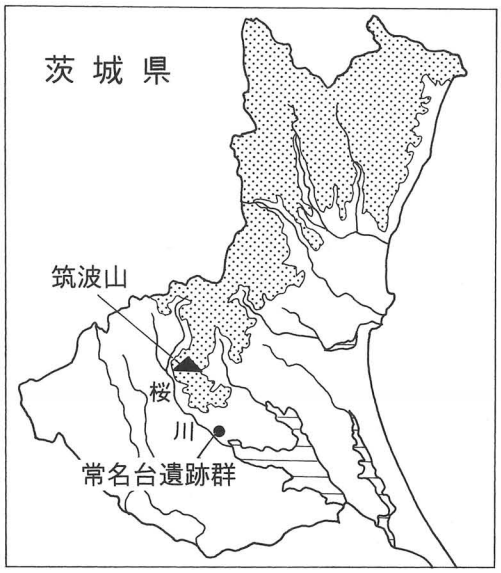
旧石器時代：現在土浦市内では50ヶ所以上の旧石器時代の遺跡が発見されている。常名台でも今回報告の北西原遺跡をはじめ、神明遺跡（1997・2001・2002年調査）、山川古墳群（1997・2003年調査）、弁才天遺跡（1996年調査）からも30,000年前から13,000年前の旧石器が発見されている。

縄文時代：西側の新治村地内には、前期の貝塚である上坂田北部貝塚や上坂田寺裏貝塚、後期・晩期の貝塚である下坂田貝塚が存在し、常名台からは分布調査では前期～中期の土器片が発見されている。本事業地内の神明遺跡については中村盛吉が縄文中期の遺跡として紹介しているが、2001年の調査でも中期の住居跡や地点貝塚が発見され、また谷津に近い東側部分にも中期の遺構群が確認されたことから、大規模な集落跡が存在するものと考えられる。

弥生時代：下坂田貝塚にわずかな土器片の散布が確認されているほか、北西原遺跡（1994年調査）から竪穴住居跡１軒が確認されているのみで、遺跡の分布は希薄である。

古墳時代：今までの調査の結果、中央部の北西原遺跡（1993～1995年調査）～神明遺跡（2001年調査）からは古墳時代前期の集落跡が、北側の西谷津遺跡（2002年調査）・東側の弁才天遺跡（1996年調査）からは古墳時代前期・後期の集落跡が発見されている。いずれの遺跡も中央の谷津を向いて展開しており、谷津を利用した生活基盤を推定することができる。集落の規模としては特に北西原・神明遺跡の前期集落は100軒を越える大集落であるが、それに比べ中期の住居跡ははいずれの遺跡からもあまり発見されず、また後期の集落は西谷津・弁才天遺跡に中心が移るなど、遺跡の消長及び位置に違いがある点が興味深い。古墳は、北西原古墳群（1993～1994・2002年調査）からは今回の報告例





番号	遺跡跡	時代
1	神明遺跡　（常名台遺跡群）	縄文・古墳・中世
2	北西原遺跡　（常名台遺跡群）	旧石器・縄文・古墳
3	北西原古墳群（常名台遺跡群）	古墳
4	山川古墳群　（常名台遺跡群）	古墳
5	弁才天遺跡　（常名台遺跡群）	縄文・古墳・奈良平安
6	天神脇遺跡	縄文・古墳・奈良平安
7	西谷津遺跡　（常名台遺跡群）	古墳
8	西谷津西遺跡	古墳
9	常名天神山古墳	古墳
10	瓢箪塚（挑戦塚）古墳	古墳（湮滅）
11	八幡下遺跡	古墳・奈良平安
12	殿里古墳	古墳
13	羽黒後遺跡	縄文
14	坂の上遺跡	縄文
15	小坂の上遺跡	縄文・古墳
16	中畑遺跡	縄文
17	アラク遺跡	縄文・中世
18	石橋古墳	古墳
19	下坂田館跡	中世
20	釈迦久保古墳群	古墳
21	坂田稲荷山古墳群	古墳
22	下坂田貝塚	縄文・弥生
23	屋敷付古墳	古墳

第１図　周辺遺跡と調査区設定図

を含め終末期方墳4基が発見されているほか、台地南側の山川古墳群（1995・2003年調査）からは前期の方形周溝墓３基、前期から終末期の古墳11基が発見されている。特に山川古墳群は、2001年に実施した確認調査の状況から見るとまだ南側未調査区にかなりの古墳及び周溝墓が埋没していることが想定され、今後の調査で古墳群の規模は拡大するものと思われる。その他に事業地の南側に前期の前方後円墳である常名天神山古墳〔市指定文化財〕と1966年に湮滅した前方後円墳の瓢箪塚（挑戦塚）古墳があり、盛衰はあるものの、この一帯ではかなり長い時期にわたり古墳群が形成されていたことが判る。また周辺の新治村坂田地区や土浦市真鍋・殿里地区などでも後期～終末期古墳が確認されている。

奈良・平安時代：常名台の奈良・平安時代の集落は、古墳時代後期の集落の位置を引き継ぐように谷津の北側の西谷津遺跡(2002年調査)と東側の弁才天遺跡(1996年調査)から発見されている。それに比べ谷津の西側では山川古墳群の西端から竪穴住居跡１軒の確認例(1995年調査)があるものの、北西原・神明遺跡からは発見されないといった集落分布の偏在が確認されている。特に弁才天遺跡は、奈良・平安時代の竪穴住居跡58軒、掘立柱建物跡5棟以上が発見されているほか、和同開珎なども出土しており、この地域の拠点的な集落であると考えられる。また西谷津遺跡からも竪穴住居跡12軒、掘立柱建物跡１棟等が発見され、銅製帯金具などが出土しており、弁才天遺跡との関連が想定される。

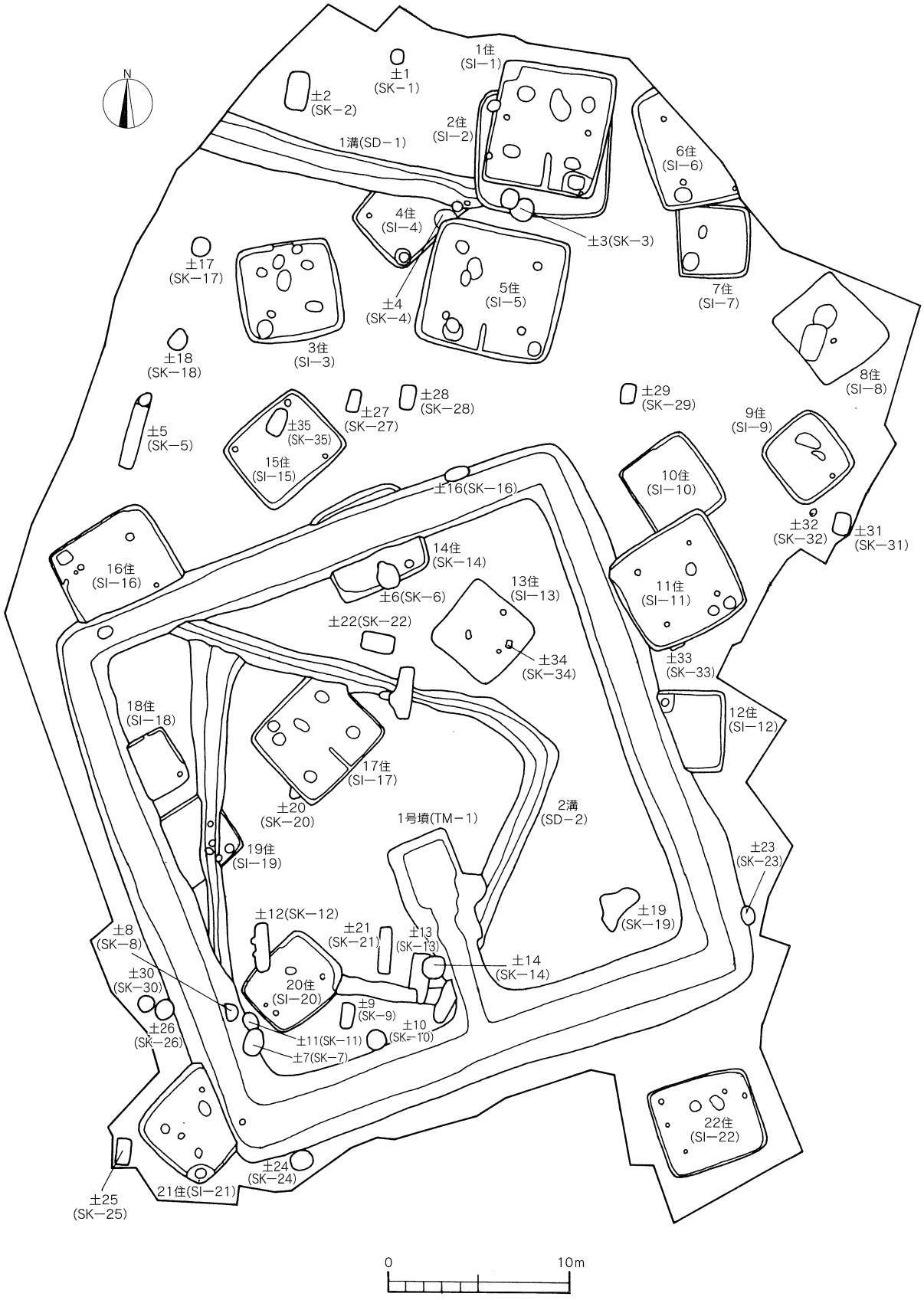
中世：山川古墳群の北側と重複する神明遺跡の南側から、南北約60m以上、東西約120mの方形に溝を巡らせた遺構が発見され、区画の中からは多数の掘立柱建物跡が発見されている（1999・2002・2003年調査)。この溝などから13～15世紀頃のものと思われる遺物が発見されており、館跡の可能性が指摘されている。また本事業地脇の金山寺には室町中期のものと考えられる大型五輪塔〔市指定文化財〕が、常名天神山古墳の前方部にも安土桃山期のものと考えられる宝篋印塔〔市指定文化財〕が存在する。他には「常名城」の伝承があり、台地下の八幡社が遺称地と伝えられるが、遺構・遺物とも発見されておらず、詳細は不明である。

近世：1865（慶応元）年に描かれた常名の村絵図では、集落は台地下の現在地に形成されている。常名台の大半は畑と林になり、一部に寺院なども存在していたことが判る。今までの発掘調査で発見された近世の遺構としては、北西原遺跡（1995年調査）から墓壙が１基発見されている。

参考文献

中村盛吉編	1969	「新治郡縄文遺跡地名表」『日本貝塚の研究』　清野謙次著
土浦市史編さん委員会	1974	『土浦歴史地図』
土浦市史編さん委員会	1975	『図説土浦市史』
土浦市史編さん委員会	1975	『土浦市史』
前田　潮	1982	「上坂田北部貝塚」『筑波地域古代史の研究』　筑波大学
前田　潮他	1992	『「古霞ヶ浦湾」沿岸貝塚の研究』　筑波大学
橋場君男	1998	『神明遺跡（第１次・第２次調査)』　土浦市教育委員会
比毛君男	1999	『第５回企画展　常名台の古代のむら』　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
窪田恵一	2001	『第７回企画展　土浦の旧石器』　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
吉澤　悟他	2002	『常名台遺跡群確認調査　神明遺跡（第３次調査)』　土浦市教育委員会
比毛君男他	2003	『山川古墳群確認調査　西谷津遺跡　北西原遺跡（第６次調査）神明遺跡（第４次調査)』　土浦市教育委員会

第２図　常名台遺跡群調査全体図（2003年現在）



第３図　北西原遺跡第１次調査区全体図

第３章　北西原遺跡　第１次調査

第１節　調査の経過

当遺跡の調査は、確認調査の結果から本調査を実施した。調査は平成５年７月12日より開始し、重機による表土除去の後に精査を行なった。この結果、古墳１基・住居跡22軒・溝２条・土坑36基を確認した。また国土方眼座標を基点とする10×10mグリットを調査区域内に設定し、この10mグリット内に５×５mのグリットを設定し調査を実施した。遺構番号は、住居跡・土坑・溝とも北側より番号を付け、古墳・溝・住居跡・土坑の順で調査を実施した。現地調査は、平成５年10月８日に終了した。

当遺跡の整理作業は、現地調査終了後の10月９日より開始し、平成６年２月28日まで基礎整理作業を行なったが、担当者が中途退職したため一時中断した。この後平成13年７月より平成15年11月末まで本整理（報告書編集・執筆）を行なった。本整理は図面整理から開始し、図面整理終了後必要な図面はトレスを行なった。遺物については、基礎整理で実測済みの遺物を除き今回実測・トレスを行なった。この作業終了後に原稿執筆・割り付けを行い全作業を終了した。

第２節　調査の概要

当遺跡の調査結果は、第３図のように古墳１基（ＴＭ－１）・住居跡22軒（ＳＩ－１～22）溝２条（ＳＤ－１・２）・土坑35基（ＳＫ－１～35）が発見・調査された。22軒の住居跡は、古墳時代の五領・和泉期に該当する住居跡であるが、住居跡の長軸と方位・炉跡の方向・貯蔵穴の位置と形状等個々の住居跡により相違を有している。１基の古墳は主体部が著しく破壊されているが、主体部は横穴式の方墳であり、終末期に位置する古墳と判断される。２条の溝は、住居跡・古墳を掘り切っており中近世の溝と判断される。35基の土坑は、縄文時代の土坑が２基・古墳時代の土坑が７基で、他の土坑は中近世以降の土坑である。縄文時代の土坑は、陥し穴としての土坑であり、中近世の土坑は耕作土坑が多い。

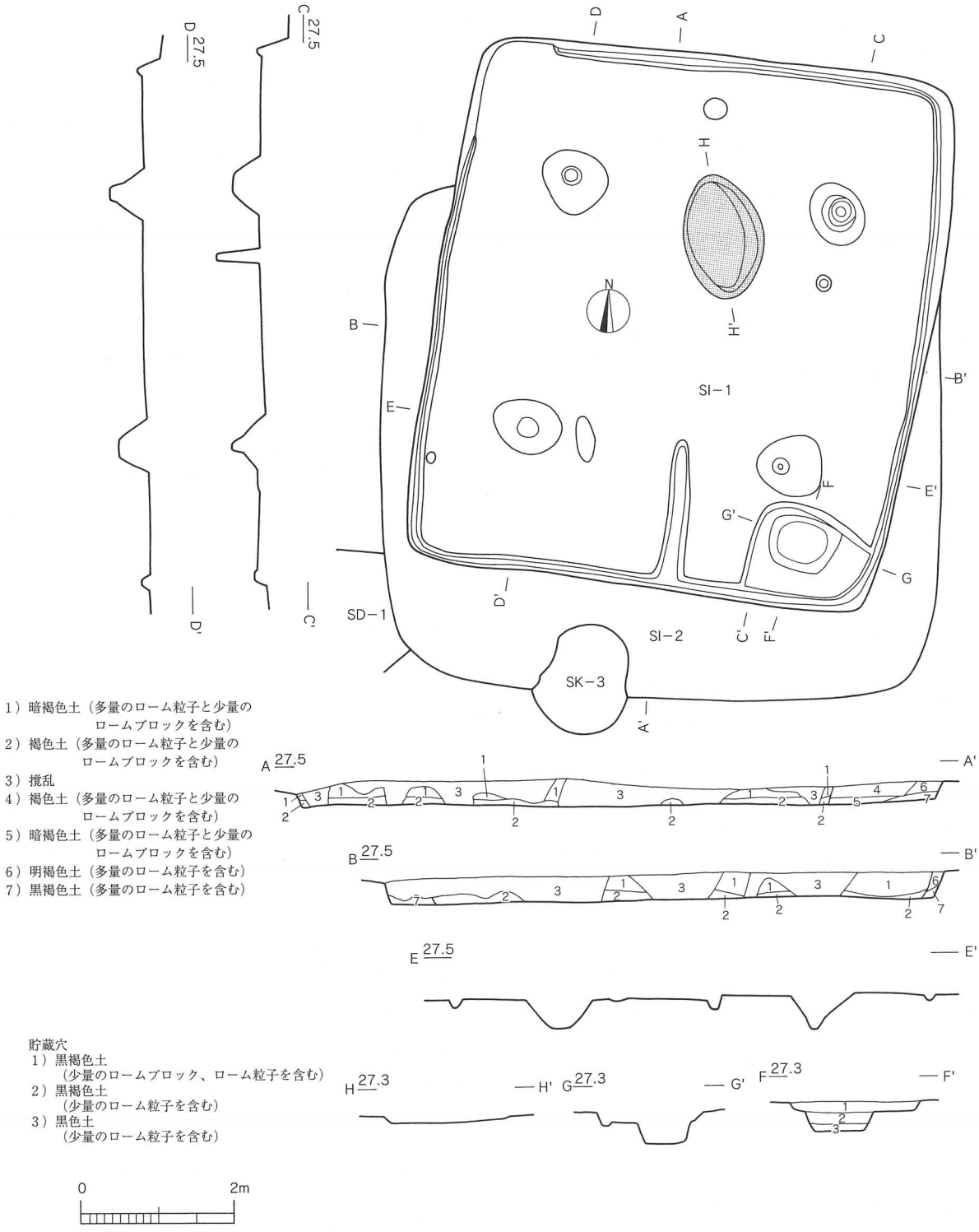
出土遺物としては、遺構を伴わない遺物として縄文土器・弥生土器が破片で出土しており、住居跡からは土師器甕・高坏・器台・埦・坩・鉢・土玉等が出土しており、古墳からは土師器甕・埦・器台・鉄釘等が出土している。溝と土坑からは、土師器片・陶磁器片等が出土している。なお縄文土器片と弥生土器片は、古墳時代の住居跡内覆土と古墳の周溝内覆土等からの出土である。また旧石器時代の遺物が１点出土している。

第３節　遺構と遺物

１．竪穴住居跡

第１号住居跡（第４・29・30図、第３・４表：PL２・７）

第１号住居跡（ＳＩ－１）は、調査区の北側で第２号住居跡（ＳＩ－２）と重複しており、第２号



第４図　第１号住居跡実測図

住居跡を掘切った状況で確認されている。規模は東西径6.37m・南北径7.00m・深さ0.44mを計測し隅丸長方形を呈する住居跡でN－13°－Eに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は一部を除き全周している。床面は中央部が堅緻な床となっているが、壁付近は軟弱な床面となっている。柱穴は深く大きい柱穴が4本認められており、貯蔵穴は南東部で床面より0.02m程低い方形状の部分に掘り込まれており、隅丸長方形状を呈している。炉跡は中央北側で、楕円形の掘り込め炉でやや西を向き良く焼けている。

土層は覆土が暗褐色土と褐色土が堆積しており、貯蔵穴内には黒褐色土・黒色土が堆積しているが覆土は撹乱を受けている。堆積状況は、自然堆積と判断される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台・土玉等が出土しているが、床面及び床面付近からの出土は皆無である。出土遺物で図示出来たのは、土師器甕(第29図1)・土玉(第30図32)の2点である。これらの遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第2号住居跡（第5・30図、第4表：PL2・7）

第2号住居跡（ＳＩ－2）は、調査区の北側で第1号住居跡（ＳＩ－1）に遺構の北側を堀切られた状況で確認された。規模は東西径7.00m・南北径6.50m(推定)・深さ0.35mを計測し、隅丸方形状を呈する住居跡でN－3°－Eに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘り込まれているが、壁溝は全周しておらず、床面は軟弱な貼床である。柱穴は小さく深い柱穴が4本認められたが、炉跡は第1号住居跡に掘切られ消失している。貯蔵穴は南西部に堀込まれており、隅丸長方形状を呈している。

土層は覆土が褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積し、貯蔵穴内に黒褐色土・黒色土・暗褐色土が堆積している。覆土は撹乱を受けているが、自然堆積と判断される。

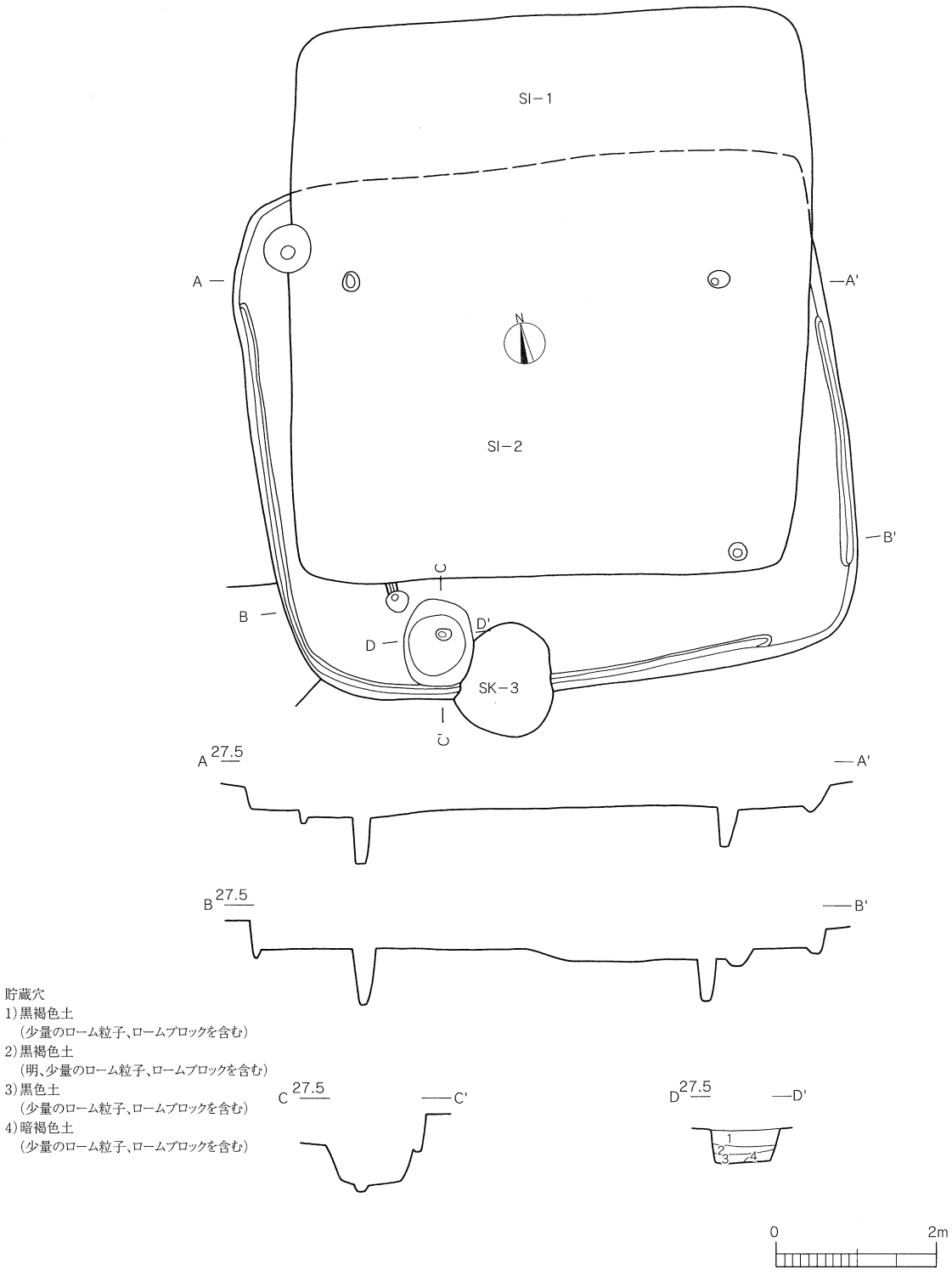
出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台・土玉等が破片で出土しているが、床面及び床面付近からの出土は皆無である。出土遺物で図示出来たのは、土玉1点（第30図33）である。出土遺物から本跡は、古墳時代・五領期の住居跡と判断される。

第3号住居跡（第6・29・30図、第3・4表：PL2・6・7）

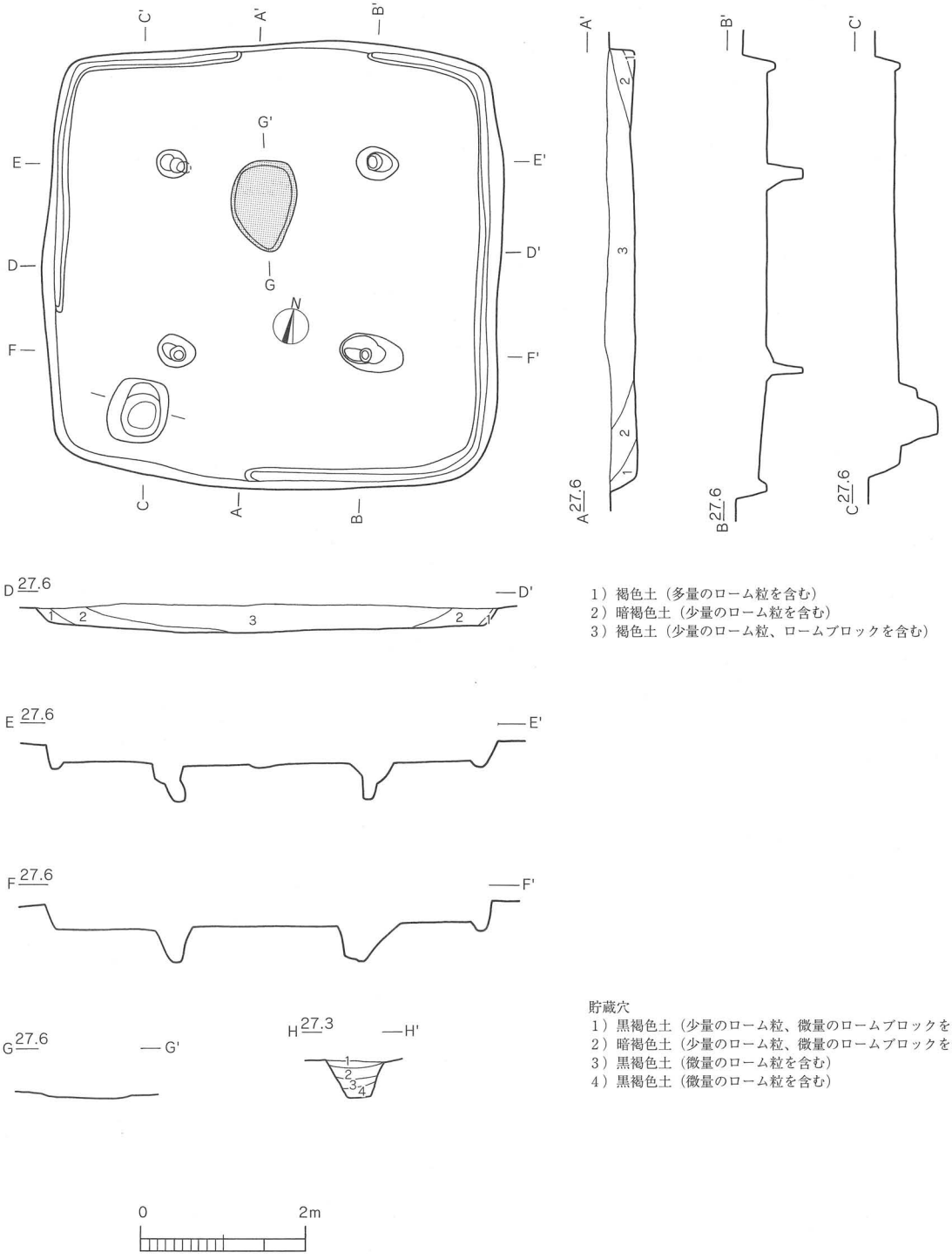
第3号住居跡（ＳＩ－3）は、調査区の北西部に所在しており東西径5.50m・南北径5.44m・深さ0.35mを計測し、東西方向に長軸を有し隅丸長方形状を呈す住居跡で、炉跡の位置から北西向きのN－10°－Wに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、壁溝は北壁中央部と南西部以外全周している。床面は直床状で、柱穴は規則的な配置で4本認められた。炉跡は中央北側に位置しており楕円形状を呈する掘込め炉で良く焼けている。貯蔵穴は南西部に掘込まれており、隅丸長方形状を呈している。また西壁は、東壁より短い壁となっいる。

土層は住居跡に褐色土と暗褐色土が堆積しており、貯蔵穴内に黒褐色土と暗褐色土が堆積している。堆積状況は、自然堆積の状況を示している。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台・壷等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器壷・土玉が出土している。出土遺物で図示出来たのは、土師器甕（第29図6）と土玉（第30図34～42）の10点である。



第５図　第２号住居跡実測図



1）褐色土（多量のローム粒を含む）
2）暗褐色土（少量のローム粒を含む）
3）褐色土（少量のローム粒、ロームブロックを含む）

貯蔵穴
1）黒褐色土（少量のローム粒、微量のロームブロックを含む）
2）暗褐色土（少量のローム粒、微量のロームブロックを含む）
3）黒褐色土（微量のローム粒を含む）
4）黒褐色土（微量のローム粒を含む）

第6図　第3号住居跡実測図

第４号住居跡（第７図）

第４号住居跡（ＳＩ－４）は、調査区の北側で第１号溝及び第４号土坑・第５号住居跡（ＳＤ－１・ＳＫ－４・ＳＩ－５）に掘切られている。規模は東西径4.37m・南北径5.50m・深さ0.06mを計測し、南北方向に長軸を有し隅丸長方形状を呈する住居跡で、北東方向のＮ－45°－Ｅに方位を有している。壁は斜めに掘込まれているが、南壁はやや彎曲しており北東壁は消失している。壁溝は、北壁と西壁北側を除き全周している。床面は直床状を呈しており、柱穴は４本認められた。炉跡は新旧を有する炉跡が３ヶ所で認められ、南西部で円形状の炉跡Ａが新炉で直床炉である。貯蔵穴は南部に掘込まれており、円形状を呈し１本の柱穴（Ｐ２）が掘込まれている。

土層は住居跡内覆土として暗褐色土が１層堆積しており、貯蔵穴内には明褐色土と黒褐色土が堆積している。堆積状況は、自然堆積と判断される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏等が破片で出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第５号住居跡（第８・29・30図、第３・４表：PL２・６・７）

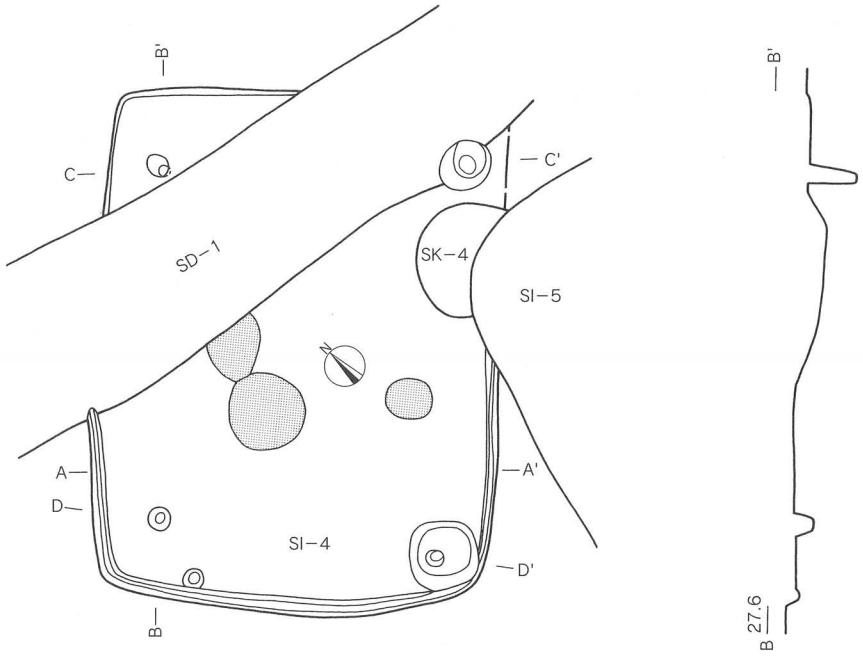
第５号住居跡（ＳＩ－５）は、調査区の北側で第４号住居跡（ＳＩ－４）を掘切り第４号土坑（ＳＫ－４）に切られている。規模は東西径7.68m・南北径7.05m・深さ0.45mを計測し、東西方向に長軸を有する隅丸長方形状の住居跡で、方位を北西方向のＮ－75°－Ｗに有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は全周している。床面は比較的しっかりした貼床で、柱穴は４本認められた。炉跡は中央西側で新旧があり、楕円形状で小型の炉（炉Ａ）が新炉で掘込め炉であり、旧炉は直床炉で共に良く焼けている。貯蔵穴は南東部（貯Ａ）と南西部（貯Ｂ）に掘込まれており、南西部の貯蔵穴には造り替えが認められる。また貯蔵穴Ｂの東側には、長方形状の掘込みと間仕切り溝がある。

土層は、住居跡内覆土として暗褐色土・黒褐色土・褐色土・黒色土・暗赤褐色土が堆積しており、貯蔵穴内には褐色土・赤褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積している。堆積状況は、自然堆積を示している。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・台付甕・器台・土玉等が破片や完形品で出土しているが、床面及び床面付近からの出土は破片のみであり図示出来たのは土師器台付甕（第29図２）・器台（同３）・甕（同７・８）土玉（第30図43～45）の７点である。これらの遺物は、その出土位置から本跡廃棄後の流入と判断される。このことから本跡は、古墳時代・五領期の住居跡と判断される。

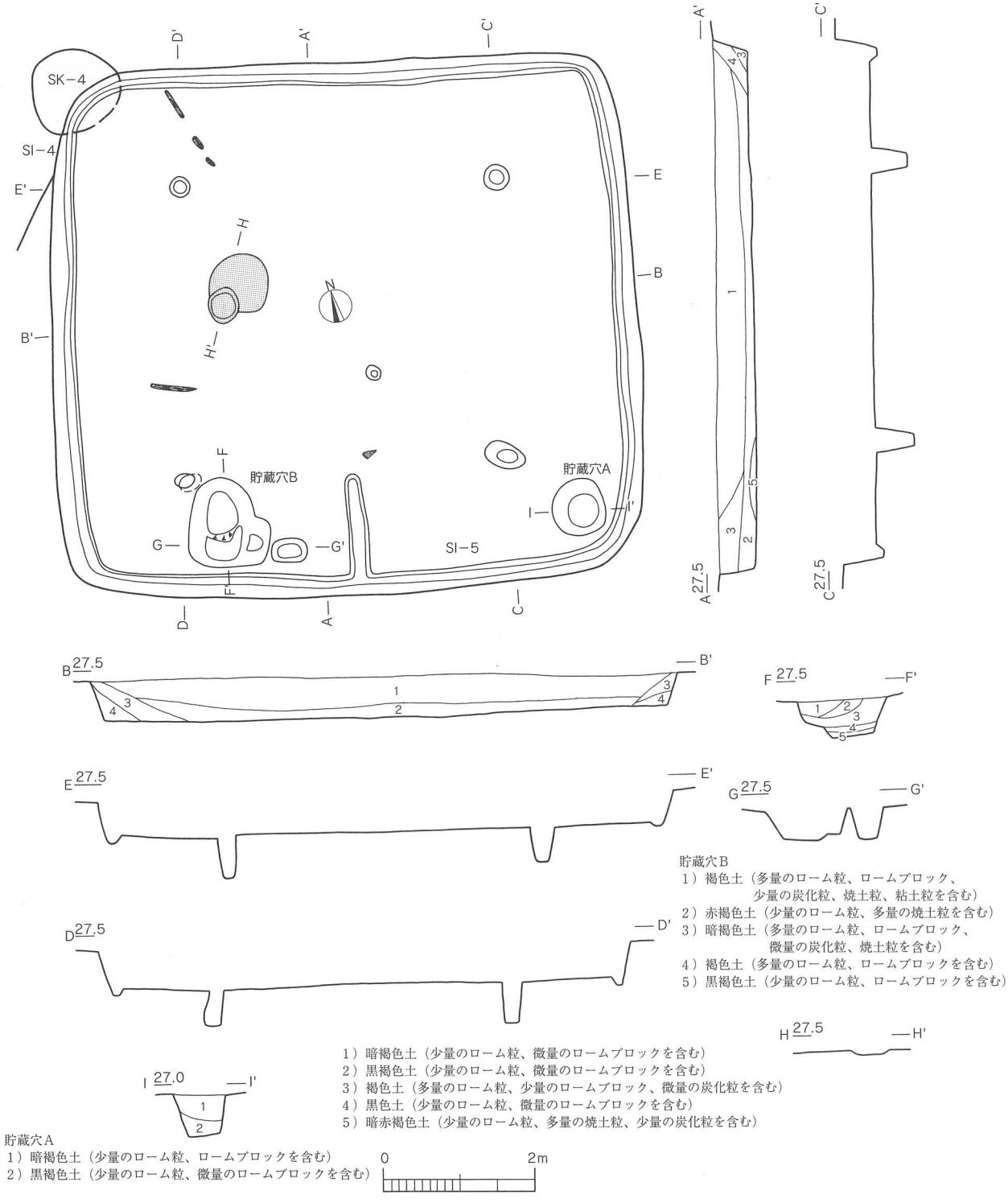
第６号住居跡（第９・29・30図、第３・４表：PL７）

第６号住居跡（ＳＩ－６）は、調査区の北東部で第７号住居跡（ＳＩ－７）を掘切った状況で発見されているが、住居跡の東側は調査区域外に所在している。確認面での規模は、東西径4.00m・南北径7.00m・深さ0.45mを計測し、南北方向に長軸を有し隅丸方形状を呈する住居跡と推定され、方位はＮ－17°－Ｗのようである。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は全周するようである。床面は直床状で、柱穴は５本（Ｐ１～５）認められた。炉跡は中央よりやや西側の北西部に所在し、楕円形状の直床炉で良く焼けている。貯蔵穴は南西部に掘込まれており、楕円形状を呈している。また貯蔵穴の東側・西側・南側には、長方形のやや深い掘込みが壁と並行して３本掘込まれており、東側中央

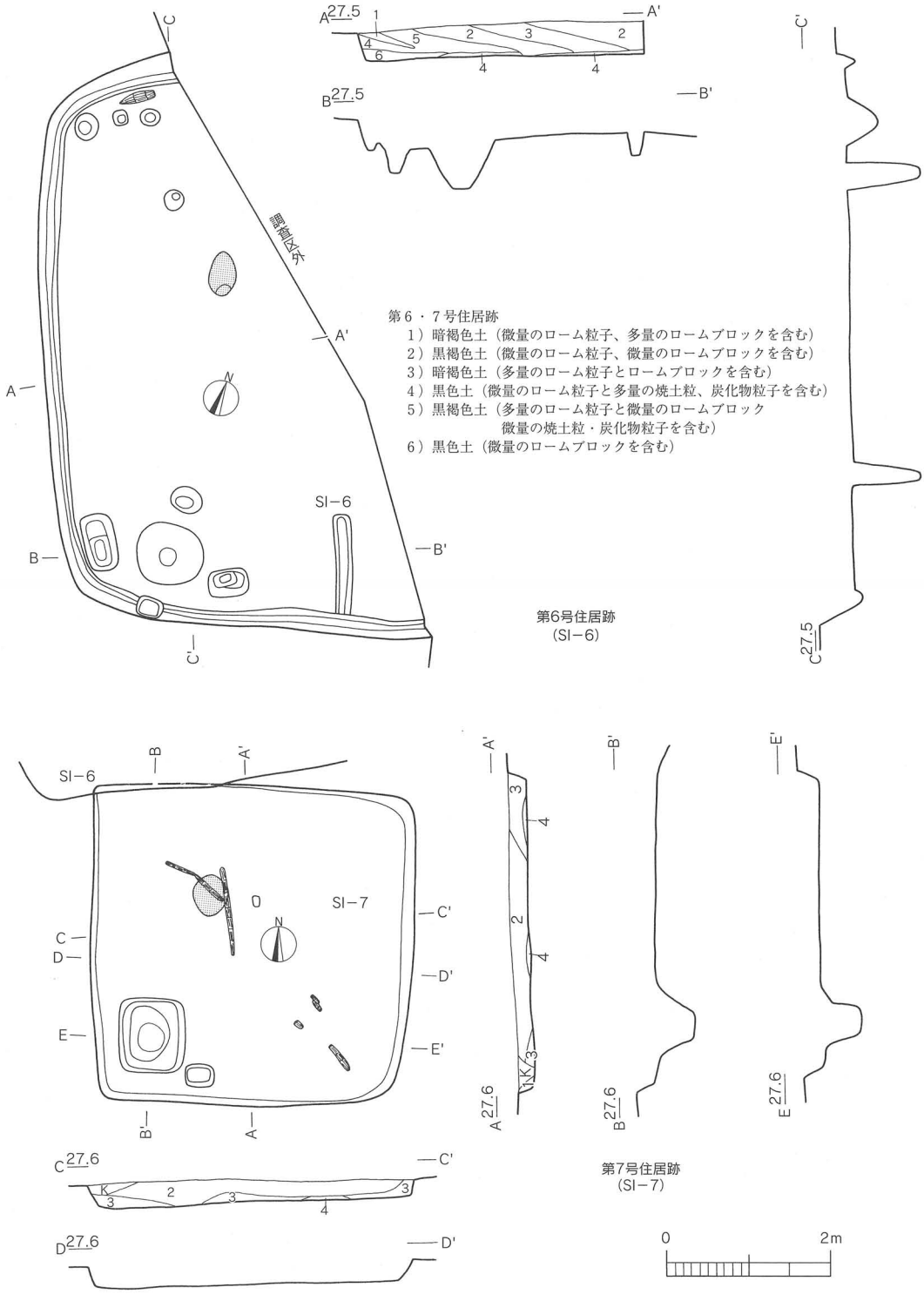


1）暗褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

第７図　第４号住居跡実測図



第８図　第５号住居跡実測図



第９図　第６号・第７号住居跡実測図

部には間仕切り溝が南側壁溝まで掘込まれている。

土層は覆土として暗褐色土・黒褐色土・黒色土が堆積しており、各々２層に分類される。土層の堆積状況は、自然堆積を示している。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・椀・器台等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器高坏・器台・土玉等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、甕（第29図９）高坏（同10）・器台（同11・12）・土玉（第30図46・47）の６点である。これらの出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第７号住居跡（第９・29図、第３表：PL６）

第７号住居跡（ＳＩ－７）は、調査区の北東部で第６号住居跡（ＳＩ－６）に北西部の壁を掘切られている。規模は東西径3.90m・南北径3.92m・深さ0.16mを計測し、南北方向に長軸を有し隅丸方形状を呈する住居跡で、方位を北向きのＮ－３°－Ｅに有している。壁は斜めに掘込まれているが、壁溝は認められなかった。床面は直床状で柱穴は認められず、炉跡は北西部に所在する直床炉で楕円形を呈し良く焼けている。貯蔵穴は南西部で、隅丸長方形状の浅い掘込みの中央に掘込まれており、不正楕円形状を呈している。また貯蔵穴の南東部には、南壁と並行するように長方形のやや浅い掘込みが所在している。

土層は黄褐色土・明褐色土・褐色土・黒褐色土が堆積しており、第４層の黒褐色土は多量の炭化物粒を含み床面上に堆積しているが、土層の堆積状況は埋め戻しである。土層内に炭化物や床面上に炭化材が認められるが、床面は焼けておらず廃棄後の火災と判断される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台等が出土しており、床面及び床面付近からは土師器甕・器台が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器甕（第29図４）・器台（同13）の２点である。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

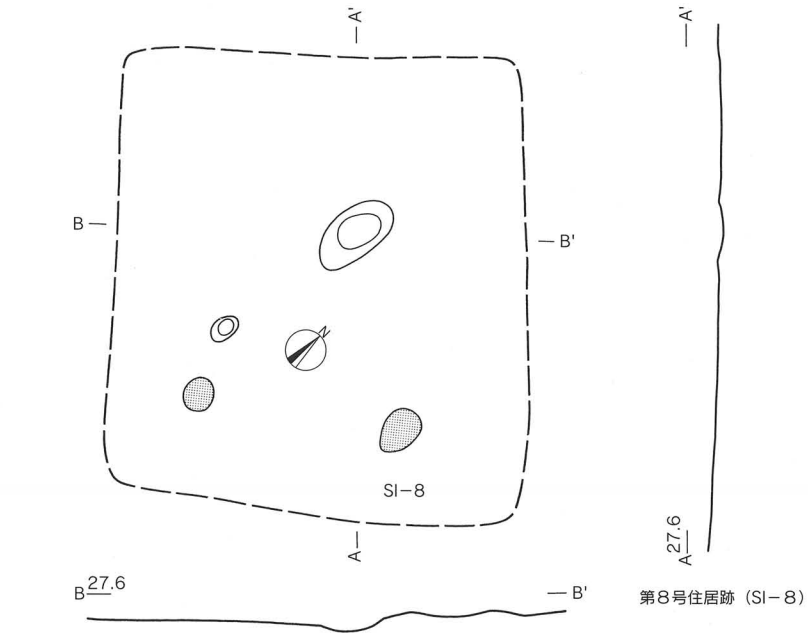
第８号住居跡（第10・30図）

第８号住居跡（ＳＩ－８）は、調査区の北東部で床面と炉跡で確認された住居跡である。推定規模は東西径4.40m・南北径4.90mを計測し、南北方向に長軸を有し隅丸長方形状を呈する住居跡で、方位を北西方向のＮ－41°－Ｗに有するようである。壁と壁溝は認められず床面は堅緻な貼床である。柱穴は１本認められたのみで、炉跡は中央部でやや北東方向を向き楕円形状の掘込め炉で良く焼けている（炉Ａ）。また旧炉が２ヶ所（炉Ｂ・Ｃ）南東部に所在しており、楕円形状を呈する直床炉で良く焼けている。

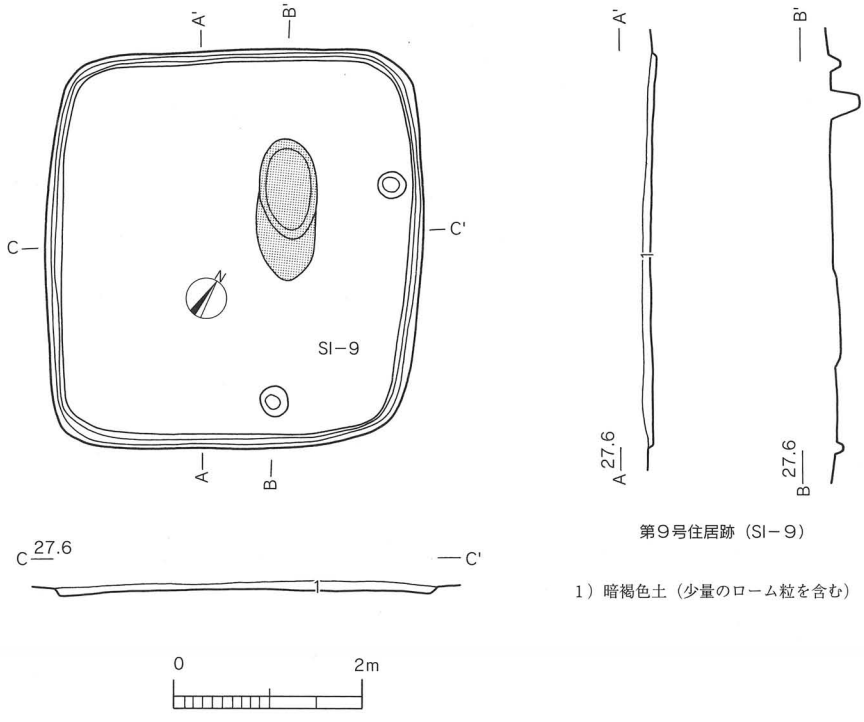
遺物は少量の土師器甕・高坏等の小破片が出土したのみで図示可能な遺物は認められなかった。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉の住居跡と判断される。

第９号住居跡（第10・29・30図、第３・４表：PL２・７）

第９号住居跡（ＳＩ－９）は、調査区の北東部に所在しており、東西径4.00m・南北径4.20m・深さ0.05mを計測し、南北方向に長軸を有する隅丸方形状の住居跡で、北西向きのＮ－37°－Ｗに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は全周している。床面は直床状で、柱穴は２本



第8号住居跡（SI－8）



第9号住居跡（SI－9）

1）暗褐色土（少量のローム粒を含む）

第10図　第8号・第9号住居跡実測図

（Ｐ１・２）認められたが貯蔵穴は認められなかった。炉跡は北東部に所在しており、楕円形の大型炉で新旧を有している。新炉（炉Ａ）は掘込め炉であるが、旧炉（炉Ｂ）は直床炉で共に良く焼けている。

土層は暗褐色土が１層堆積しているのみであり、出土遺物としては土師器甕・高坏・土玉等が覆土内より破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器高坏等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器高坏（第29図５）・土玉（第30図48・49）の３点である。これらの出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第10号住居跡（第11図：PL２）

第10号住居跡（ＳＩ－10）は、調査区の中央東側で第11号住居跡（ＳＩ－11）に南西部を掘切られている。規模は東西径4.28m・南北径4.78m・深さ0.09mを計測し、南北方向に長軸を有し隅丸長方形状を呈する住居跡で、北東向きのＮ－53°－Ｅに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は北壁東側と東壁の部分で認められたのみである。柱穴は南東部で１本（Ｐ１）認められたのみで、貯蔵穴は認められなかった。炉跡は３ヶ所（炉Ａ～Ｃ）で認められており、炉Ａが新炉と判断される。炉跡は直床炉で、良く焼けている。

土層は黒色土と褐色土が堆積しており、自然堆積のようである。出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台等が破片で出土しているが、図示可能な遺物は出土しなかった。

出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第11号住居跡（第12・30図、第４表：PL２・７）

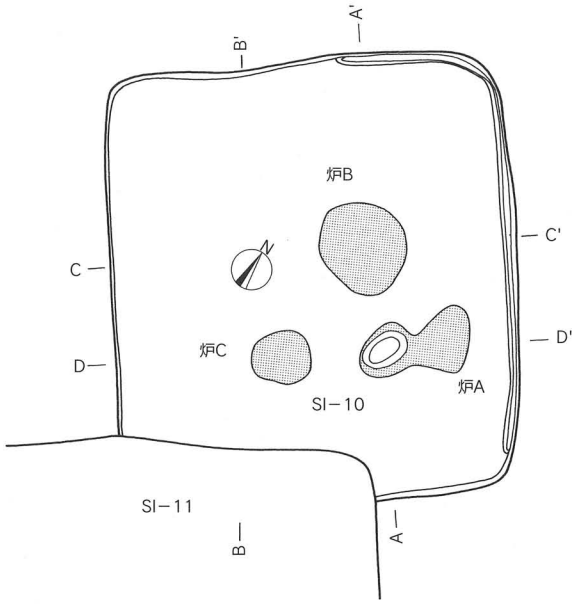
第11号住居跡（ＳＩ－11）は、調査区の中央東側で第10号住居跡（ＳＩ－10）を堀切り、第１号墳（ＴＭ－１）の西側周溝に西壁の上面を掘切られている。規模は東西径6.35m・南北径6.20m・深さ0.21mを計測し、東西方向に長軸を有し隅丸長方形状を呈する住居跡で、北西方向のＮ－29°－Ｗに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、南壁がやや弧を描いて掘込まれている。壁溝は全周しており、柱穴は７本認められたがＰ１～４の４柱穴には建て替えが認められる。炉跡は新旧を含め４ヶ所（炉Ａ～Ｄ）で認められ、中央東側に所在する楕円形の炉Ａが新炉で北東方向を向いている。炉Ａは掘込め炉であるが、炉Ｂ～Ｄは直床炉であり共に良く焼けている。貯蔵穴は南東部に掘込まれており、長方形状を呈している。

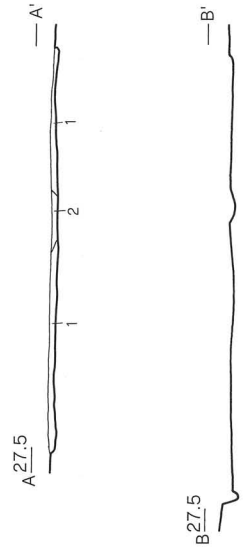
土層は黒色土・褐色土・暗赤褐色土が堆積しており、暗赤褐色土には焼土粒子と炭化材・炭化物粒子を含んでいる。堆積状況は自然堆積である。炭化材は本跡の建築材で、床面上０～10cmよりの出土であるが、床面も焼けていないことから本跡廃棄後まもなくの火災によることと判断される。

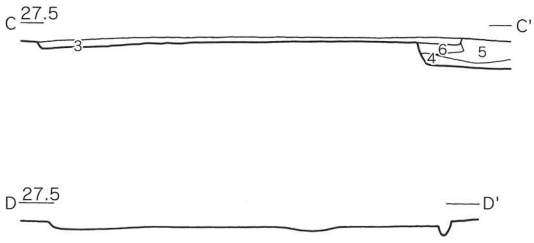
出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏等が破片で出土しているが、床面及び床面付近からは土玉が出土したのみである。これらの出土遺物で図示できたのは、土玉（第30図50）のみである。

第12号住居跡（第13・30図、第４表：PL２・７）

第12号住居跡（ＳＩ－12）は、調査区の東側で第１号墳（ＴＭ－１）東側周溝に西側を掘切られている。規模は東西径3.80m（推）・南北径4.50m・深さ0.15mを計測し、南北方向に長軸を有する隅丸

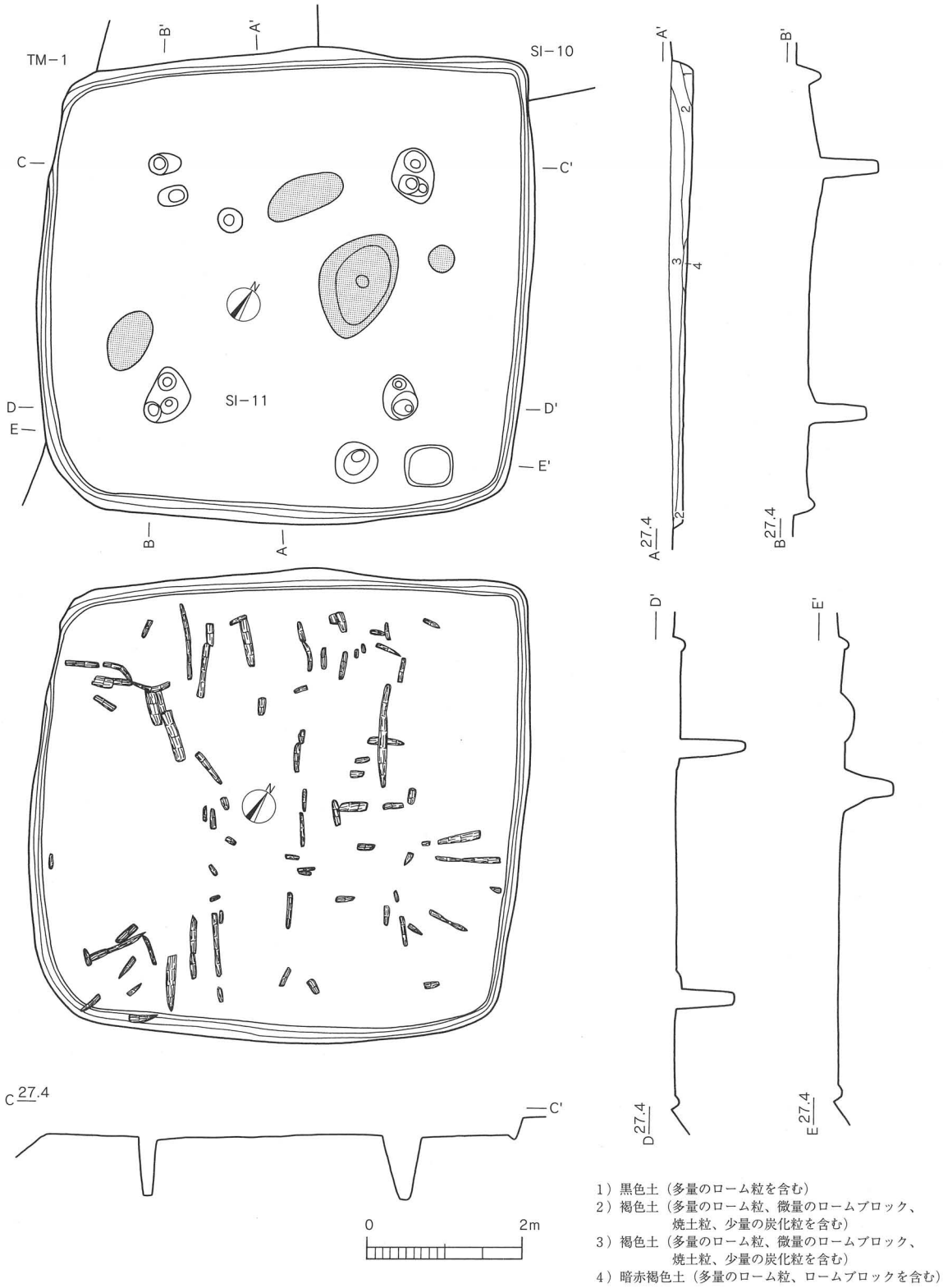




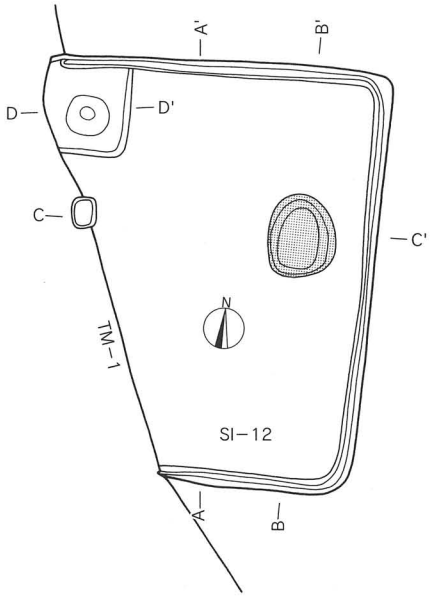


1）暗褐色土（少量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）暗褐色土（少量のローム粒、少量の焼土粒を含む）
3）黒色土（少量のローム粒を含む）
4）褐色土（微量のロームブロック、焼土粒を含む
　少量の炭化粒を含む）
5）褐色土（多量のローム粒、微量のロームブロック、
　焼土粒を含む）
6）暗赤褐色土（多量の焼土粒、少量のローム粒、
　炭化物を含む）

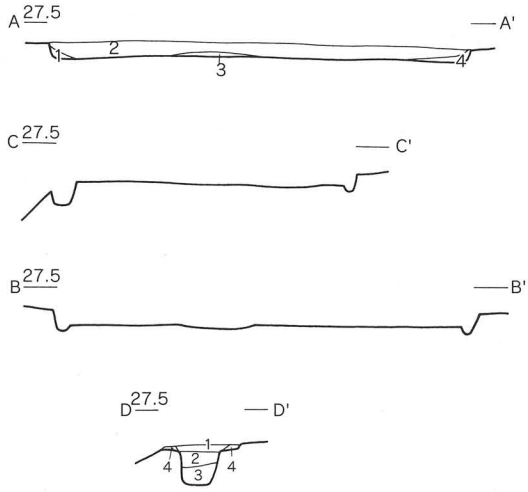
第11図　第10号住居跡実測図



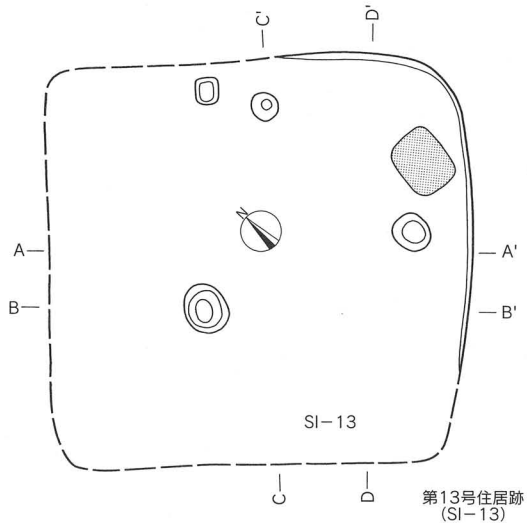
第12図　第11号住居跡実測図



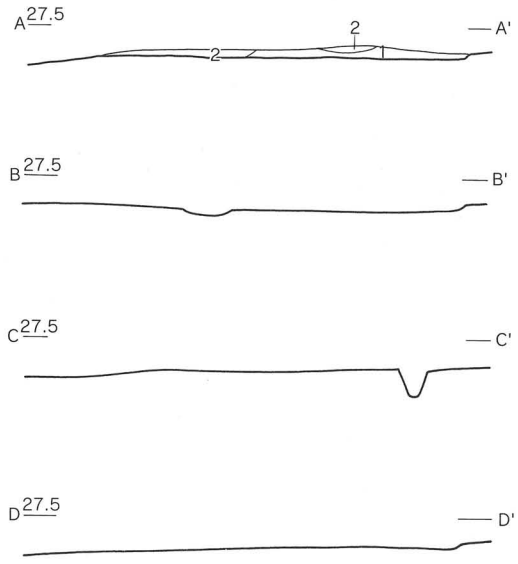
第12号住居跡
(SI-12)



貯蔵穴
1）暗褐色土（少量のローム粒を含む）　1）褐色土（少量のローム粒を含む）
2）黒褐色土（少量のローム粒を含む）　2）褐色土（多量のローム粒を含む）
3）黒褐色土（微量のローム粒を含む）　3）暗褐色土（微量のローム粒を含む）
4）褐色土（多量のローム粒を含む）　4）褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）



第13号住居跡
(SI-13)



1）褐色土（多量のローム粒を含む）
2）暗褐色土（多量のローム粒、少量の焼土粒を含む）

第13図　第12号・第13号住居跡実測図

長方形状の住居跡で、Ｎ－０°－Ｅに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は全周するようである。床面は直床状で、柱穴は認められなかったが貯蔵穴の南側に長方形の掘込みが１本認められたのみである。炉跡は中央東側に所在し、南北方向を向く楕円形の掘込め炉で良く焼けている。貯蔵穴は北西部に所在し、方形状の浅い掘込み内に楕円形状で掘込まれている。

土層は暗褐色土・黒褐色土・褐色土が堆積しており、貯蔵穴内には褐色土・暗褐色土が堆積している。土層の堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台・土玉等が破片や完形品で出土しているものの、床面及び床面付近からの出土は皆無である。これらの出土遺物で図示出来たのは、土玉２点（第30図51・52）のみである。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第13号住居跡（第13・30図、第４表：PL３・７）

第13号住居跡（ＳＩ－13）は、調査区の中央部に位置しているが、北壁・西壁・東壁中央北側は消失した状況で確認された。規模は東西径4.40m・南北径4.38m・深さ0.08mを計測するが、東西・南北径は推定である。北西を向く隅丸方形状の住居跡で、Ｎ－51°－Ｗに方位を有するようである。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、壁溝は認められなかった。床面は直床状で、柱穴は２本（Ｐ1・2）が不規則な配置で認められたのみである。炉跡は北西部に所在しており、楕円形状の掘込め炉で良く焼けているが、やや北東向きに設置されている。また北東部には長方形状の掘込みがあり、南東部には第34号土坑（ＳＫ－34）が掘込まれている。

土層は褐色土・暗褐色土が堆積しており、自然堆積の状況を示している。出土遺物としては覆土内より土師器甕・高坏・器台・土玉等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土玉が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土玉２点（第30図53・54）のみである。

出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

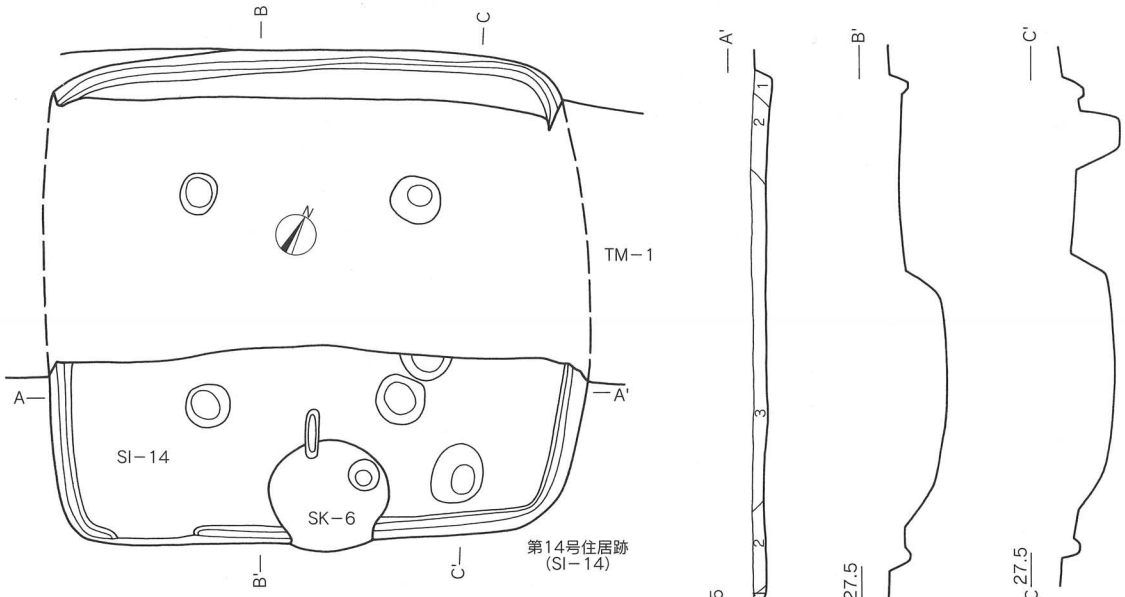
第14号住居跡（第14・29図、第３表：PL３）

第14号住居跡（ＳＩ－14）は、調査区の中央部で第１号墳（ＴＭ－１）と第６号土坑（ＳＫ－６）とに中央部と南壁中央部を掘切られている。規模は東西径5.70m・南北径5.20m・深さ0.15mを計測し東西方向に長軸を有し隅丸方形状を呈する住居跡で、北東向きと推定されることからＮ－65°－Ｅに方位を有するようである。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、東壁がやや湾曲している。壁溝は南西部を除き全周しており、柱穴は６本認められた。貯蔵穴は南東部に掘込まれており、楕円形状で北西方向を向いている。また中央南側には、第６号土坑に掘切られている間仕切り溝が認められた。

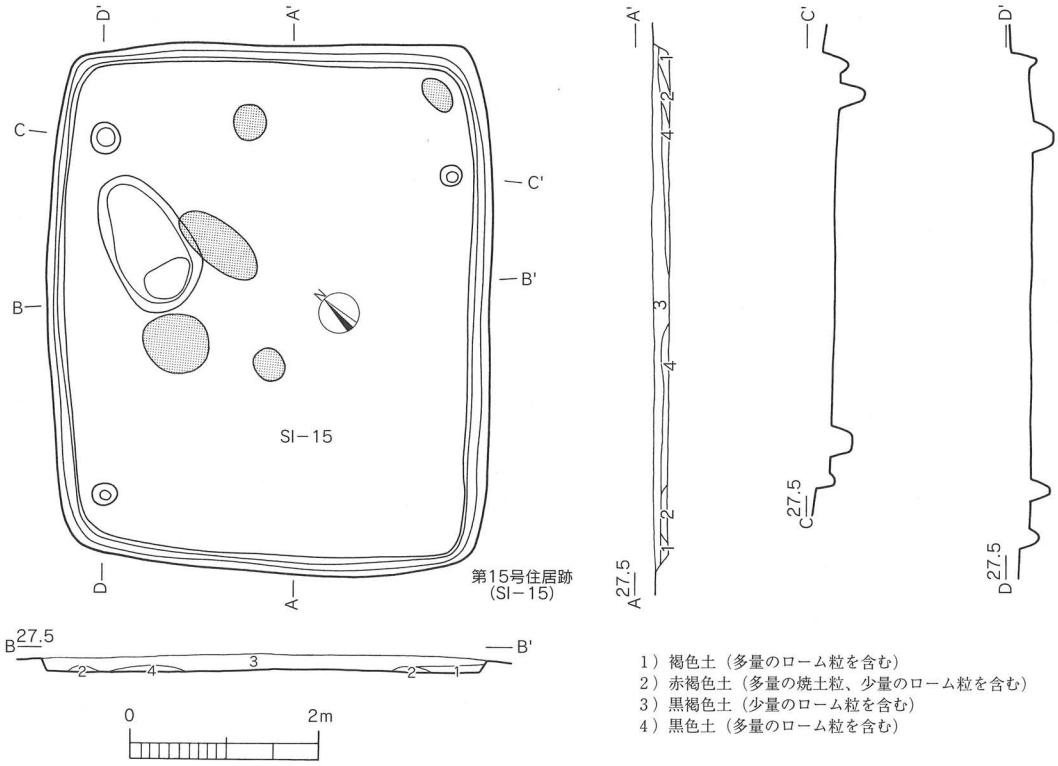
土層は褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積しており、自然堆積の状況を示している。出土遺物としては覆土内より土師器甕・高坏・器台・椀等が破片で出土しているが、床面及び床面付近からの出土は皆無である。これらの出土遺物で図示できたのは、覆土内より出土した土師器埦（第29図14）１点である。出土遺物から本跡は、古墳時代・五領期の住居跡と判断される。

第15号住居跡（第14・29・30図、第３・４表：PL３・６・７）

第15号住居跡（ＳＩ－15）は、調査区の北西部に所在しており東西径5.60m・南北径4.68m・深さ



1）褐色土（少量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）暗褐色土（少量のローム粒、多量のロームブロック、少量の焼土粒を含む）
3）黒褐色土（少量のローム粒を含む）



1）褐色土（多量のローム粒を含む）
2）赤褐色土（多量の焼土粒、少量のローム粒を含む）
3）黒褐色土（少量のローム粒を含む）
4）黒色土（多量のローム粒を含む）

第14図　第14号・第15号住居跡実測図

0.22mを計測し、北東方向に長軸を有する隅丸長方形状の住居跡で、方位を北東方向のN－47°－Eに有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は全周している。床面は直床状で、柱穴は3本認められたが小さく浅い掘込みの柱穴である。炉跡は新旧を有する炉跡で、5ヶ所（炉A～E）所在し楕円形状で北東を向く炉Aが新炉である。炉Aは掘込め炉であるが、旧炉は直床炉である。また北東部には、流入している焼土が堆積している。

土層は褐色土・赤褐色土・黒褐色土・黒色土が堆積しており、第2層の赤褐色土は多量の焼土粒子を含んでいるが、下位の床面は焼けていない。堆積状況は、自然堆積のようである。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台・椀等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器器台・土玉等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器椀（第29図15）・器台（同16）・高坏（同17）・土玉（第30図55）の4点である。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第16号住居跡（第15図：PL3）

第16号住居跡（SI－16）は、調査区の中央部西側で第1号墳（TM－1）の北側周溝に南壁を掘切られている。規模は東西径6.12m・南北径4.90m・深さ0.36mを計測し、東西方向に長軸を有し1辺6m程度の隅丸方形状を呈する住居跡であり、南西向きのN－33°－Wに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は北壁の部分を除き全周している。床面は直床状で、柱穴は4本認められた。炉跡は中央北西部に所在し、北西向きで楕円形状を呈する掘込め炉で良く焼けている。貯蔵穴は北壁の各コーナー付近に2基（貯A・B）掘込まれており、共に隅丸長方形状を呈している。西側の貯蔵穴（貯A）が新貯蔵穴である。

土層は褐色土と黒褐色土が覆土として堆積しており、貯蔵穴Aには暗褐色土がBには褐色土が堆積しているが、Bは埋められている。堆積状況としては、自然堆積である。

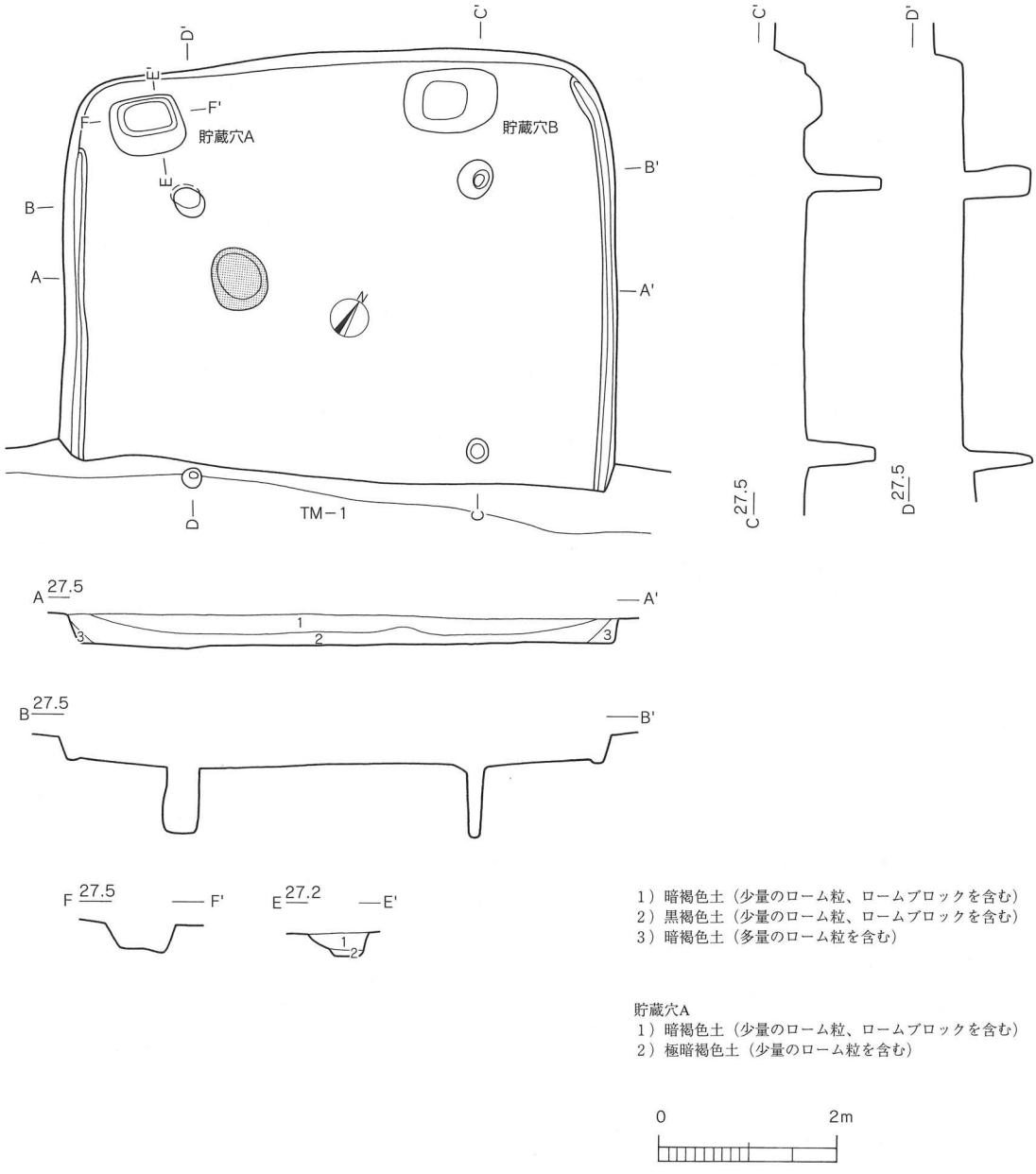
出土遺物としては、覆土内と貯蔵穴内より土師器甕・高坏等が出土しているが、床面及び床面付近からは土師器甕・高坏が出土している。これらの遺物は、破片で出土しているため図示不能である。出土遺物から本跡は、古墳時代・五領期の住居跡と判断される。

第17号住居跡（第16・29・30図、第3・4表：PL3・6・7）

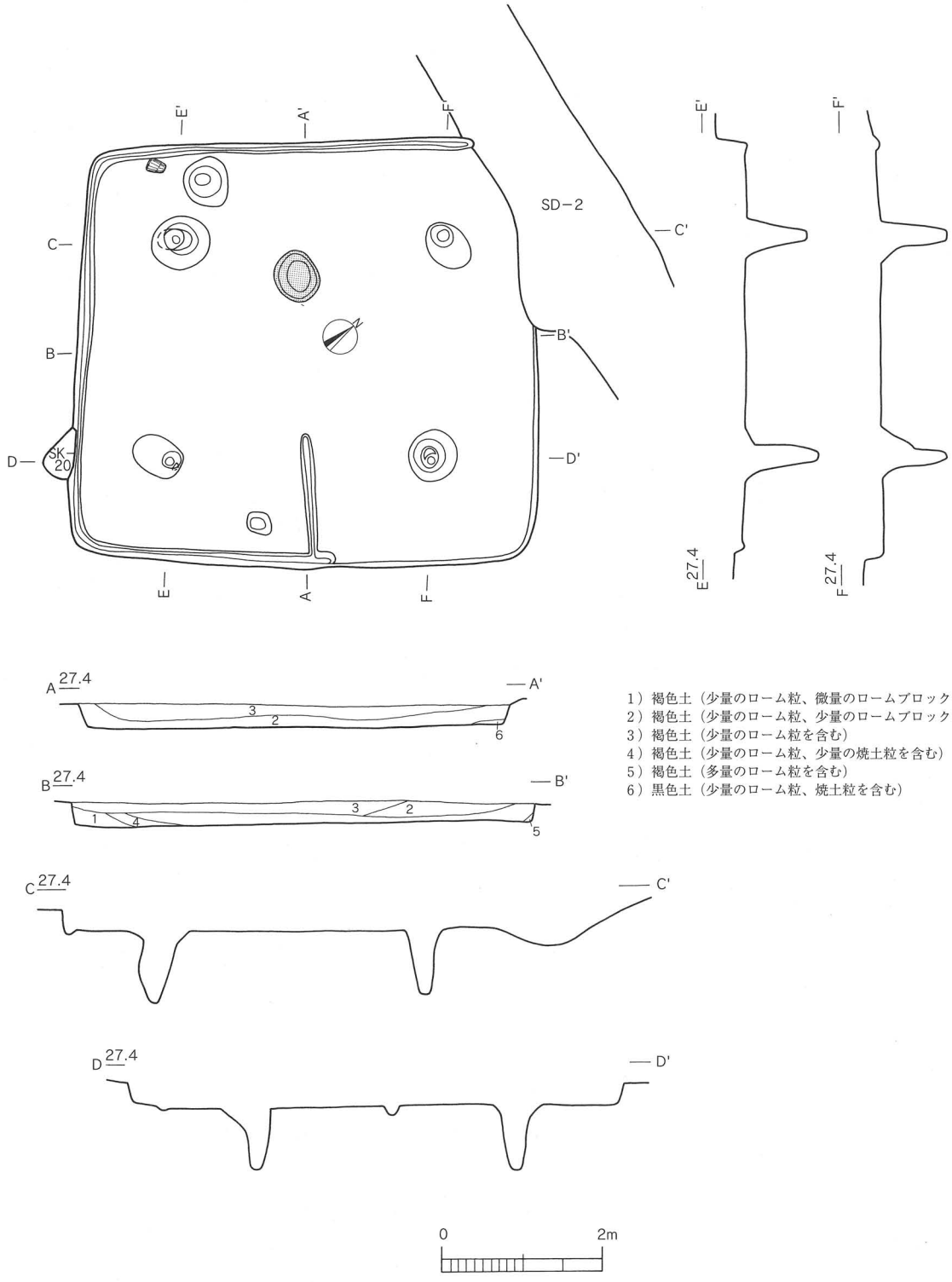
第17号住居跡（SI－17）は、調査区の中央西側で第2号溝と第20号土坑（SD－2・SK－20）に北東壁と西壁の一部を掘切られている。規模は東西径5.73m・南北径5.30m・深さ0.30mを計測し東西方向に長軸を有し隅丸方形状を呈する住居跡で、N－44°－Wに方位を有する北西向きの住居跡である。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は東壁と南壁東側を除き全周している。床面は直床状で柱穴は5本認められている。炉跡は中央北側に所在し、楕円形を呈する掘込め炉で中央部が良く焼けている。貯蔵穴は北西部に掘込まれており、楕円形状を呈している。また中央南側には、間仕切り溝が南側壁溝まで掘込まれている。

土層としては褐色土・黒色土が堆積しており、褐色土が厚く堆積している。堆積状況は、自然堆積の状況を示している。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台・椀等が破片で出土しており、床面及び床面



第15図　第16号住居跡実測図



1）褐色土（少量のローム粒、微量のロームブロックを含む）
2）褐色土（少量のローム粒、少量のロームブロックを含む）
3）褐色土（少量のローム粒を含む）
4）褐色土（少量のローム粒、少量の焼土粒を含む）
5）褐色土（多量のローム粒を含む）
6）黒色土（少量のローム粒、焼土粒を含む）

第16図　第17号住居跡実測図

付近からは土師器器台・高坏・土玉等が出土しており、貯蔵穴内からは土師器甕・埦等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器器台（第29図18・20）・埦（同19）・土玉（第30図56）の４点である。出土遺物から本跡は古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第18号住居跡（第17図：PL３）

第18号住居跡（ＳＩ－18）は、調査区の中央西側で第１号墳（ＴＭ－１）西側周溝に西壁を掘切られている。規模は東西径2.50m・南北径3.30m・深さ0.05mを計測し、北西向きで隅丸方形を呈する住居跡で、方位をＮ－34°－Ｗに有している。壁は斜めに掘込まれているが東壁南側と南壁は消失していることから本跡は、１辺３m台の住居跡と推定される。壁溝は全周しておらず、床面は直床状で柱穴は南側に２本認められたのみである。貯蔵穴は認められず、炉跡は北東部に所在し楕円形状を呈する炉跡で、良く焼けている直床炉である。

土層は黒褐色土が１層堆積しているのみであり、出土遺物としては土師器甕・高坏・器台が破片で少量出土したのみで、図示可能な遺物は出土しなかった。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第19号住居跡（第17・29・30図、第３・４表：PL３・６・７）

第19号住居跡（ＳＩ－19）は、調査区の南西部で第１号墳と第２号溝（ＴＭ－１・ＳＤ－２）に西壁と南東部を掘切られている。規模は東西径3.70m・南北径4.20m・深さ0.20mを計測し、東西方向に長軸を有し北西向きで隅丸長方形状を呈する住居跡であり、Ｎ－39°－Ｗに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、南西部の壁は消失している。壁溝は認められず、床面は直床状を呈している。柱穴は３本認められたのみであり、炉跡は楕円形の掘込め炉で北東部に所在し良く焼けている。貯蔵穴は南東部に掘込まれており、方形状を呈している。

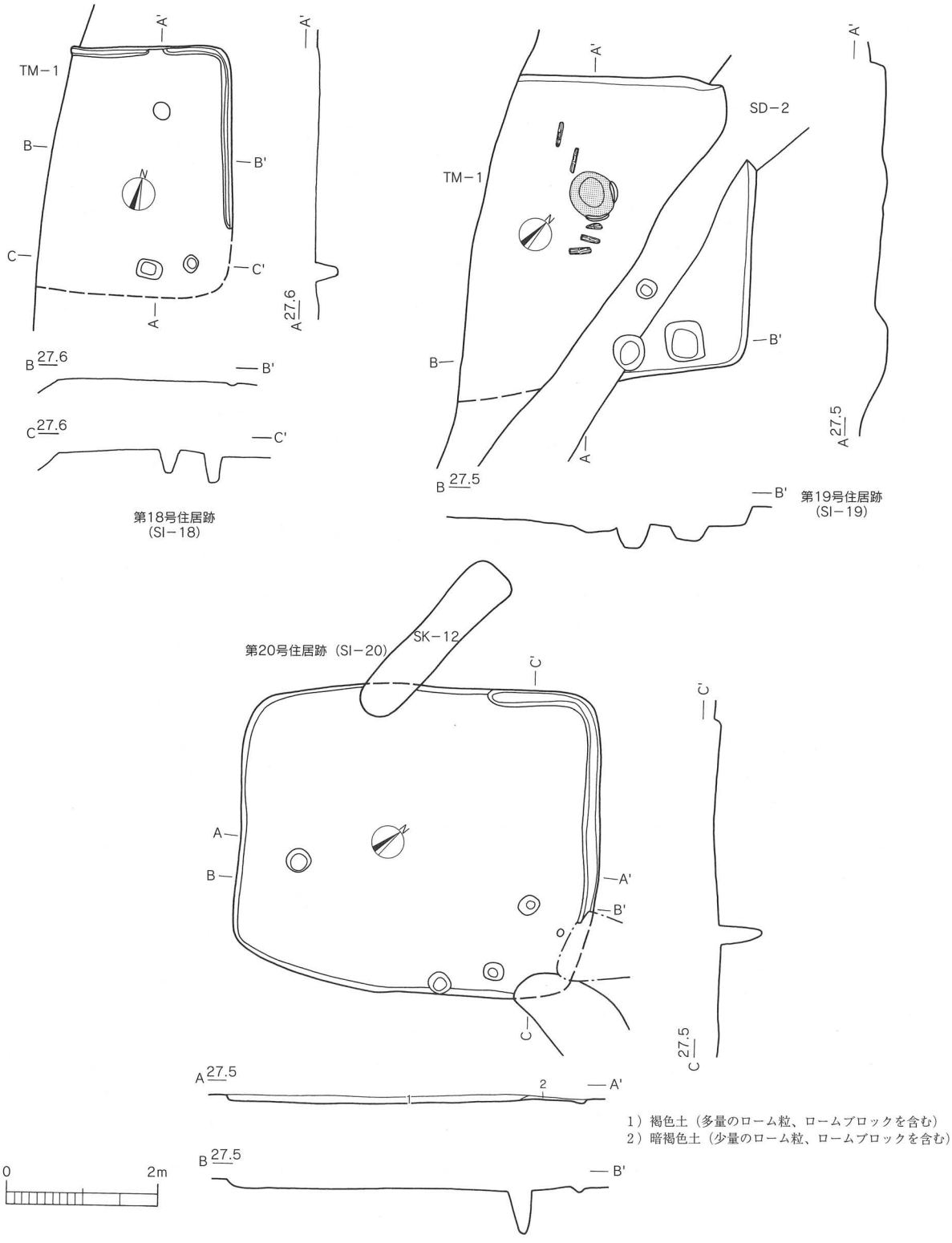
土層は暗褐色土・褐色土・黒褐色土が住居跡内に堆積しており、貯蔵穴内には褐色土が堆積している。堆積状況は、自然堆積である。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・埦・高坏等が破片で出土しており、床面及び床面付近からは土師器甕・器台・椀・土玉等が出土している。これらの出土遺物で図示できたのは、土師器甕（第29図21～23）・土玉（第30図57）の４点である。出土遺物から本跡は、古墳時代・五領期の住居跡と判断される。

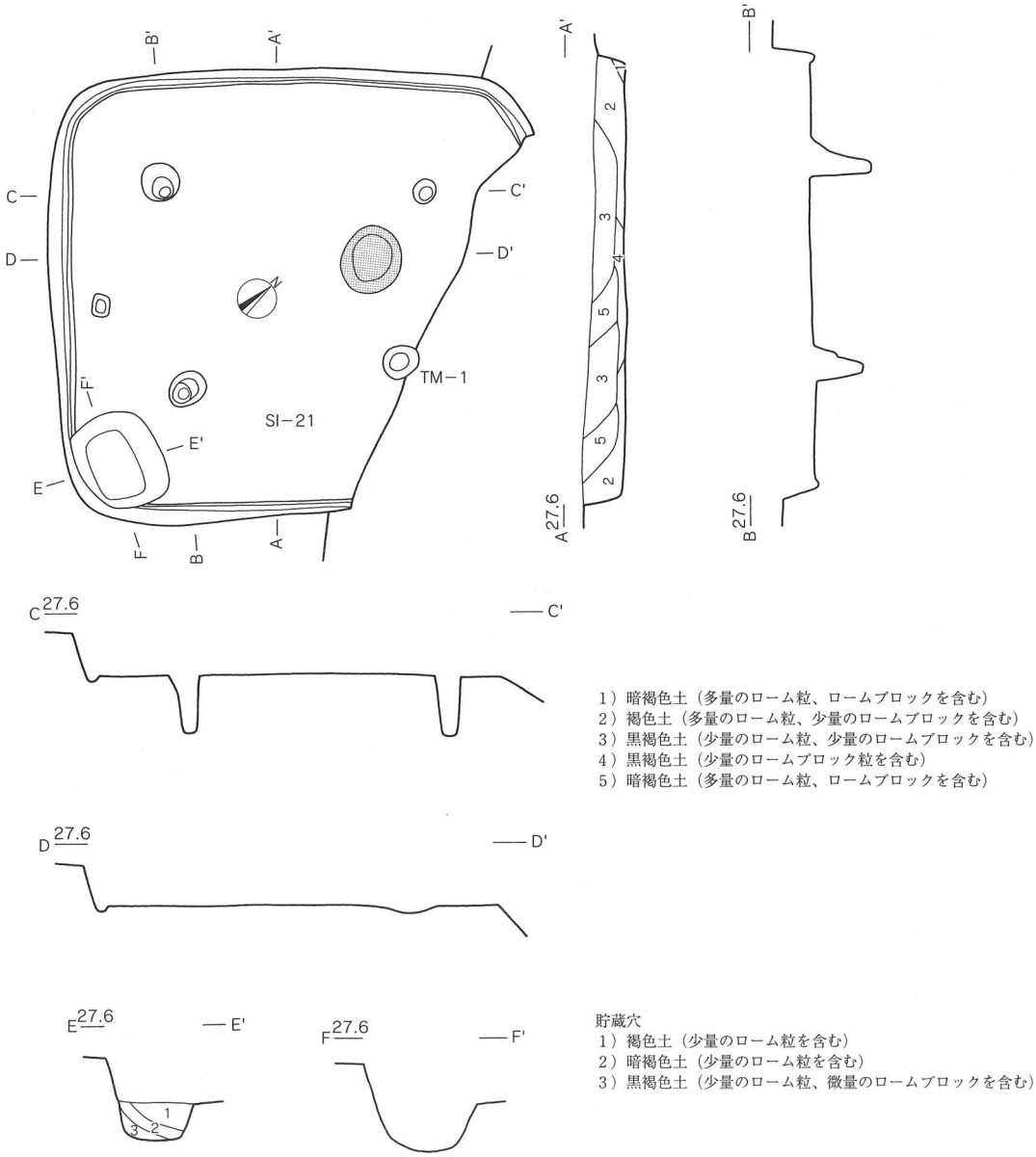
第20号住居跡（第17図：PL３）

第20号住居跡（ＳＩ－20）は、調査区の南西部で第２号溝と第12号土坑（ＳＤ－２・ＳＫ－12）に掘切られている。規模は東西径4.72m・南北径4.05m・深さ0.13mを計測し、東西方向に長軸を有し隅丸長方形状を呈する住居跡で、北東向きのＮ－45°－Ｅに方位を有するようである。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、南東部の壁は撹乱により消失している。壁溝は、東側でのみ認められた。床面は直床状で、柱穴は４本認められたが不規則な配置である。炉跡と貯蔵穴は、認められなかった。

土層は褐色土・暗褐色土とが堆積しており、堆積状況は自然堆積のようである。出土遺物としては覆土内より土師器甕・高坏・器台・炭化材等が出土しているが、図示可能な遺物は皆無である。また



第17図　第18号・第19号・第20号住居跡実測図



1）暗褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）褐色土（多量のローム粒、少量のロームブロックを含む）
3）黒褐色土（少量のローム粒、少量のロームブロックを含む）
4）黒褐色土（少量のロームブロック粒を含む）
5）暗褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

貯蔵穴
1）褐色土（少量のローム粒を含む）
2）暗褐色土（少量のローム粒を含む）
3）黒褐色土（少量のローム粒、微量のロームブロックを含む）

第18図　第21号住居跡実測図

覆土内よりの炭化材は、本跡廃棄後の流入である。出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第21号住居跡（第18図：PL４）

第21号住居跡（ＳＩ－21）は、調査区の南西部で第１号墳（ＴＭ－１）西側周溝に北壁を掘切られている。規模は東西径5.30m・南北径4.90m・深さ0.47mを計測し、東西方向に長軸を有し隅丸方形状を呈する住居跡であり、北東向きのＮ－40°－Ｅに方位を有している。壁はほぼ垂直に掘込まれており、壁溝は貯蔵穴の部分を除き全周するようである。床面は直床状で、柱穴は５本認められほぼ規則的な配置である。炉跡は中央東側に所在し、北西を向く楕円形の掘込め炉で良く焼けている。貯蔵穴は南東部に掘込まれており、隅丸長方形状を呈する大きな貯蔵穴である。

土層は覆土として暗褐色土・褐色土・黒褐色土とが堆積しており、貯蔵穴内には褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積している。堆積状況は、自然堆積である。

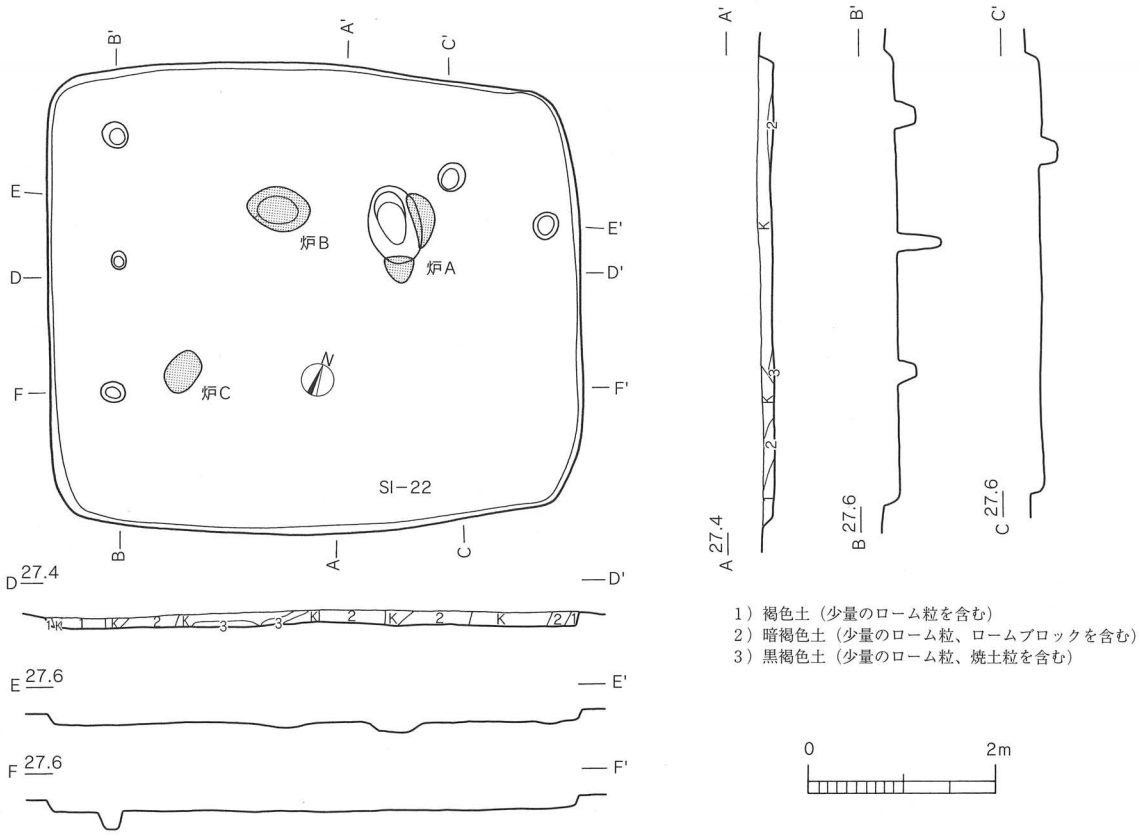
出土遺物としては、覆土内より土師器甕・高坏・器台等が破片で出土しているのみであり、図示可能な遺物は出土しなかった。遺物等から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。

第22号住居跡（第19・29図、第３表：PL６）

第22号住居跡（ＳＩ－22）は、調査区の南東部に所在しており東西径5.62m・南北径5.00m・深さ0.16mを計測し、東西方向に長軸を有する隅丸長方形状の住居跡で、方位をＮ－70°－Ｅに有している。壁はほぼ垂直に掘込まれているが、壁溝は認められなかった。柱穴は５本認められたが、不規則な配置である。炉跡は３ヶ所（炉Ａ～Ｃ）で認められており、炉Ａが新炉のようである。炉跡は中央北側で東向きの炉跡から、北東部で北西向きの炉跡に変更されたようである。共に掘込め炉で、良く焼けている。炉Ｃは地床炉である。貯蔵穴は認められず、南西部に廃棄後の流入による焼土が堆積している。土層は褐色土・暗褐色土・黒褐色土が堆積しているが、著しい撹乱を受けている。土層の堆積状況は、自然堆積と推定される。

出土遺物としては、覆土内より土師器甕・椀・器台等が出土しており、床面及び床面付近からは土師器甕・鉢等が出土している。これらの出土遺物で図示出来たのは、土師器鉢（第29図24）・装飾器台（第30図25）の２点である。

出土遺物から本跡は、古墳時代・和泉期の住居跡と判断される。



第19図　第22号住居跡実測図

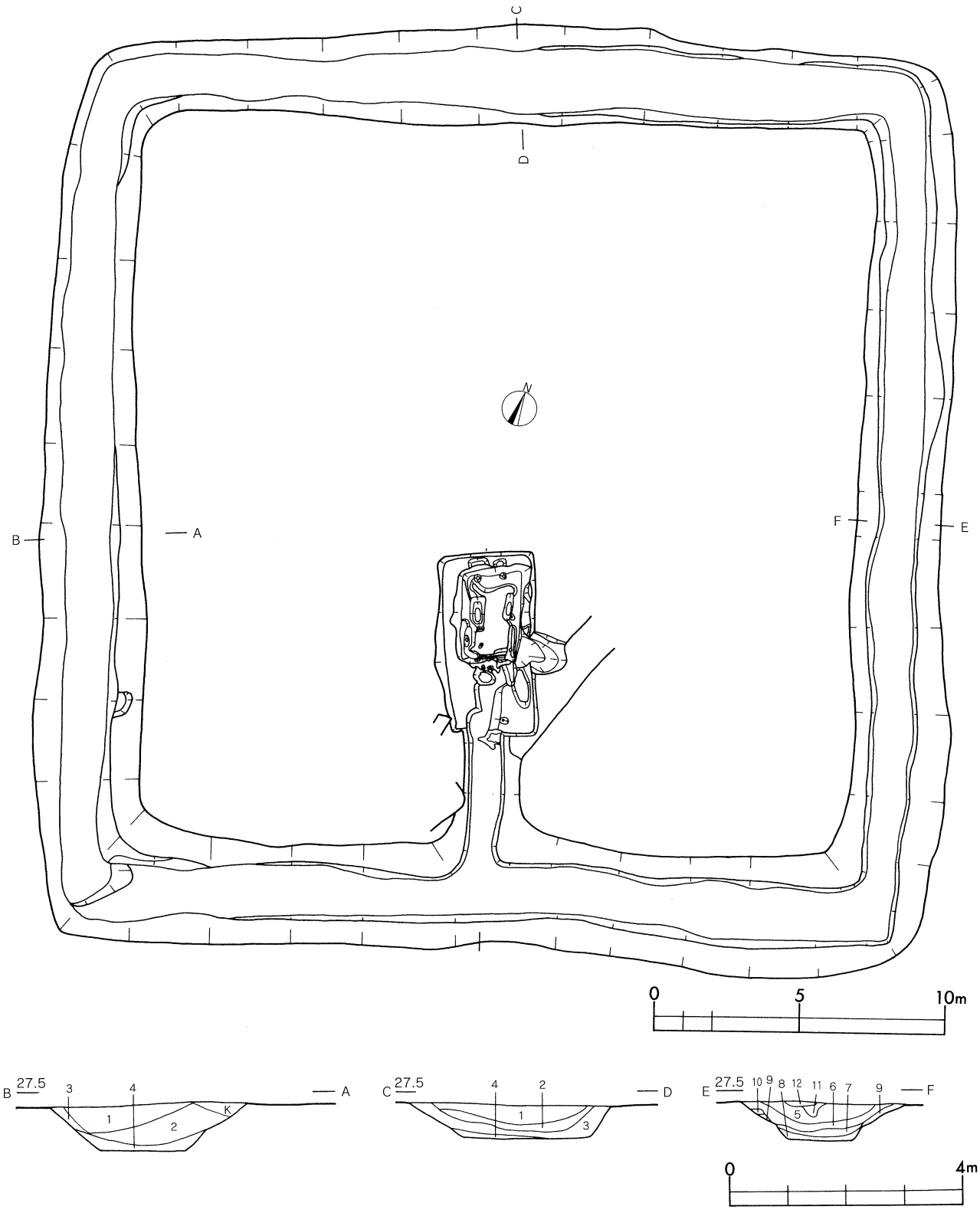
2．古　墳　（第20～22・30図、第３～５表：PL５～７）

調査区の中央部から南側にかけて古墳１基（第１号墳・ＴＭ－１）が認められている。この古墳は東西径39.00m・南北径32.40mを計測し、Ｎ－20°－Ｗに方位を有する方墳であるが、主体部が著しく破壊されている。

主体部は中央南側に所在しているが、長さは東側と西側とでは異なっている。東側は6.40m、西側は6.05mと西側が短くなっている。主体部は幅3.50mで、深さは0.65mを計測する。石棺部は主体部の中央北側で長さ3.00m・幅2.50m・深さ0.60mを計測するが、石棺材は不規則な配置で南側中央に１枚残っている以外すべて破壊されている。石棺の周囲0.50mは石棺の裏込め部分である。

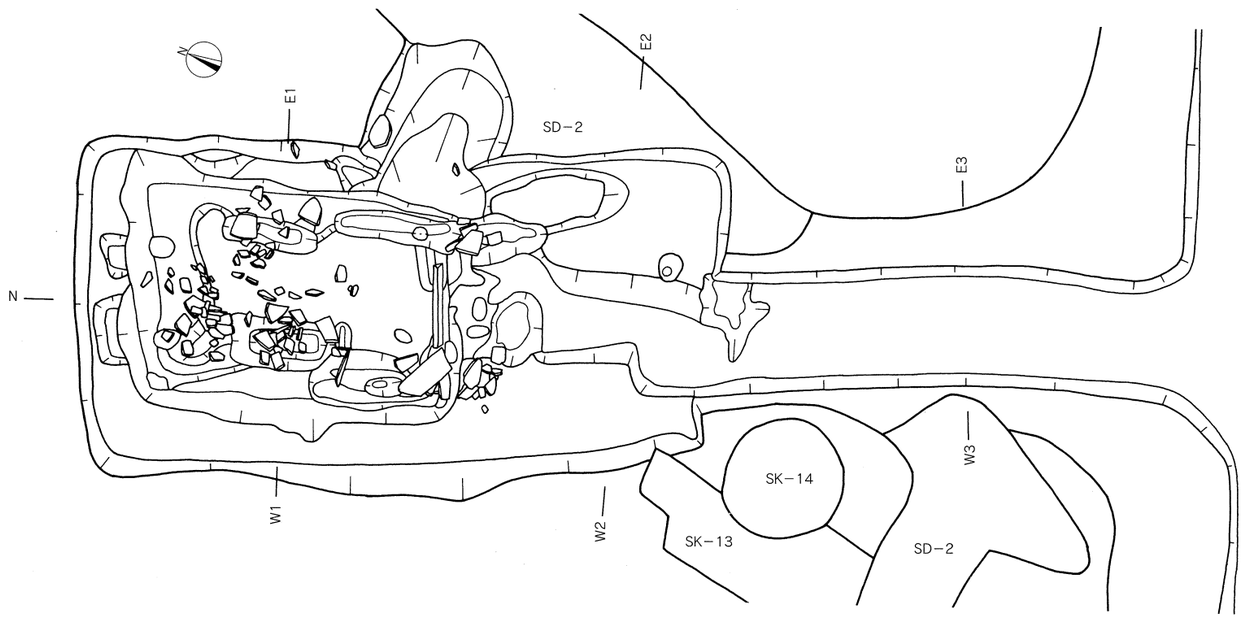
墓道は石棺部中央から南側周溝中央部まで堀込まれており、全長7.40m・幅1.18m・深さ1.20m程を計測する。墓道の入り口は西側がやや長く、東側よりやや広くなっており、主体部入り口から石棺部までは東側にややクランクしている。

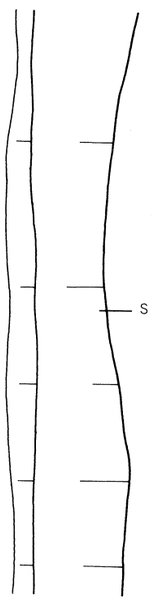
周溝は東側・北側・西側では幅3.00～3.50mを計測するが、南側では幅4.00mと広い周溝となっている。深さは、0.60～0.70mとほぼ同程度の深さである。

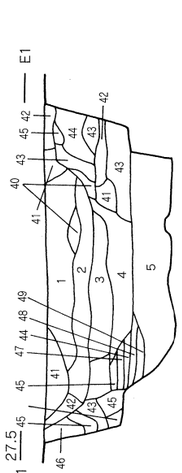


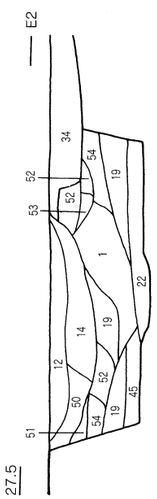
1）黒色土（ごく少量のローム粒子を含む）
2）黒褐色土（ごく少量のローム粒子を含む）
3）褐色土（多量のローム粒子を含む）
4）橙色土（多量のローム粒子、ロームブロックを含む）
5）黒色土（少量のローム粒子を含む）
6）黒色土（多量のローム粒子を含む）
7）灰褐色土（多量のローム粒子を含む）
8）暗橙色土（多量のローム粒子を含む）
9）明黄橙色土（多量のローム粒子、ロームブロックを含む）
10）灰褐色土（多量のローム粒子、ローム小ブロックを含む）
11）黒褐色土（ローム粒子を含む）
12）黒褐色土（ローム粒子、ロームブロックを含む）

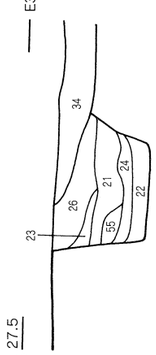
第20図　第１号墳実測図

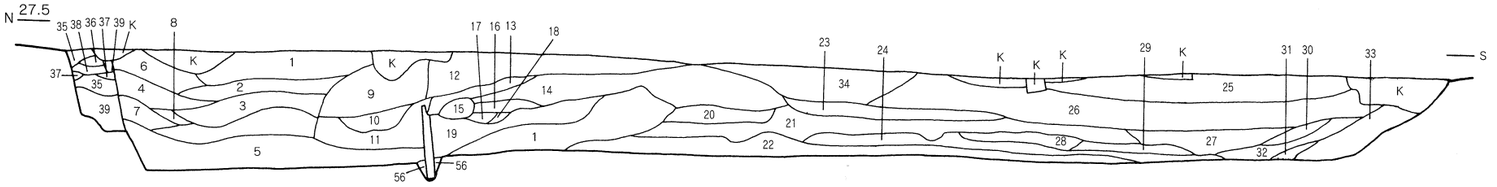


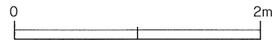






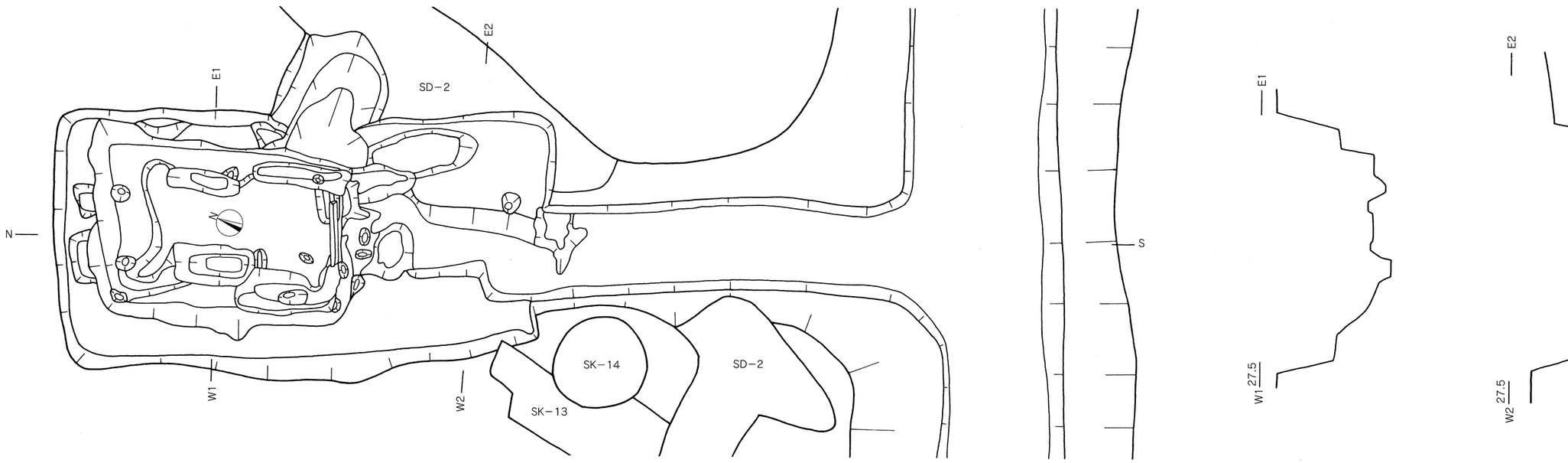


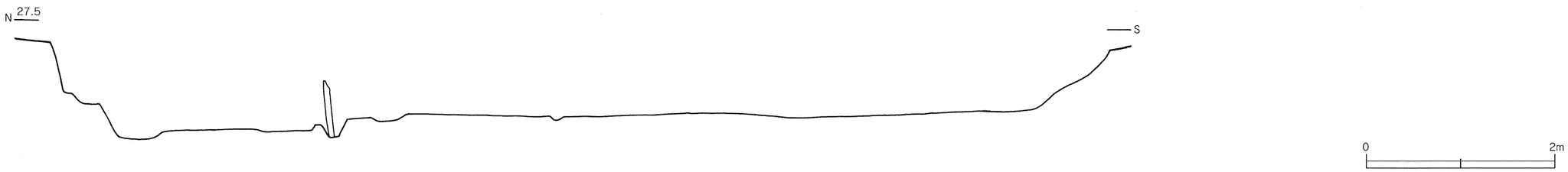




1）黒褐色土（ローム粒子を多く含む）
2）黒褐色土（ローム粒子を多く含む）
3）黒色土（ローム粒子を多く含む）
4）黒色土（ローム粒子をわずかに含む）
5）黒褐色土（ローム粒子を多く含む）
6）灰褐色土（ローム粒子をわずかに含む）
7）黄橙色土（暗、ローム粒子を多く含む）
8）明黄褐色土（ローム粒子を多く含む）
9）明黄褐色土（ローム粒子を多く含む）
10）黒褐色土（ローム粒子を少量含む）
11）黒色土（ローム粒子を多く含む）
12）暗褐色土（ローム粒子を多く含む）
13）灰黄褐色土（ローム粒子をわずかに含む）
14）黒色土（白色粘土、ローム粒子を含む）
15）黒色土（白色粘土、ローム粒子を多く含む）
16）灰褐色土（白色粘土、ローム粒子を多く含む）
17）ロームブロック
18）灰黄褐色土（ローム粒子を少量含む）
19）黄橙色土（ロームブロック、白色粘土を含む）
20）黒褐色土（ローム粒子を多く含む）
21）灰黄褐色土（ローム粒子を多く含む）
22）黄橙色土（堅緻で、ロームブロックを含む）
23）黒褐色土（ローム粒子を少量含む）
24）明黄褐色土（ロームブロック、ローム粒子を多く含む）
25）黒色土（ローム粒子を少量含む）
26）黒色土（ローム粒子を含む）
27）黒褐色土（ローム粒子を多く含む、しまりあり）
28）黒褐色土（ロームブロックを多く含む）
29）明黄褐色土（ローム粒、ロームブロックを含む）
30）灰暗褐色土（ローム粒多い、粘性に富む）
31）暗黄褐色土（ローム粒を多く含む）
32）灰黄褐色土（少量のローム粒を含む）
33）明黄褐色土（ロームブロックを含む）
34）黒色土（少量のローム粒子を含む、ＳＤ２）
35）黄橙色土（ロームブロックを多く含む）
36）明黄褐色土（ロームブロックを多く含む）
37）黄橙色土（ロームブロック、黒色土粒を含む）
38）黒褐色土（ロームブロックを多く含む）
39）ロームブロック（しまりあり）
40）灰褐色土（ローム粒子を少量含む）
41）灰褐色土（ごく少量のローム粒を含む）
42）灰黄褐色土（ごく少量のローム粒を含む）
43）灰黄褐色土（ごく少量のローム粒を含む）
44）黄褐色土（ロームブロックを多量に含む）
45）黄橙色土（ロームブロックを多量に含む）
46）黒褐色土（ローム粒子をごく少量含む）
47）黒褐色土（ローム粒子を含む）
48）黒色土（ローム粒子を多く含む）
49）黄褐色土（ローム粒子を多く含む）
50）褐色土（ローム粒子を多く含む）
51）黄橙色土（ロームブロックを多く含む）
52）黒褐色土（ローム粒子をごく少量含む）
53）黄褐色土（ローム粒子を多く含む）
54）黒褐色土（ロームブロックを含む）
55）暗黄橙色土（ローム粒子を含む）
56）黄褐色土（ロームブロック、黒褐色土を含む、硬質）

第21図　第１号墳主体実測図－１





第22図　第１号墳主体部実測図－２

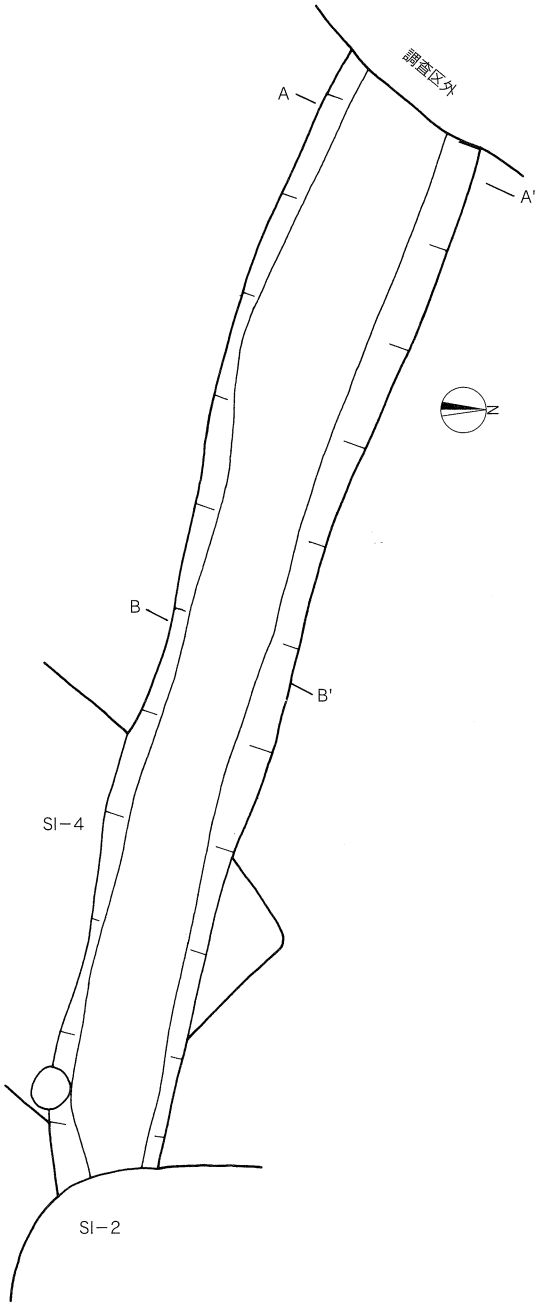
土層は主体部に黒色土・黒褐色土・褐色土・明褐色土・黄褐色土等が、雲母片岩小片を含んで堆積しているが著しい破壊撹乱を受けているため、主体部覆土としては第５層の黒褐色土が覆土と推定されるのみである。また第35～49層の黒褐色土・黄褐色土等は石棺の裏込めの土層と判断される。墓道部には黒褐色土・黄褐色土等が自然堆積状に堆積している。周溝には黒色土・黒褐色土・灰褐色土・黄色褐色土等が、自然堆積状に堆積している。

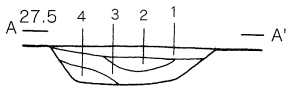
主体部と墓道部からの出土遺物としては土師器甕・雲母片岩等が出土しているが、図示可能な遺物は認められなかった。周溝内からは土師器埦・坩・器台・釘・土玉等が出土している。これらの出土遺物で図示できたのは、土師器坏（第30図26）土師器埦（同27～29）・坩（同30）・釘（同63～70）・土玉（同58～60）である。ただしこれらの土師器や土製品は古墳に伴うものではなく、周囲の住居跡からの混入遺物と考えられる。

３．溝（第23・24・29図、第４表：PL４・７）

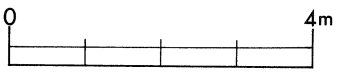
２条の溝が確認されている。第１号溝（ＳＤ－１）は、調査区の北側で第２・４号住居跡（ＳＩ－２・４）を掘り切って東西方向に掘込まれている。全長16.0m・幅2.50m・深さ0.25mを計測する溝で、底面はほぼ平坦で壁は斜めに掘込まれている。土層は褐色土と灰褐色土が、多量のローム粒子を含み堆積している。出土遺物としては、土師器甕・高坏・埦、陶磁器茶碗・皿、土玉等が出土している。

第２号溝（ＳＤ－２）は、調査区南側で第１号墳（ＴＭ－１）の周溝と主体部及び第17・19・20号住居跡（ＳＩ－17・19・20）等を掘切っている溝で、方形状に掘込まれた溝で、北側長22.0m・東側長16.5m・西側長17.0mで、溝の最大幅1.50m・深さ0.20mを計測する。底面はほぼ平坦で、壁は斜めに掘込まれている。土層は黒褐色土・暗褐色土がローム粒子を含みながら堆積している。出土遺物としては、土師器甕・埦・器台・土玉・陶磁器皿・茶碗等が出土している。土玉以外小破片であることから、土玉２点（第30図61・62）を図示した。

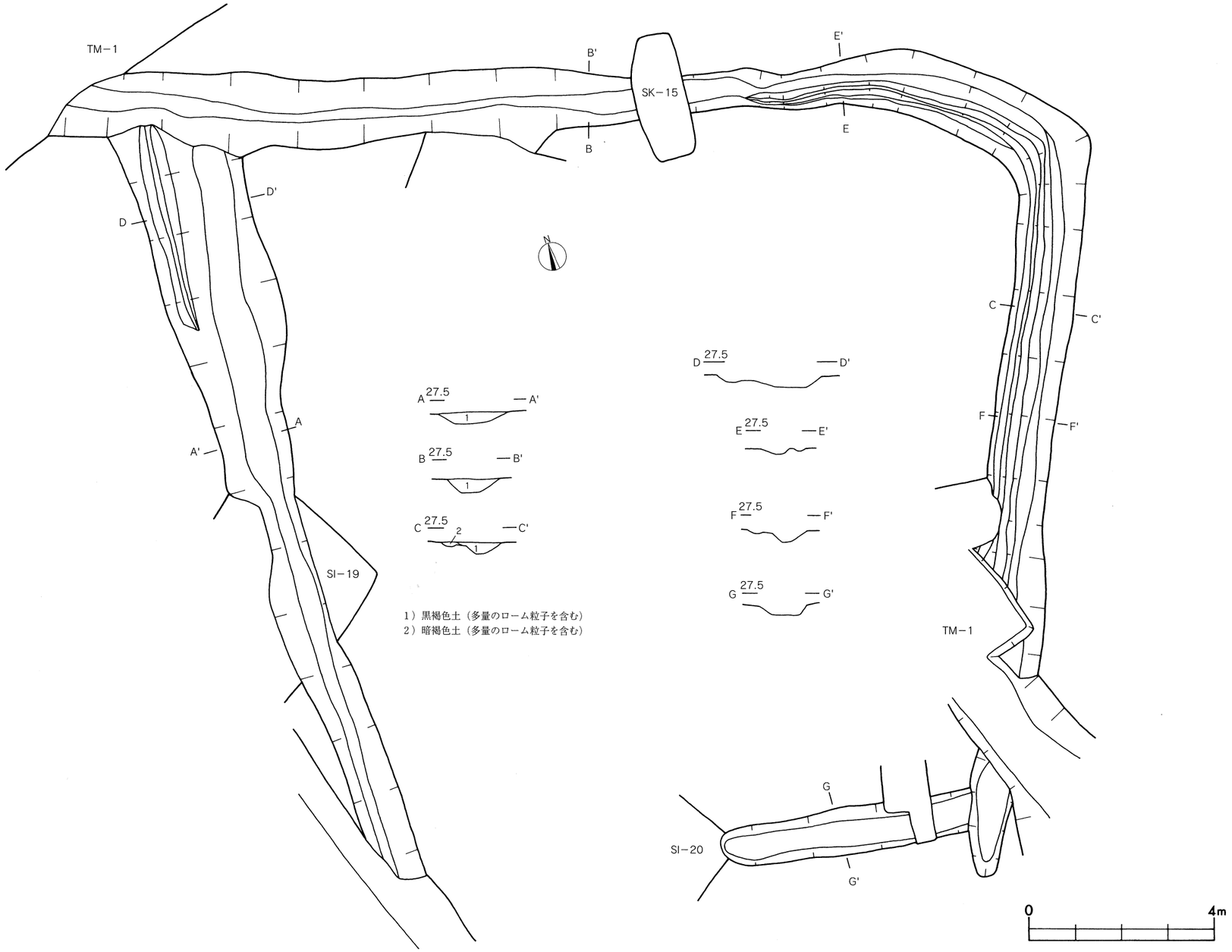




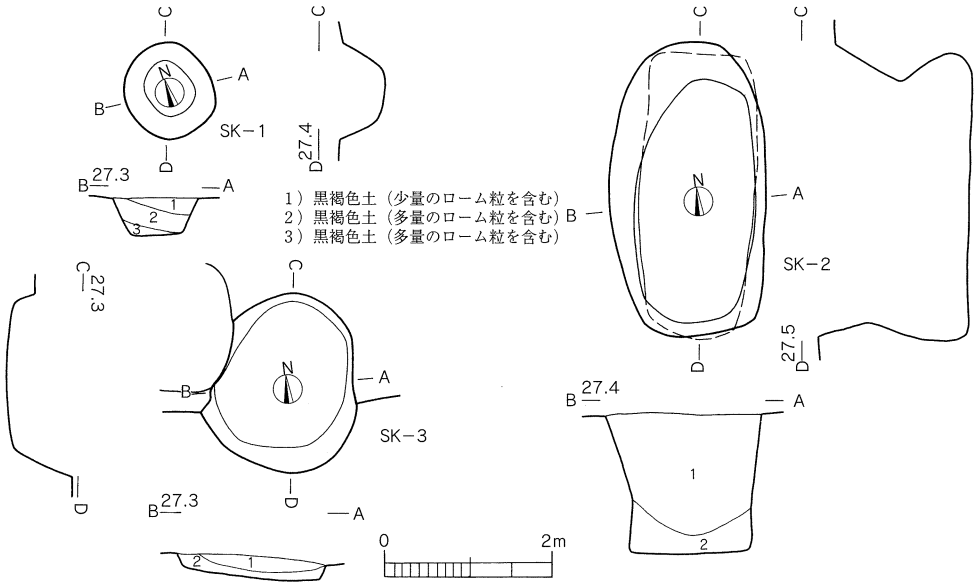
1）褐色土（多量のローム粒と焼土粒及び少量の炭化物粒を含む
2）褐色土（ごく少量のローム粒子を含む）
3）灰褐色土（多量のローム粒子と少量の焼土粒子を含む）
4）褐色土（多量のローム粒子を含む）



第23図　第１号溝実測図



第24図　第２号溝実測図



第25図　第１～３号土坑実測図

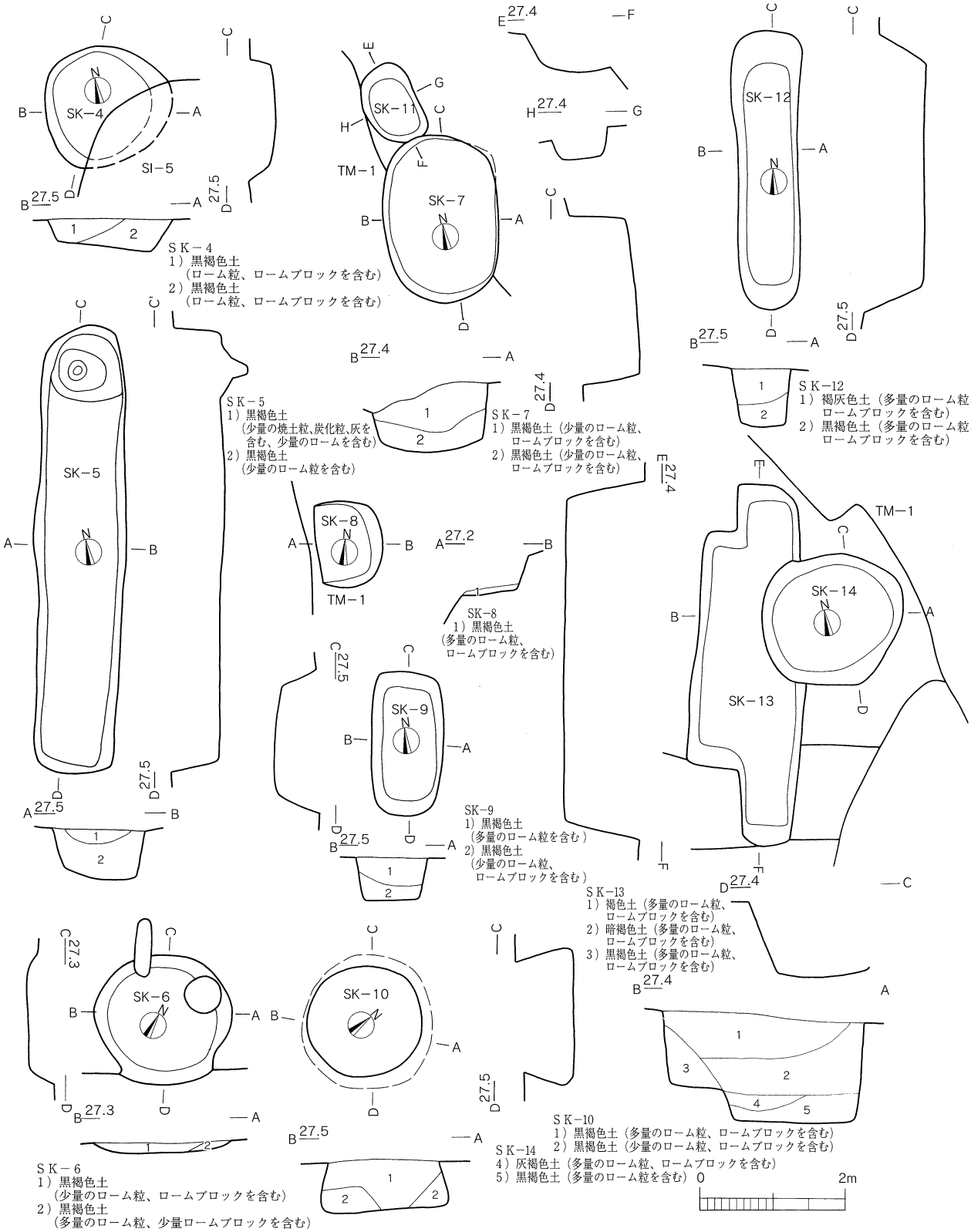
４．土　坑　（第25～28・30、第３表：PL２～４）

土坑としては35基の土坑が調査確認されているが、多くの土坑は近現代の土坑であり、縄文時代と古墳時代の土坑としては、第１・11・19・23・24・32・33・34・35号土坑（ＳＫ－１・11・19・23・24・32・33・34・35）の９基である。この９基で縄文時代早期の土坑は、第33・35号土坑（ＳＫ－33・35）の２基である。

第33・35号土坑（ＳＫ－33・35）は長方形状を呈する土坑で、底面は皿状で壁はほぼ垂直に掘込まれており、底面に多数の逆杭を示す小ピットが認められている。なお土坑の上面は斜めに掘込まれている。土層は暗褐色土・褐色土等が堆積している。堆積状況は自然堆積である。縄文時代の陥し穴である。

古墳時代の土坑は楕円形や長方形状を呈する土坑であり、底面はほぼ平坦で壁は垂直に掘込まれている。方位としては土坑の平面形と同様個々の土坑により異なっている。土層は黒色土・黒褐色土・褐色土が自然堆積状に堆積している。出土遺物としては土師器甕・埦・高坏等が破片で出土しているが、図示出来たのは第30図31のみである。

近現代の土坑は長方形・楕円形・円形状を呈しており、底面はほぼ平坦で壁はほぼ垂直に掘込まれいる土坑が多い。土層は黒色土・黒褐色土・褐色土等が堆積しており、ロームブロック・ローム粒子を多量に含み締まりのない軟質な土層である。出土遺物としては陶磁器茶碗・皿等の小破片が出土している。近現代の耕作土坑である。



SK−4
1）黒褐色土
（ローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土
（ローム粒、ロームブロックを含む）

SK−5
1）黒褐色土
（少量の焼土粒、炭化粒、灰を含む、少量のロームを含む）
2）黒褐色土
（少量のローム粒を含む）

SK−7
1）黒褐色土（少量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土（少量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−12
1）褐灰色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−8
1）黒褐色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−9
1）黒褐色土
（多量のローム粒を含む）
2）黒褐色土
（少量のローム粒、ロームブロックを含む）

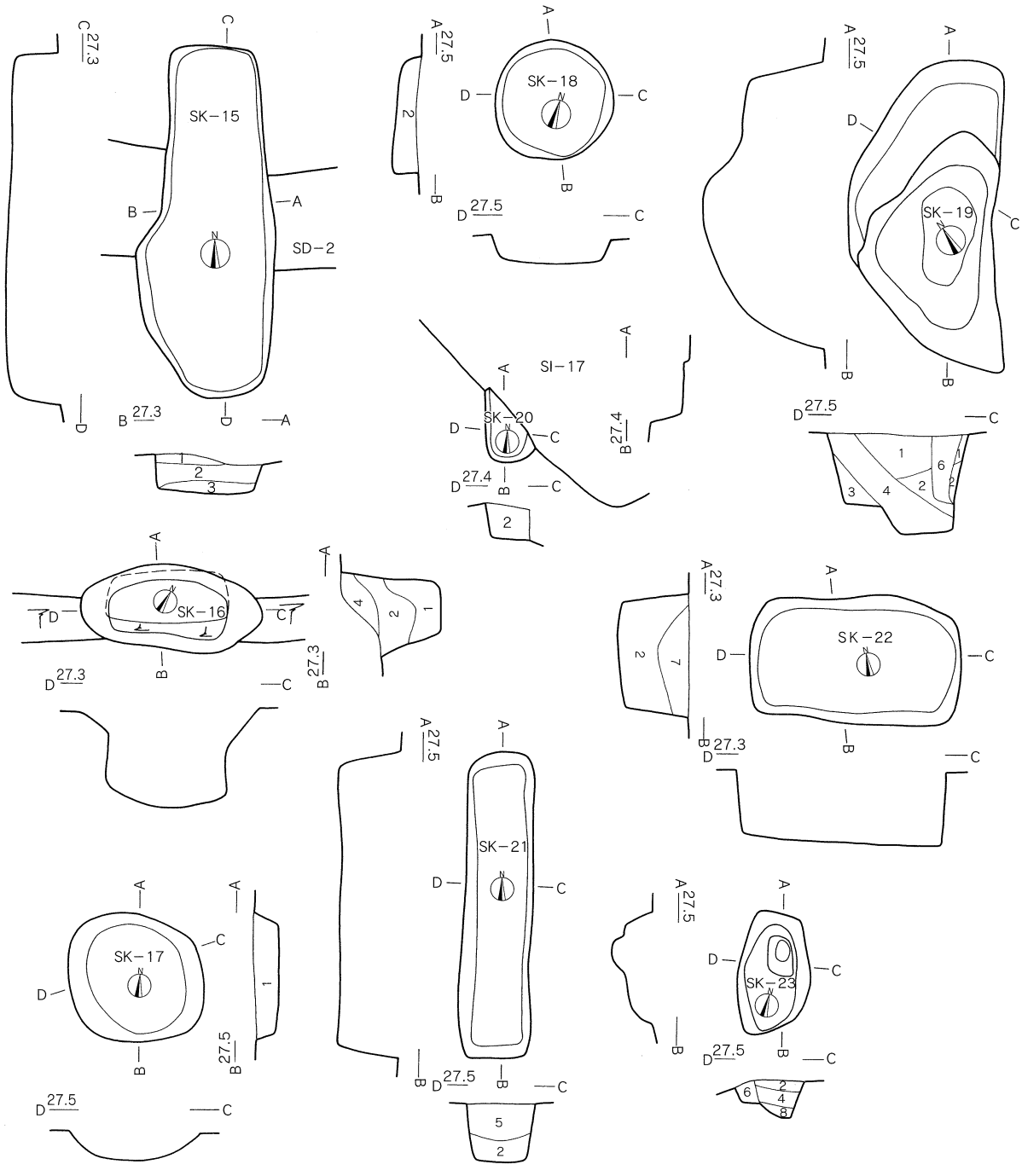
SK−13
1）褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）暗褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
3）黒褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−6
1）黒褐色土
（少量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土
（多量のローム粒、少量ロームブロックを含む）

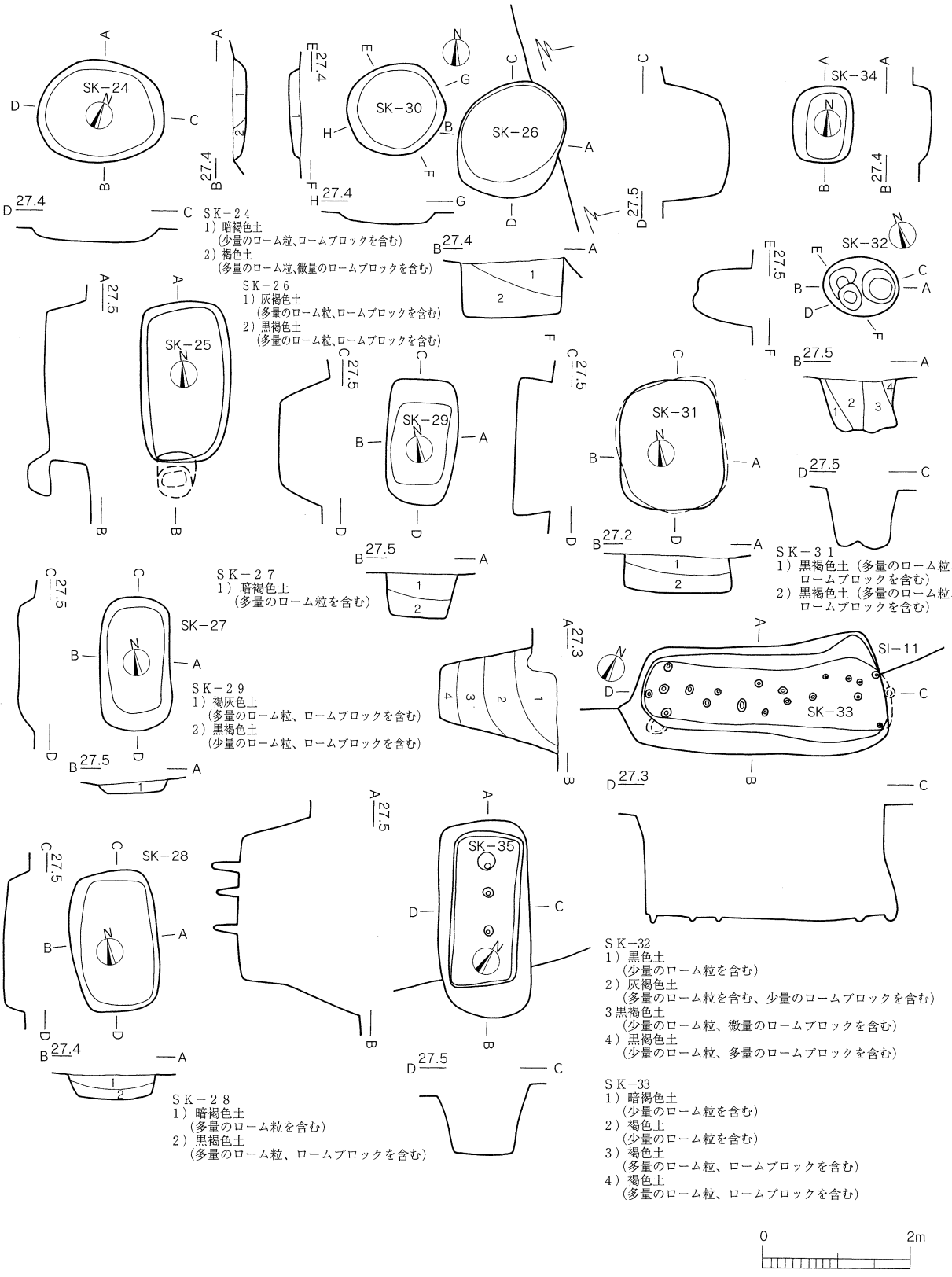
SK−10
1）黒褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土（少量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−14
4）灰褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
5）黒褐色土（多量のローム粒を含む）

第26図　第4～14号土坑実測図



第27図　第15～23号土坑実測図



SK−24
1）暗褐色土
（少量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）褐色土
（多量のローム粒、微量のロームブロックを含む）

SK−26
1）灰褐色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−31
1）黒褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−27
1）暗褐色土
（多量のローム粒を含む）

SK−29
1）褐灰色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
2）黒褐色土
（少量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−32
1）黒色土
（少量のローム粒を含む）
2）灰褐色土
（多量のローム粒を含む、少量のロームブロックを含む）
3黒褐色土
（少量のローム粒、微量のロームブロックを含む）
4）黒褐色土
（少量のローム粒、多量のロームブロックを含む）

SK−33
1）暗褐色土
（少量のローム粒を含む）
2）褐色土
（少量のローム粒を含む）
3）褐色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）
4）褐色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

SK−28
1）暗褐色土
（多量のローム粒を含む）
2）黒褐色土
（多量のローム粒、ロームブロックを含む）

第28図　第24～35号土坑実測図

第１表　遺構一覧表１（住居跡・古墳・溝）

名　称	規　模（m） 東西×南北×深さ	方　位	長軸 方向	形状	床面	柱 穴	壁　溝	貯蔵穴	炉　跡	備　　考
第１号住居跡 （SI-１）	6.37×7.00×0.44	N-13°-E	南北 北向	隅丸長 方形状	貼床	4	一部を除 き全周	南東部・ 隅丸長方形	中央北側 楕円形	第２号住居跡（SI-2）と重復・中央南側には間 仕切り溝を有す　貯蔵穴の周囲が一段高い
第２号住居跡 （SI-２）	7.00×6.50×0.35	N- 3°-E	東西 南北	隅　丸 方形状	貼床	4	東・西・南 壁で確認	南西部 隅丸長方形		第１号住居跡（SI-１）・第３号土坑（SK-3） と重複、北側は消失、南北径は推定
第３号住居跡 （SI-３）	5.50×5.44×0.35	N-10°-W	東西 北向	隅丸長 方形状	直床状	4	一部を除 き全周	南西部 隅丸長方形	中央北側 楕円形状	東壁より西壁がやや短い 壁溝は、北壁中央部と南西部を欠く
第４号住居跡 （SI-４）	4.37×5.50×0.06	N-45°-E	南北 北西	隅丸長 方形	直床状	4	南側は 全周	南　隅 円形状	中央西側 円形状	第５号住居跡（SI-5）・第１号溝（SD-1） 第４号土坑（SK-4）と重複、炉跡に新旧有り
第５号住居跡 （SI-５）	7.68×7.05×0.45	N-75°-W	東西 北西	隅丸長 方形	貼床	4	全周	南西部・ 隅丸長方形状	中央西側 円形状	第４号土坑（SK-4）と重複、炉跡と貯蔵穴に 新旧有り、南壁中央部に間仕切り溝を有す
第６号住居跡 （SI-６）	4.00×7.00×0.45	N-17°-W	南北 南北	隅丸方 形状	直床状	5	全周と 推定	南西部 楕円形	中央西側 楕円形	第７号住居跡（SI-7）と重複、西側を調査 貯蔵穴の東・西・南側に長方形の掘りこみ有り
第７号住居跡 （SI-７）	3.90×3.92×0.16	N- 3°-E	東西 南北	隅丸方 形状	直床状		なし	南西部 隅丸長方形状	中央北側 楕円形	第６号住居跡（SI-6）と重複、貯蔵穴の南東 部に長方形の掘りこみ有り
第８号住居跡 （SI-８）	4.40×4.90	N-41°-W	東西 北東	隅丸長 方形状	貼床 堅緻	1	不明	な　し	中央北側 楕円形	床面・炉跡で確認 規模は推定径
第９号住居跡 （SI-９）	4.00×4.20×0.05	N-37°-W	南北 北西	隅丸方 形状	直床状	2	全周	な　し	北東部 楕円形	小型の住居跡 炉跡は大型で、新旧を有する
第10号住居跡 （SI-10）	4.28×4.78×0.09	N-53°-E	南北 北東	隅　丸 方　形	直床状	1	北・東壁 の一部	な　し	中央東側 楕円形状	第11号住居跡（SI-11）と重複、 炉跡に新旧あり、大型の炉跡
第11号住居跡 （SI-11）	6.35×6.20×0.21	N-29°-W	東西 北東	隅　丸 方　形	直床状	7	全周	南東部 長方形	中央東側 楕円形	第10号住居跡（SI-10）・及び第１号墳 （TM-1）と重複、炉跡は大きく北方を向く
第12号住居跡 （SI-12）	3.80×4.50×0.15	N- 0°-E	南北 南北	隅丸長 方形状	直床状		全周	北西部 楕円形	東側中央 楕円形状	第１号墳（TM-1）東側周溝と重複、炉跡は東側 中央やや北側に有り、貯蔵穴の周囲は一段低い
第13号住居跡 （SI-13）	4.40×4.38×0.08	N-51°-W	南北 北西	隅丸方 形状	直床状	2	なし	南東部 長方形	中央北西 楕円形	南東部の壁のみ遺存、炉跡と貯蔵穴は北東向き 規模推定推定、貯蔵穴の西側にPit有り
第14号住居跡 （SI-14）	5.70×5.20×0.15	N-65°-E	東西 北西	隅　丸 方　形	直床状	6	全周	南東部 楕円形		第１号墳（TM-1）・第６号土坑（SK-6） と重複・北西向きの住居跡と推定
第15号住居跡 （SI-15）	5.60×4.68×0.22	N-47°-E	東西 北西	隅丸長 方形	直床状	3	全周	な　し	中央北側 楕円形	炉跡は５ヶ所で新旧あり 新炉は中央北側で、大きな楕円形炉
第16号住居跡 （SI-16）	6.12×4.90×0.36	N-33°-W	東西 南西	隅丸長 方形	直床状		北壁以外 全周	北壁沿い に2基有り	中央西側 楕円形	第１号墳（TM-1）南側周溝と重複 炉跡は北西方向を向く
第17号住居跡 （SI-17）	5.73×5.30×0.30	N-44°-W	東西 北西	隅　丸 方　形	直床状	5	東・南東 部以外有	北西部 楕円形	中央北側 楕円形	第２号溝（SD-2）第20号土坑（SK-20） と重複、間仕切り溝を有す
第18号住居跡 （SI-18）	2.50×3.30×0.05	N-34°-W	南北 南北	隅丸方 形状	直床状	2	北・東壁 で確認		北東部 楕円形	第１号墳（TM-1）西側周溝と重複、炉跡は小 さい炉
第19号住居跡 （SI-19）	3.70×4.20×0.20	N-39°-W	東西 北西	隅丸長 方形	直床状	3	なし	南北部 方　形	中央北側 楕円形	第１号墳（TM-1）・第２号溝（SD-2）と 重複、炉跡は北西向き、南西壁消失
第20号住居跡 （SI-20）	4.72×4.05×0.13	N-45°-E	東西 北東	隅丸長 方形状	直床状	4	東側のみ	な　し	な　し	第２号溝（SD-2）第12号土坑（SK-12） と重複、北東部は一部撹乱を受ける
第21号住居跡 （SI-21）	5.30×4.90×0.47	N-40°-E	東西 北東	隅　丸 方形状	直床状	5	全周	南東部 隅丸長方形	中央東側 楕円形	第１号墳（TM-1）と重複 炉跡は北西方向を向く
第22号住居跡 （SI-22）	5.62×5.00×0.16	N-70°-E	東西 北東	隅丸長 方形	貼床 軟弱	5	なし	な　し	北東部 楕円形	不規則な柱穴配置 炉跡に新旧を有すると推定

名　　称	規　　模（m）	方　位	備　　考
第１号古墳（TM-1）	39.0×32.40	N-20°-W	主体部6.40×3.50×0.65・周溝3.0～4.0×0.60・著しく破壊されている
第１号溝　（SD-1）	全長16.0m	南東～北西	幅2.50～1.60m、深さ0.25m、
第２号溝　（SD-2）	全長55.5m	北向き	北22.0m・東16.5m・西17.0m、幅1.50m、深さ0.20m

第２表　遺構一覧表２（土坑）

名　称	規　模（m）	方　位	形　状	名　称	規　模（m）	方　位	形　状
第１号土坑（SK- 1）	0.76×0.68×0.42	N-25°-E	円　形	第19号土坑（SK-19）	2.50×1.20×1.50	N-34°-E	楕円形
第２号土坑（SK- 2）	2.31×1.25×1.07	N- 6°-E	楕円形	第20号土坑（SK-20）	0.60×0.45×0.35	N- 0°-E	楕円形
第３号土坑（SK- 3）	1.32×1.20×0.53	N-10°-E	楕円形	第21号土坑（SK-21）	2.55×0.57×0.48	N- 0°-E	長方形
第４号土坑（SK- 4）	1.20×1.10×0.24	N-30°-W	楕円形	第22号土坑（SK-22）	1.73×1.08×0.61	N-80°-W	長方形
第５号土坑（SK- 5）	4.12×0.87×0.42	N-15°-E	長方形	第23号土坑（SK-23）	1.05×0.60×0.35	N-15°-W	楕円形
第６号土坑（SK- 6）	1.28×1.10×0.25	N-22°-W	円　形	第24号土坑（SK-24）	1.15×0.95×0.12	N- 5°-W	楕円形
第７号土坑（SK- 7）	1.58×1.08×0.63	N-20°-W	楕円形	第25号土坑（SK-25）	1.45×0.80×0.38	N-17°-W	長方形
第８号土坑（SK- 8）	0.80×0.60×0.32	N- 6°-E	長方形	第26号土坑（SK-26）	1.10×0.90×0.55	N-38°-E	不整楕円形
第９号土坑（SK- 9）	1.30×0.66×0.40	N- 5°-E	長方形	第27号土坑（SK-27）	1.20×0.63×0.12	N-13°-E	長方形
第10号土坑（SK-10）	1.32×0.55×0.40	N-35°-W	円　形	第28号土坑（SK-28）	1.29×0.78×0.23	N-15°-E	長方形
第11号土坑（SK-11）	0.75×0.50×0.30	N-13°-W	楕円形	第29号土坑（SK-29）	1.15×0.64×0.44	N-11°-E	長方形
第12号土坑（SK-12）	2.55×0.55×0.55	N-13°-W	長方形	第30号土坑（SK-30）	0.85×0.82×0.11	N-67°-E	円　形
第13号土坑（SK-13）	3.35×0.55×0.60	N- 5°-E	長方形	第31号土坑（SK-31）	1.18×0.90×0.36	N-11°-E	長方形
第14号土坑（SK-14）	1.30×1.25×0.72	N-65°-E	楕円形	第32号土坑（SK-32）	0.68×0.53×0.48	N-62°-W	楕円形
第15号土坑（SK-15）	2.95×0.90×0.72	N- 7°-E	長方形	第33号土坑（SK-33）	2.40×0.95×1.00	N-68°-E	長方形
第16号土坑（SK-16）	1.50×0.80×0.85	N-63°-E	楕円形	第34号土坑（SK-34）	0.68×0.54×0.15	N- 0°-E	長方形
第17号土坑（SK-17）	1.25×1.10×0.22	N-43°-W	楕円形	第35号土坑（SK-35）	1.80×0.83×1.01	N-20°-W	長方形
第18号土坑（SK-18）	1.10×0.98×0.21	N- 0°-W	円　形				

５．遺構内出土遺物（第29・30図、第３～５表：PL６・７）

古墳時代の遺物としては、住居跡内より土師器甕・台付甕・高坏・器台・装飾器台・椀・手捏・土玉等が出土している。古墳からも、周溝内より流れ込んだ土師器器台・高坏・釘・土玉等が出土している。また古墳主体部の石棺材である雲母片岩が、小破片として主体部と周溝内より出土している。

NO.１は第１号住居跡より出土した土師器甕で、頸部部以下と口縁部を一部欠損している。床面上５cmよりの出土で、外面と頸部内面にはハケ目整形後ヘラナデが施されている。

NO.２・３は第５号住居跡よりの出土遺物で、２は土師器台付甕で３は器台である。２は口縁部と器台先端の一部を欠くが、ほぼ完形品である。床面上12cmより出土しており、体部下半に最大径を有し、体部外面と器台内外面にはハケ目整形が施されている。３は土師器器台の完形品で、床面上13cmより出土しやや歪な器形で脚部には円形の孔が３孔認められる。

NO.４は第７号住居跡より出土した土師器甕の完形品で、床面上４cmよりの出土である。やや歪な器形であり、体部には粗いヘラ削り後ヘラナデが施されている。

NO.５は第９号住居跡より出土した土師器高坏片であり、坏の部分を欠損している。脚部には、円形孔が３孔認められた。脚部外面はヘラナデで、内面にはハケ目整形が施されている。

NO.６は第３号住居跡より出土した土師器甕で、床面上３cmより出土している。体部上半以上を欠損しており、体部にはハケ目整形後ヘラナデが施されている。

NO.７・８は第５号住居跡より出土した土師器甕であり、７は床面上14cmよりの出土で８は13cmよりの出土である。７は口縁部と体部の一部を欠損し、歪な器形で口縁部から体部上半にかけて一部煤が付着している。８は体部下半と口縁部を欠損しており、口縁部内外面と体部外面にはハケ目整形が施されている。

NO.９～12は第６号住居跡よりの出土遺物で、９は土師器甕で10は高坏であり、11・12は器台である。９は床面上20.4cmより出土しており、口縁部から体部下半まで内外面ハケ目整形が施されているが、体部下半内外面は粗いハケ目整形である。10は脚部を欠損している高坏で、坏部は内外面ともへ

ラナデ・ヘラミガキであり、床面上７cmより出土している。11は床面上10.0cmよりの出土であり、器部を欠損している。脚には孔が６孔穿たれており、器底面の孔と合わせると７孔となる。12は床面上５cmより出土した器台で、脚の一部を欠損している。器部と脚部内外面は、比較的良好な整形である。

NO.13は第７号住居跡より出土した土師器器台の完形品で、床面上13cmより出土している。やや歪な器形であるが、良好な整形が施されている。脚部には孔が３孔穿たれており、器部内外面と脚部外面には赤彩が施されている。

NO.14は第14号住居跡より出土した土師器埦で、床面上23cmより出土している。口縁部～体部上半まで1/3程遺存している埦で、体部にはハケ目整形が施されている。

NO.15～17は第15号住居跡より出土した土師器埦・器台・高坏で、15は埦で16が器台であり17は高坏である。15は床面上11cmより出土しており、歪な器形で口縁部を一部欠損している。手捏土器であり、体部は敲後ヘラナデが施されている。16は床面上７cmより出土しており、比較的良好な整形が施されている。17は覆土内一括遺物で、脚部を欠損している。

NO.18～20は第17号住居跡より出土した土師器器台と埦であり、18・20は器台で19は埦である。18は床面より出土しており、歪な器形で口縁部を一部欠損している。器部内外面と脚部外面には、赤彩が施されている。19は貯蔵穴内より出土しており、口縁部の一部を欠損し体部外面と口縁部内面は赤彩が施されており、端整な整形である。20は床面上６cmより出土しており、やや歪な器形で脚を一部欠損している。器部内面には煤が付着しており、脚部には孔が３孔穿たれている。

NO.21～23は第19号住居跡より出土した土師器器台と甕である。21は床面上11cmより出土しており、口縁部を一部欠損しやや歪な器形で頸部に突帯が認められる。22は床面上７cmより出土しており、口縁部と体部の一部を欠損している。歪な器形で、口縁部下端から体部下半にかけて粗いハケ目整形が施されている。23は床面上７cmより出土しており、体部はハケ目整形であるが下半には粗いヘラナデが施されている。

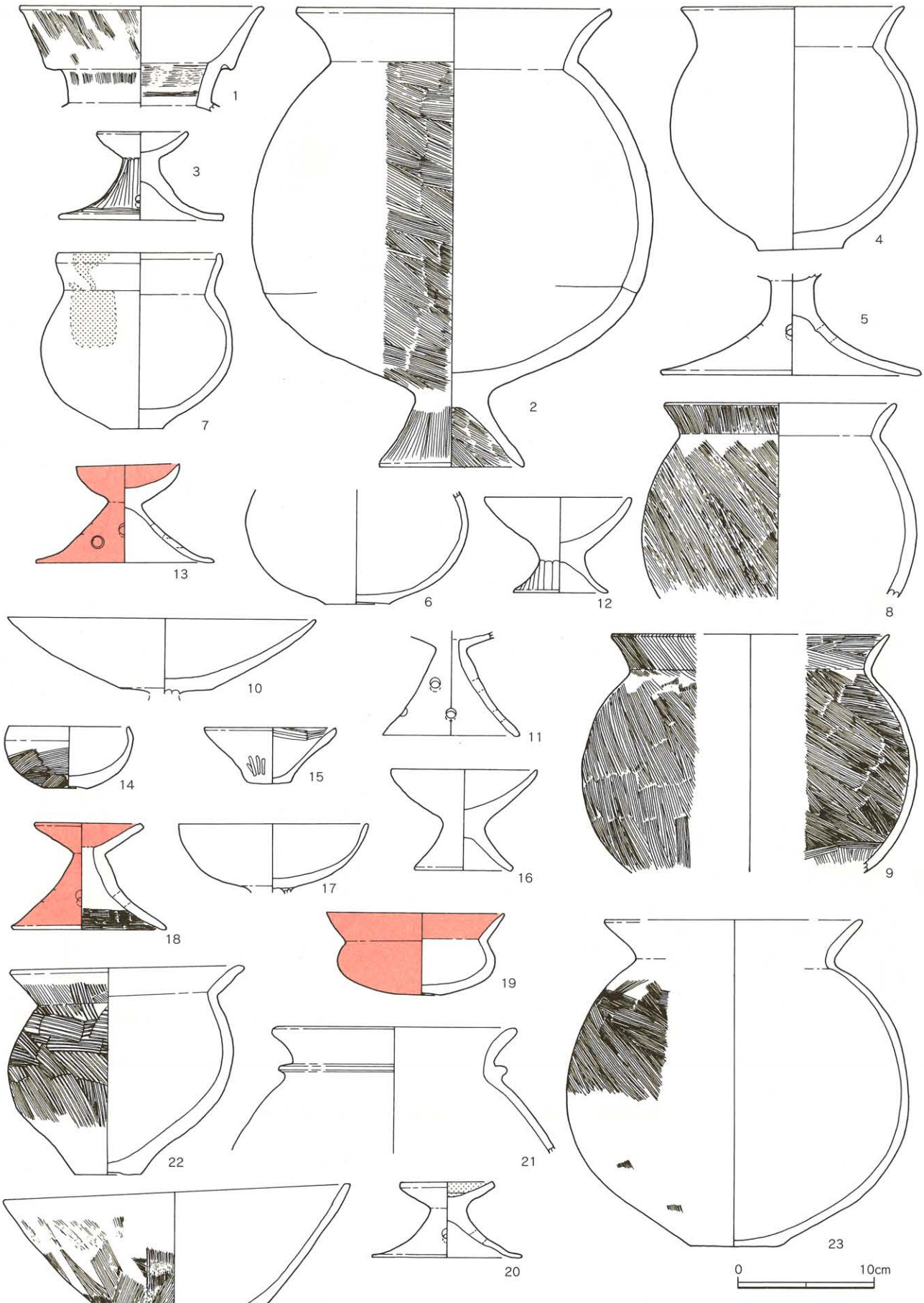
NO.24・25は第22号住居跡より出土した土師器鉢・装飾器台で24は鉢で25が装飾器台である。24は床面上10cmより出土しており、歪な器形で底部中央には孔が穿たれている。体部はハケ目整形であるが、上半にはハケ目後ヘラナデが施されている。25は覆土内一括出土の接合資料で、脚の大部分と口縁部を欠損している。脚部には丸孔が６孔穿たれており、脚部と口縁部との間には突帯がある。また口縁部下端には方形孔が穿たれている。方形孔は、３～４孔程と推定される。

NO.26～30は第１号墳の周溝内より出土した土師器坏・埦・坩であり、26は坏で27～29が埦であり30は坩である。26は底面上36cmより出土しており、やや歪な器形であるが完形品である。内面は端整な整形であるが、外面はヘラ削りが施されている。27は底面上77cmより出土しており、歪な器形で口縁部を一部欠損している。底部は、平底でやや内傾している。28は底面上45cmより出土しており、口縁部は一部を遺存するのみである。やや薄い器厚で、底部は平底である。29は底面上52cmより出土しており、口縁部の一部が遺存している。やや歪な器形で、体部外面には粗いハケ目整形が施されており、底面は平底でやや内傾している。30は底面上39cmより出土しており、口縁部を欠損し体部も一部を欠損している。体部整形はハケ目整形を施しており、上半は緻密であるが下半は粗いハケ目整形である。

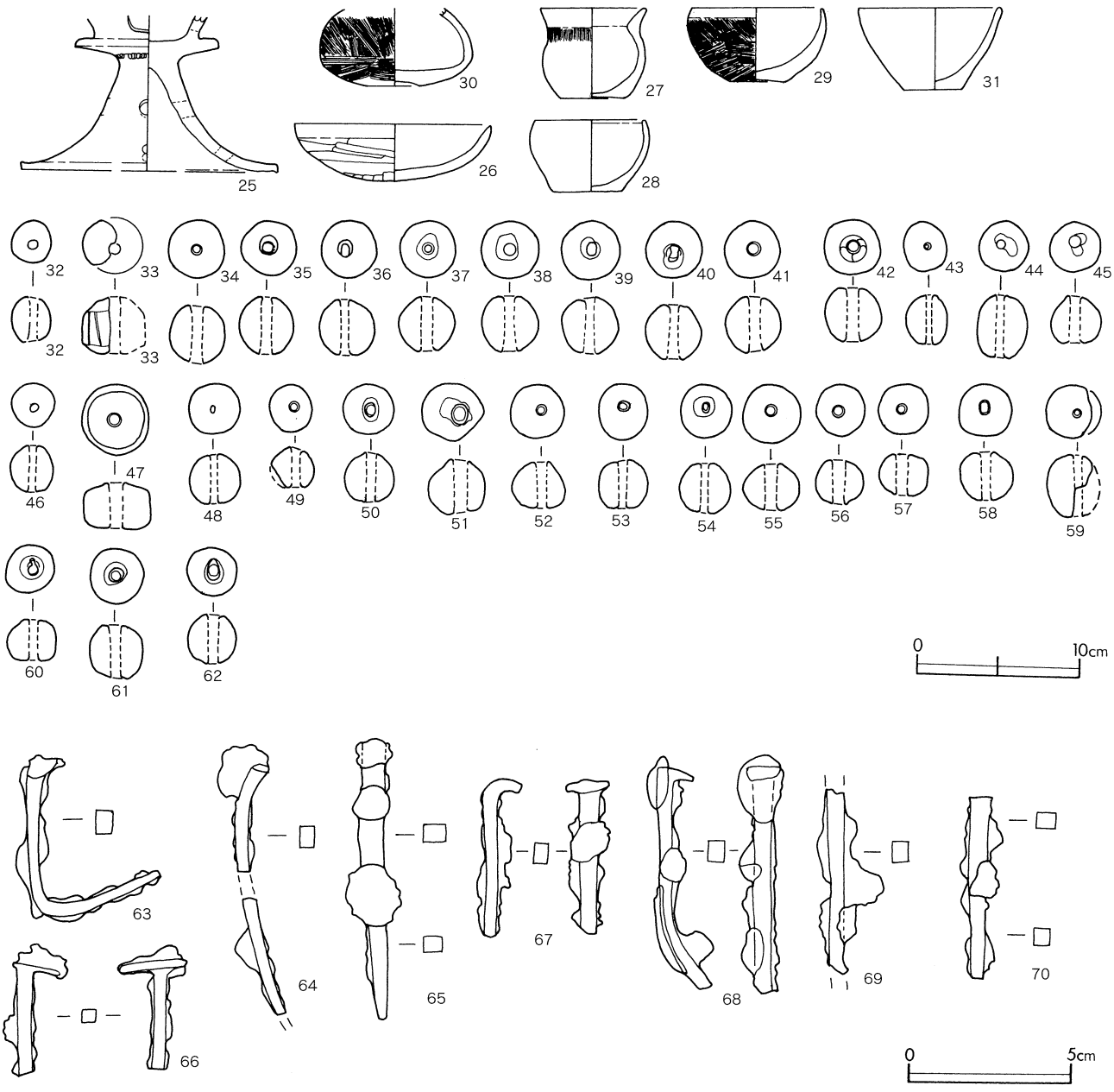
NO.31はほぼ完形品であるが、第34号土坑の覆土内一括出土である。歪な器形で、内外面ともナデ整形が施されている。

NO.32～62は土玉である。32は第１号住居跡よりの出土で、楕円形状を呈する完形品である。33は第２号住居跡よりの出土で、破片である。34～42は第３号住居跡よりの出土であるが、出土位置は床面上１～９cmと各々異なっている。楕円形状や不整円形状を呈しているが、すべて完形品である。同一遺構から９点とまとまって出土したのは、本跡のみである。NO.43～45は第５号住居跡よりの出土であるが、出土位置は各々異なっている。楕円形状を呈しており、完形品である。NO.46・47は第６号住居跡よりの出土であり、床面上５ｃｍとＰ３内よりの出土である。完形品で、楕円形状・不整円形状を呈している。NO.48・49は第９号住居跡よりの出土であり、48は一括品であるが完形品、49は床面より出土しており楕円形状で下端の一部を欠損している。NO.50は第11号住居跡よりの出土であり、完形品で円形状を呈している。NO.51・52は第12号住居跡よりの出土であり、完形品で楕円形状を呈している。51は粗い整形で、孔は楕円形状を呈している。NO.53・54は第13号住居跡よりの出土であり、完形品で楕円形状・円形状を呈しており53は粗い整形である。NO.55は第15号住居跡よりの出土であり、完形品で楕円形状を呈しており一部焼けている。NO.56は第17号住居跡よりの出土であり、完形品で楕円形を呈している。粗いヘラナデが施されている土玉である。NO.57は第19号住居跡よりの出土であり、完形品で楕円形状を呈しており、ヘラナデが施されている。NO.58～60は第１号墳の周溝内よりの出土であり、60が一部を欠く以外完形品である。60は粗い整形であるが、他は比較的良好な整形である。NO.61・62は第２号溝の覆土中から出土した。

NO.63～70は、第１号墳の周溝内より出土した釘である。ほぼ完形品としては63が１点出土しているのみで、その多くは破片である。頭頂部は、長方形状・円形状を呈しており、身部は方形・長方を呈している。長さとしては、63・65が８cm程を計測することから８～９cm程度の釘と推定される。



第29図　遺構内出土　土師器(1)



第30図　遺構内出土　土師器(2)・土玉・鉄製品

第３表　出土遺物一覧表１

番号	器種	器形	出土遺構	位置	法量（cm）				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴
					現高	口径	底径	孔径				
1	土師器	甕	第１号住居跡(SI-1)	＋ 5.0	7.8	18.6×17.4			小石・長石・石英を含む・粗い	良好	淡茶褐色	歪な器形で頸部以下欠損、口縁部と頸部、ハケ目整形後弱いヘラナデ
2		甕	第５号住居跡(SI-5)	＋12.0	33.5	23.2×22.5	台高 11.0	台径 5.0	長石・石英を含む粗い	良好	明褐色	完形・体部下半に最大径を有す、体部と器台はハケ目整形、口縁部ヘラナデ
3		器台	第５号住居跡(SI-5)	＋13.0	6.5	6.5×6.3	脚径 11.5	0.9	雲母・長石・石英を含む、緻密	良好	明褐色	完形、一部赤褐色、坏横位ヘラナデ、脚縦位と横位のヘラナデ、孔は3孔
4		甕	第７号住居跡(SI-7)	＋ 4.0	18.0×17.8	16.4×15.8	6.5×6.3		雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	明褐色	完形、歪な器形で外面は粗い整形、口縁横位ヘラナデ・体部ﾍﾗ削り後ヘラナデ
5		高坏	第９号住居跡(SI-9)	＋ 5.0	7.0		脚径 19.3	1.0	雲母・長石・石英を含む、緻密	良好	明褐色	坏部を欠損している、孔は3孔 比較的良好な整形
6		甕	第３号住居跡(SI-3)	＋ 3.0	8.9		5.0×4.5		雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	暗褐色	体部上半以上欠、1/3程残、歪な器形 体部外面ﾍｹ目整形後弱いヘラナデ
7		甕	第５号住居跡(SI-5)	＋14.0	12.3	13.0×12.9	4.0×3.8		微細砂粒子含む緻密	良好	明褐色	口縁～体部にかけ1/3程欠、口縁横位ナデ体部ヘラナデ、口縁と体部に煤付着
8		甕	第５号住居跡(SI-5)	＋13.0	14.2	17.0			多量の砂粒子を含む、粗い	良好	暗茶褐色	体部下半と口縁1/2程欠、口縁～体部ハケ目整形
9		甕	第６号住居跡(SI-6)	＋20.4	12.4	推定 20.4			雲母・長石・石英粒含む、粗い	良好	暗褐色	1/4程の破片、口縁部から体部にかけ内外面ハケ目整形で外面は粗いハケ目
10		高坏	第６号住居跡(SI-6)	＋ 7.0	10.5	22.6			小石・砂粒子を含む、粗い	良好	暗褐色	脚部欠損、体部内外面ヘラナデ ヘラミガキ
11		器台	第６号住居跡(SI-6)	＋10.0	7.7		脚径 10.0	1.0	微細砂粒子含む緻密	良好	淡褐色	坏部上半欠、脚に7孔有り、 坏部と脚部内外ヘラナデ
12		器台	第６号住居跡(SI-6)	＋ 5.0	7.0	10.5	脚径 7.0		微細砂粒子含む緻密	良好	暗褐色	脚部1/4程残、坏部内外ヘラナデ、脚縦位ヘラ削り後ヘラナデ
13		器台	第７号住居跡(SI-7)	＋13.0	7.2×7.0	7.6×7.5	脚径 12.9×12.5	1.0	微細砂粒子含む緻密	良好	赤褐色	完形、内外面ヘラナデヘラミガキ、坏部内面と脚部外面赤彩、孔3孔
14		椀	第14号住居跡(SI-14)	＋23.0	4.5	8.7	3.2× 2.7		長石・石英含む粗い	良好	淡褐色	口縁～体部上半まで1/3程残、体部上半ハケ目後ヘラナデ体部ハケ目整形
15		椀	第15号住居跡(SI-15)	＋11.0	4.0	9.5×8.5	3.8× 3.5		雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	暗褐色	歪な器形で口縁部一部欠損、体部外面ヘラナデ・内面ヘラナデ
16		器台	第15号住居跡(SI-15)	＋ 7.0	7.4	10.8	脚径 7.3× 7.0		微細砂粒子を含む緻密	良好	明茶褐色	体部1/3程欠損、体部外面ヘラナデ後ヘラミガキ、内面ヘラナデ
17		高坏	第15号住居跡(SI-15)	一 括	5.1	13.8			雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	淡褐色	脚部欠損、体部1/2程残、体部外面ハケ目整形後ヘラナデ・内面ヘラナデ
18		器台	第17号住居跡(SI-17)	± 0	7.9×7.8	7.5×7.7	脚径 11.1×11.2	0.9×1.1	雲母・長石・石英を含む、緻密	良好	暗茶褐色	孔は4孔、外面と坏内面ヘラナデヘラミガキ、脚内面下端ハケ目整形、赤彩有り
19		椀	第17号住居跡(SI-17)	−31.0	6.0	12.9	3.0		小石・雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	赤褐色	端整な整形、内外面ヘラナデ後赤彩 底面中央平底
20		器台	第17号住居跡(SI-17)	＋ 6.0	5.6×5.4	6.9×6.7	脚 径 11.0	0.7	微細砂粒子を含む緻密	良好	淡暗褐色	坏部内外ヘラナデ、脚外面縦と横位のヘラナデ、坏部内面に煤付着
21		甕	第19号住居跡(SI-19)	＋11.0	9.3	推定 18.0			雲母・長石・石英を含む	良好	暗褐色	体部上半以下を欠、口縁部やや歪 体部内面摩滅
22		甕	第19号住居跡(SI-19)	＋ 7.0	15.3×15.0	16.5	4.8× 4.6		雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	淡茶褐色	口縁部下端～体部下半までﾊｹ目整形下端と内面ﾅﾃﾞ整形、歪な器形
23		甕	第19号住居跡(SI-19)	＋ 7.0	24.1	推定 19.2	7.2× 6.5		微細砂粒子を含む緻密	良好	淡茶褐色	口縁～体部下半まで1/4程残、口縁ヘラナデ体部ハケ目下半ハケ目後ヘラナデ
24		鉢	第22号住居跡(SI-22)	＋10.0	11.0×10.2	24.7×23.7	5.5	1.7	雲母・長石・石英を含む、緻密	良好	明茶褐色	歪な器形で口縁部1/4程欠、体部ハケ目後ヘラナデとハケ目、底中央に孔有り
25		装飾器台	第22号住居跡(SI-22)	一 括	9.5	突帯 8.9	推 定 15.7	丸孔 1.1 方孔 2.6	小石・雲母・長石含む、粗い	良好	明茶褐色	口縁上半と脚1/4程欠、脚に丸孔6孔と口縁下端に方形孔有り、接合資料
26		坏	第１号墳(TM-1)	＋36.0	3.6	11.8×11.5			微細砂粒子を含む緻密	良好	明褐色	やや歪で完形、口縁ヘラナデ体部ヘラ削り内面は端製なヘラナデ
27		椀	第１号墳(TM-1)	＋77.0	5.5	6.5×6.4	3.7×3.5		雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	淡暗褐色	歪な器形で口縁1/3程欠、口縁部と体部下半ヘラナデ上半ハケ目整形
28		椀	第１号墳(TM-1)	＋45.0	4.4	推定 6.7	4.2		雲母・長石を含む粗い	良好	淡暗褐色	口縁1/4程残、体部内外面ヘラナデ 薄い器厚
29		椀	第１号墳(TM-1)	＋52.0	4.5	推定 8.4	2.8× 2.6		小石・雲母・長石を含む、粗い	良好	淡暗褐色	口縁1/4程残、口縁ﾊｹ目後ヘラナデ体部ハケ目整形、内底面ヘラナデ
30		坩	第１号墳(TM-1)	＋39.0	4.6		3.2× 2.8		小石・雲母・長石を含む、粗い	良好	明褐色	口縁部と体～底部1/5程欠、体部ハケ目整形で下半は粗いハケ目整形
31		椀	第34号土坑(SK-34)	一 括	5.0×4.9	8.9×8.7	3.8× 3.6		長石・石英を多量に含む、粗い	良好	明褐色	ほぼ完形、内外面ナデ整形であるが体部は弱いナデ整形

第4表　出土遺物一覧表2

番号	器種	器形	出土遺構	位置	法量（cm）				胎土	焼成	色調	器形・整形の特徴
					長	玉径	重（g）	孔径				
32	土製品	土玉	第1号住居跡(SI-1)	＋ 1.0	2.7	2.5×2.4	20.0	0.6	小石・長石・石英を含む、緻密	良好	明茶褐色	楕円形状を呈する完形
33		土玉	第2号住居跡(SI-2)	＋ 8.0	3.5	3.8×3.3	19.5	0.6	長石・石英を含む、粗い	普通	暗茶褐色	1/3程の破片、上面ナデ体部縦位のヘラ削り、下面ヘラ削り
34		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 9.0	3.6	3.8×3.5	42.5	0.6	雲母・長石・石英を含む、緻密	良好	明褐色	完形、楕円形状 ヘラナデ整形
35		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 4.0	3.5	3.4×3.4	40.0	0.6	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	明褐色	完形、不整円形状 孔の上面楕円形状、ナデ整形
36		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 5.0	3.4	3.5×3.4	39.5	0.7	微細砂粒子含む緻密	良好	淡褐色	完形、楕円形状 孔は楕円形状、ナデ整形
37		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 4.0	3.3	3.5×3.4	40.0	0.4	雲母・長石・石英粒を含む、緻密	良好	暗褐色	完形、楕円形状 体部外面弱いナデ整形
38		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 1.0	3.3	3.6×3.5	41.0	0.7	微細砂粒子含む緻密	良好	暗茶褐色	完形、円形状 孔上部ヘラ削り、体部ヘラナデ
39		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 5.0	3.4	3.6×3.5	39.5	0.7	少量の砂粒子を含む、緻密	良好	暗茶褐色	完形、円形状、孔は楕円形状 下孔が広い、ヘラナデ
40		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 5.0	3.4	3.5×3.4	39.0	1.0	雲母・長石・石英粒含む、緻密	良好	淡褐色	完形、楕円形 体部良好なヘラナデ
41		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 5.0	3.4	3.5×3.4	35.5	0.8	砂粒子を含む緻密	良好	暗褐色	完形、楕円形状 ナデ整形
42		土玉	第3号住居跡(SI-3)	＋ 2.0	3.3	3.4×3.3	38.0	0.8	微細砂粒子含む緻密	良好	淡褐色	完形、不整円形状 上孔部ヘラ削り、体部ナデ整形
43		土玉	第5号住居跡(SI-5)	＋12.0	3.0	3.0×2.6	24.0	0.4	微細砂粒子含む緻密	良好	暗茶褐色	完形、楕円形 体部ナデ整形
44		土玉	第5号住居跡(SI-5)	－39.0	3.8	3.1×3.0	24.0	0.4	微細砂粒子含む緻密	良好	茶褐色	完形、楕円形状 粗いナデ整形
45		土玉	第5号住居跡(SI-5)	＋40.0	3.0	3.1	26.0	0.7	長石・石英含む粗い	良好	茶褐色	完形、楕円形状 ナデ整形
46		土玉	第6号住居跡(SI-6)	＋ 5.0	2.9	2.7×2.5	20.0	0.5	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	暗褐色	完形、楕円形状 体部ナデ整形
47		土玉	第6号住居跡(SI-6)	P3内	2.9	4.0×2.3	50.0	0.9	微細砂粒子を含む粗い	良好	明茶褐色	完形、不整円形状 体部粗いナデ、P3内出土
48		土玉	第9号住居跡(SI-9)	一 括	3.0	3.1×3.0	30.0	0.5	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	淡褐色	完形、円形状 孔は楕円形状、体部ナデ整形
49		土玉	第9号住居跡(SI-9)	± 0	2.6	2.9×2.6	19.0	0.6	雲母・長石・石英を含む、緻密	良好	明黒色	下端一部欠、楕円形状 孔は楕円形状、粗いナデ整形
50		土玉	第11号住居跡(SI-11)	一 括	3.1	3.1×3.0	30.0	1.1	小石・雲母・長石・石英を含む、密	良好	暗褐色	完形、円形状 良好なナデ整形
51		土玉	第12号住居跡(SI-12)	＋24.0	3.4	3.4 ×3.7	35.0	1.1	微細砂粒子を含む緻密	良好	淡茶褐色	完形、楕円形状 孔は楕円形状、粗い整形
52		土玉	第12号住居跡(SI-12)	＋10.0	2.8	3.3×3.2	29.0	0.7	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	暗褐色	完形、楕円形状 ナデ整形
53		土玉	第13号住居跡(SI-13)	＋ 8.0	3.0	3.5×3.1	30.0	0.6	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	淡黒色	完形、楕円形、孔は楕円形状 粗い整形
54		土玉	第13号住居跡(SI-13)	＋ 2.0	3.1	3.3×3.2	32.0	0.6	微細砂粒子を含む緻密	良好	淡黒褐色	完形、円形状、孔は楕円形 上孔ヘラ削り、体部良好なナデ
55		土玉	第15号住居跡(SI-15)	貼床内出土	2.9	3.6×3.7	30.0	0.8	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	明茶褐色	完形、楕円形 一部焼けている
56		土玉	第17号住居跡(SI-17)	＋16.0	2.8	3.3×3.2	20.0	0.8	小石・雲母・長石を含む、粗い	良好	明黒色	完形、楕円形 粗いヘラナデ
57		土玉	第19号住居跡(SI-19)	＋ 4.0	2.5	3.0×3.0	25.0	0.7	微細砂粒子を含む緻密	良好	暗茶褐色	完形、円形状 ヘラナデ
58		土玉	第1号墳(TM-1)	＋56.0	3.0	3.2×3.0	29.0	0.8	雲母・長石・石英を含む、粗い	良好	明黒色	完形、楕円形状、孔は楕円形 良好なヘラナデ、周溝内出土
59		土玉	第1号墳(TM-1)	＋100.0	3.8	3.2×3.5	30.0	0.6	雲母・長石を含む粗い	良好	淡暗褐色	完形、楕円形状、周溝内出土 1/2程欠、良好なヘラナデ
60		土玉	第1号墳(TM-1)	＋58.0	2.7	2.2×2.8	22.0	0.6	小石・雲母・長石を含む、粗い	良好	淡茶褐色	完形、不整円形状、周溝内出土 孔は上下でずれる、粗い整形
61		土玉	第2号溝(SD-2)	一 括	3.3	3.4×3.2	35.0	0.9	微細砂粒子を含む緻密	良好	明褐色	完形、楕円形状 孔は楕円形状、ナデ整形
62		土玉	第2号溝(SD-2)	一 括	3.0	3.1×2.9	28.0	1.2	長石・石英を多量に含む、粗い	良好	明褐色	完形、円形状、孔は楕円形 粗いヘラナデ整形

第５表　出土遺物一覧表３

番号	器　種	器形	出土遺構	位置	法　量（cm）				器形・整形の特徴
					長	断面	重（g）	頭径	
63	鉄製品	釘	第１号墳（TM-1）	+60.0	8.6	0.5×0.7	9.5	1.1×0.8	ほぼ完形、「L」字状に曲がっている頂部は長方形状
64	〃	釘	第１号墳（TM-1）	+65.0	7.5	0.7×0.5	6.7		頭部、身部中央、先端部を欠湾曲している
65	〃	釘	第１号墳（SI-1）	+66.0	8.5	0.7×0.5	9.5		頂部と先端部を欠損やや大きい釘
66	〃	釘	第１号墳（TM-1）	+70.0	3.3	0.4×0.5	5.5	1.5×1.3	身部中央以下を欠頂部円形状
67	〃	釘	第１号墳（TM-1）	+64.0	4.7	0.6×0.5	6.5	1.0×0.7	身部中央以下を欠頂部は長方形状
68	〃	釘	第１号墳（TM-1）	+67.0	6.8	0.5×0.6	8.7	1.0	先端部欠、湾曲している　頂部は円形状
69	〃	釘	第１号墳（TM-1）	+5.0	5.5	0.5×0.3	6.7		両端を欠いている
70	〃	釘	第１号墳（TM-1）	+67.0	5.5	0.6×0.5	4.7		両端を欠いている

６．遺構外出土遺物

⑴旧石器（第31図：PL７）

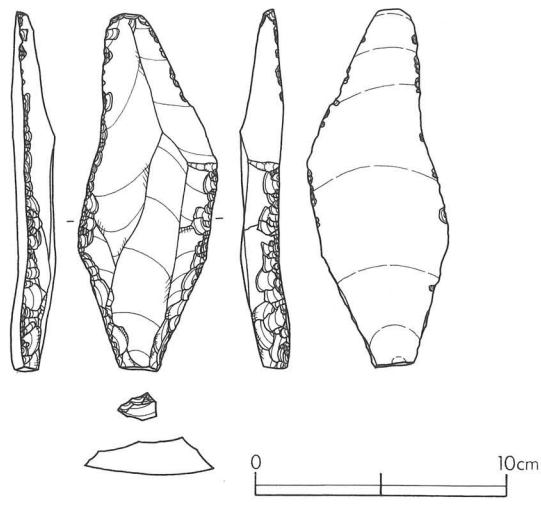
本調査では、方墳周溝北側に隣接した遺構確認面上でナイフ形石器１点が発見されている。本来この資料は、関東ローム層中の出土資料であるが、調査終了後にローム土中にあったのを偶然発見したものであるため、詳細は詳らかに出来ない。ただし周辺部約４ｍ四方を約50cm掘り下げたが、その他の資料は全く得られなかったことから、単一の出土の可能性が高い。

本資料は、大型の石刃を素材とし、正面図 両側縁下部に急角度の連続的な刃潰し加工（Blunting）を施している。正面図上半部分の刃部に、比較的微細な剥離痕が多数認められるが、石器製作段階で意図的に調整されたものか、それともその後の使用の結果なのかは判別できない。重量は53.6ｇである。大型で、このような調整を持つナイフ形石器が出土した例は、今まで常名台遺跡群周辺では少ないことから、本資料の資料的価値は高いといえる。

この資料の系統の性格については、硬質頁岩を使用していること、大型の石刃を素材とすること、素材の基部に刃潰し加工が集中すること、打面部分が大きく残されることなどから、従来、東北地方硬質頁岩地帯を中心にその分布が認められるとされてきた「東山型石器」の特徴を有しているといえる（加藤1965）。しかしながら、東北地方日本海側で産出する硬質頁岩と、近似した性質を持つ硬質頁岩の産出が千葉県鴨川付近で確認され、さらにその周辺地域で、頁岩製の大型石刃を石器の素材とする石器群が多数検出されている（矢本1996他）。それらのことから本石器の持つ特徴が、即座に東北地方「東山系石器群」に関連するものと断定は出来ない。

〔単位：mm・g〕

器　種	長　さ	幅	厚　さ	重　量	石　材
ナイフ形石器	116.7mm	44.3mm	11.4mm	53.6ｇ	硬質頁岩



第31図　ナイフ形石器

参考文献

加藤　稔　1965　「東北地方のナイフ形石器文化」『歴史教育』13－３

矢本節朗ほか　1996　『多古町千田台遺跡－BR/W南側N用地(無線施設)埋蔵文化財調査報告書』千葉県文化財調査報告書 283　千葉県文化財センター

⑵縄文土器・弥生土器（第32図：PL８）

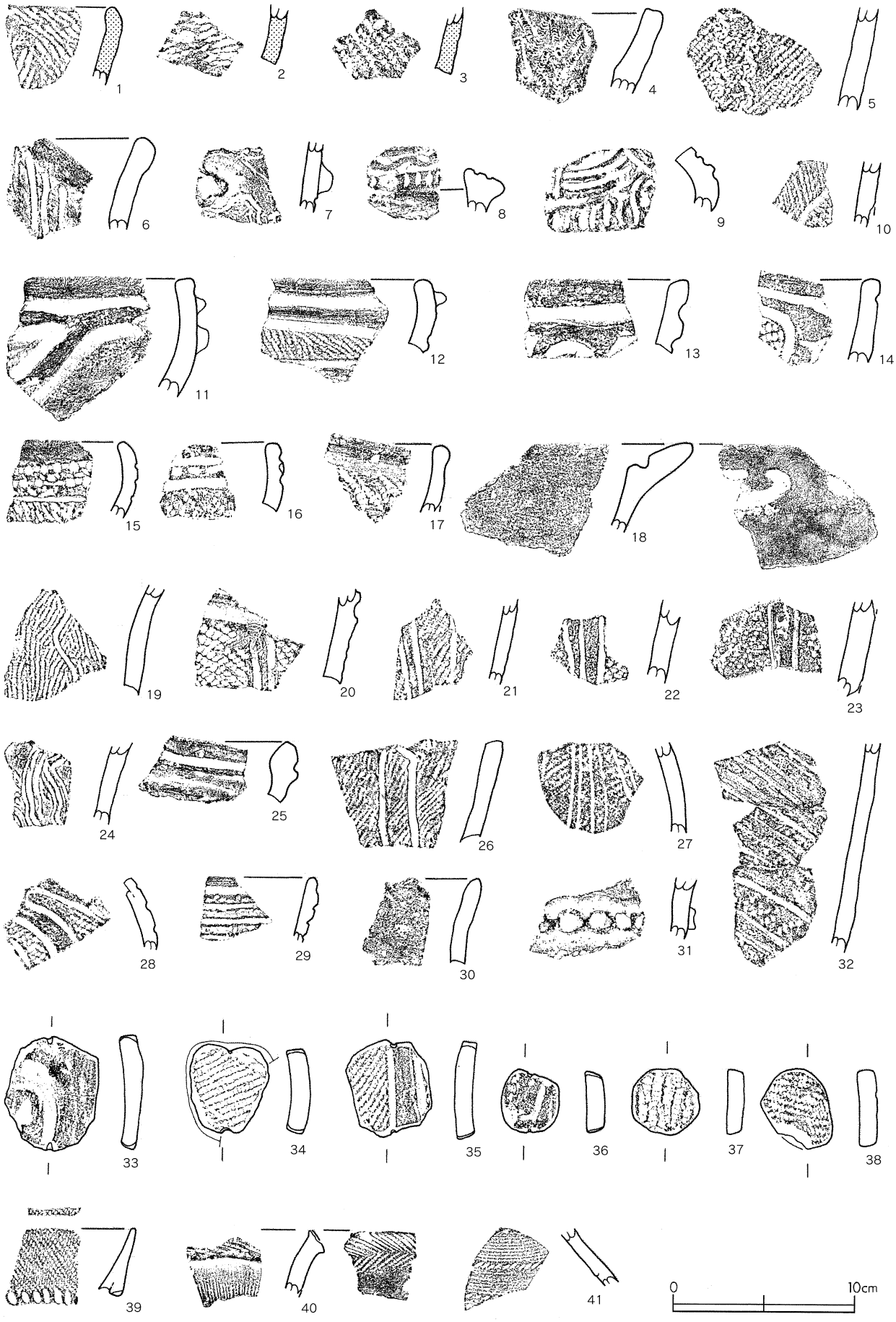
縄文土器・弥生土器とも全て他遺構の覆土中もしくはグリッドから出土したものである。

縄文土器は調査区全体から316点出土しており、時期は前期の黒浜式から後期の加曽利Ｂ式までが確認された。明確に時期判定可能な破片は加曽利Ｅ式が98点と最も多く（縄文のみが145点）、量的に続く阿玉台式・堀之内式が８点前後であることから散布の中心は加曽利Ｅ式期と言える。土製品は土器片を再利用した錘と円盤が各６点出土しており、遺存状態の良好なものを図化した。

１は平縁で緩く内湾し、無節R*l*が、２は無節Lr、３は単節RLが施文される。いずれも胎土に繊維を混入していた。黒浜式に相当する。４は波状縁で口唇部中央がやや凹み、全体に幅が広い。半截竹管状工具による爪形文が連続する鋸歯状文が多段に及ぶ。胎土には石英を多量に混入していた。前期末葉から中期初頭に相当しよう。５は単節RLの結節縄文を縦位に回転させている。胎土には雲母・砂粒を多量に混入していた。五領ヶ台式に相当する。６は波状縁で口縁に沿って幅の広い無文帯を有し、直下の無文部には縦位沈線が充填している。７は隆帯が舌状に貼付られ、節を有する沈線が描かれる。８は幅の広い口唇部端部に刺突列、平行沈線間には交互刺突が連続する。いずれも胎土には雲母を多量に混入していた。６～８は阿玉台式で６はⅢ式、７はIb～２式、８は末葉に相当しよう。９は幅の広い沈線による渦巻き文が描かれる。中峠式に相当しよう。10は初めに複節LRLを施文した後、粘土を塗り付けて消し、最終的にＬ撚糸文を施文している。中期後半期であろうか。11～18は口縁部片で、14・17が波状縁となる他は平縁、18を除き深鉢形を呈する。11・12は沈線が沿う隆帯による区画文で、区画内には11は単節LRと思われる縄文が、12は単節RLが充填される。13・14は沈線による区画文で、14は単節LRが充填される。15は３条の平行沈線が巡り、口縁部に近い２条の沈線上に交互刺突が連続し、下半はL撚糸文である。18は浅鉢形で、口縁部が大きく外反し、幅の広い口唇部に曲線的な沈線文が描かれる他は無文である。19は地文単節LRで波状の懸垂文が描かれる。20は口縁部下半の破片で隆帯と沈線により区画され、地文は単節LRで２条の沈線が垂下する。21～23は地文単節RLで２～３条の沈線が垂下し、沈線間はいずれも磨り消しされる。17が加曽利EⅣ式となる他はEⅡ～EⅢ式に相当しよう。24は３条一単位の波状条線文が垂下する。称名寺式に相当する。25は波状縁に沿い稜を有し、ここに沈線が１条巡り、下半は無文となる。26～28はいずれも単節LRが施文され、28は沈線間に充填される。26は蕨手状沈線文、27は垂下沈線文、28は曲線的な沈線文が描かれる。28が堀之内２式、他は１式に相当する。29は平縁で多段の平行沈線文が巡る。地文は縄文が施文されるが原体は不明である。30は小波状縁を呈し、無文で器面は著しく荒れていた。31は口縁部下の破片で、横位に紐線文が巡り、下半は縄文が施文されるが一部のため原体不明である。32は地文単節LR、斜位の条線文が描かれる。29は加曽利Ｂ１式、30は２式、31・32は堀之内２式～加曽利B式にかけての粗製土器である。

33～38は土製品で、33～36は土器片を再利用した錘、37・38は円盤である。土錘はいずれも長軸方向に１対の切り目を有し、34以外は全周磨かれ整形されていた。33は口縁部を再利用しており、隆帯と沈線により曲線文が描かれる。長さ6.3cm、幅5.2cm、重さ35.5gである。34・35は単節RLで36は単節LR、35は平行沈線間が磨り消しされる。34は長さ4.9cm、幅4.4cm、重さ30.1g、35は長さ5.4cm、幅4.8cm、重さ30.3g、36は長さ3.4cm、幅3.2cm、重さ12.8gである。37・38は全周磨かれて整形され、単節RLが施文される。37は長さ3.6cm、幅3.7cm、重さ13.6g、38は長さ4.4cm、幅3.9cm、重さ（19.3）gである。土製品は加曽利E式期に相当する。

弥生土器は16点出土しており、そのうち３点（39～41）を図化した。いずれも後期末葉の範疇に含まれるものと思われる。



第32図　遺構外出土縄文土器・弥生土器

第4節　まとめ

北西原遺跡第1次調査では、22軒の竪穴住居跡・1基の古墳・35基の土坑・2条の溝が発見されている。

古墳は1辺35m程を計測する大型の方墳で、南側周溝の中央部から北方に墓道が伸びており主体部は長方形を呈しているが、後世の撹乱（破壊）が著しく石棺材が1枚現存していたのみである。主体部と周溝内より多量の石（雲母片岩）が、小破片として出土していることがこのことを示している。人為的による意識的な破壊であり、単なる盗掘としての破壊とは考えにくい状況である。出土遺物としては、主体部からは土師器片・釘片・雲母片岩片等が出土しているが、武器類・玉類は出土しなかった。周溝内からは、上面より土師器器台・埦・坩・釘・土玉・雲母片岩片等出土しているが、廃棄による遺物と判断される。また古墳周溝から釘が出土しているが、古墳に伴うものかどうかは不明であるが、古墳に伴う釘ならば注目される点である。

22軒の住居跡は、古墳時代の五領期と和泉期に該当する住居跡である。五領期の住居跡は、大型の住居跡で、直床状を呈する住居跡が多く炉跡は良く焼けた大型の炉跡であり、2回以上その位置を変えている住居跡が多く所在している。柱穴・貯蔵穴は、個々の住居跡により異なっており、住居跡の長軸と方位は一致するようである。和泉期の住居跡は、遺構の規模・内容・方位が個々の住居跡により異なっており、変化に富んだ住居跡である。住居跡の長軸が東西方向であるのに対して、炉跡を北向きに設置している住居跡や、片方の壁際に設置している住居跡等がある。小型の住居跡としては、第7・9・10・12・18号等の住居跡が所在している。

溝は中近世期の溝で2条として報告したが、第2号溝西側が北側の溝に掘り切られた状況を呈していることから3条であったと判断されるが、本報告では溝2条として報告する。この溝は、住居跡と古墳を堀り切り近現代の土坑に切られている。確実な用途は不明であるが、土地を区画するように掘込まれている。

35基の土坑は、その多くが近現代の耕作土坑であり、古墳時代の土坑と縄文時代の土坑は9基である。縄文時代の土坑は、第33・35号土坑の2基がある。共に陥穴で、底面には逆木の埋設痕を示すPitが認められた。第33号土坑は20本であるが、第35号土坑は3本の逆木が埋設されている。2基は調査区の中央部で、比較的平坦な所に掘込まれている。

出土遺物としては、土師器甕・台付甕・高坏・埦・器台・釘・土玉等が出土している。甕は体部が球形で、口縁部は外傾しており平底の甕である。整形はナデ・ハケ目整形であるり、体部にはハケ目整形を施しているが五領期後半から和泉期にかけては、ハケ目整形後ヘラナデが施されており、和泉期ではヘラナデが用いられている。高坏は完形品は出土しておらず、坏部や脚部の破片で出土している。ハケ目整形は用いられておらず、ヘラナデが施されている。器台は、器形から3形式に分類される。NO.3に類似する器形と、NO.11に類似する器形及びNO.12に類似する器形である。器部は比較的良好なヘラナデが施されており、脚部は外面ヘラナデであるが内面下端にハケ目整形を施している器台もある。また脚等には孔数に差を有するが円形の孔を穿つ器台が多く出土しており、赤彩や煤が付着している器台もある。また装飾器台が1点出土しているが、覆土内一括遺物の接合資料である。埦は半球状の器形で体部ハケ目整形の埦と、口縁部が外傾し赤彩されている埦等が出土している。釘

は破片で出土しているものがほとんどであり、頭部が円形・長方形等の形状を呈している。土玉は、大きさ・重さ・孔径とも比較的同程度の土玉が多く出土しており、整形も比較的良好である。これらの遺物は古墳時代の遺物であり、五領・和泉期の特徴を有する遺物であり、遺構に伴った遺物である。中近世以降では、煙管・陶磁器茶碗・皿等が小破片で出土しているが、図示不能である。遺構に伴わない遺物としては、旧石器時代の石器と縄文土器・弥生土器が出土している。

北西原遺跡の整理・報告書編集作業は、筆者が図面整理より開始した為に実測遺物の選別等の作業が著しく遅延してしまった。基礎整理で終了しているべき作業に時間を費やされ、今まで遅延してしまった。また遺構と遺物について、充分検討する事が出来ず概報的な報告となってしまった。

本報告書作成に際し、多大な協力をいただいた関係諸氏に対して甚大なる謝意を表するものである。

第4章　総　括

今回報告した北西原遺跡第１次調査では、縄文時代、古墳時代、近現代の遺構および旧石器時代～古墳時代の遺物が発見されている。特筆すべきものとしては、まず遺構では古墳時代終末期の大型方墳がある。この古墳は片岩を使用した小型の主体部を持ち、南側の周溝に向かって素掘りの長い墓道を有する古墳で、千葉県北部から茨城県南部・霞ヶ浦沿岸地域に見られる終末期方墳に特徴的な形態をもつものである。ただし、この形態を持つ古墳は１辺20m前後のものが大半で、本墳の１辺約35mという大きさは現在発見されている中でも最大級となるものである。残念ながら本墳に伴う明確な遺物がないため詳細は不明な点も残るが、いずれにしても本墳は霞ヶ浦沿岸地域における古墳時代終末期の首長墓の一形態を示すものとして、今後とも重要な古墳となるものであることは間違いない。次に今回の調査で明らかとなった竪穴住居跡については、本調査区から東に北西原・神明遺跡の古墳時代前期の大集落が展開していることがその後の調査で明らかになったことから、本調査区の住居跡もこの集落の一部を構成するものであると考えられ、全体としては100軒を超える大集落になるものと推定される。常名台では本集落跡の南側に同時期の古墳を有する山川古墳群があり、この古墳群と集落の関係について考えていく必要があろう。

次に出土遺物として特筆すべきものとして、まず旧石器時代の硬質頁岩製の大型ナイフ形石器がある。このような硬質頁岩の大型石器は市内では前谷東遺跡(田村町、田村・沖宿遺跡群)などで出土例が確認されている。また住居跡から出土した古墳時代の土器群も、他の常名台の遺跡群と比較・検討が進めば、古墳時代の良好な資料になることであろう。

今回報告した常名台遺跡群の北西原遺跡第１次調査は、約10年前の1993(平成５)年に実施したものであるが、諸般の事情により整理及び報告書の刊行が遅れていたものである。常名台ではこの調査後も発掘調査が進められ、2003年現在約10.4haの調査を完了している。このような大規模な発掘調査は、土浦市内では木田余台遺跡群(1987～1991年調査)、田村・沖宿遺跡群(1990～1993年調査)及び茨城県教育財団が実施した原田遺跡群(1992～1995年調査)に並ぶものとなった。最後に今回の発掘調査及び整理作業について多大なるご協力及びご迷惑をおかけした関係諸氏に厚く御礼を申し上げたい。

報告書抄録

ふりがな	きたにしはらいせき（だい１じちょうさ）		
書　名	北西原遺跡（第１次調査）		
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書		
巻　次	第１集		
シリーズ名			
シリーズ番号			
編者名	石川　功　　藤原　均	著者名	石川　功　福田礼子　藤原　均　渡辺丈彦
編集機関	土浦市遺跡調査会		
所在地	〒300-0812　茨城県土浦市下高津2-7-36　土浦市教育委員会文化課内 TEL 029（826）3484		
発行機関	土浦市教育委員会		
発行年月日	2004年３月15日		

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
きたにしはら いせき 北西原遺跡	つちうらし 土浦市 おおあざひたな 大字常名 あざひのき 字檜木2820他	08203	238	36° 6′ 20″	140° 11′ 15″	平成５ (1993)年 7月12日 ～10月9日	約2,300m²	市運動公園 建設事業

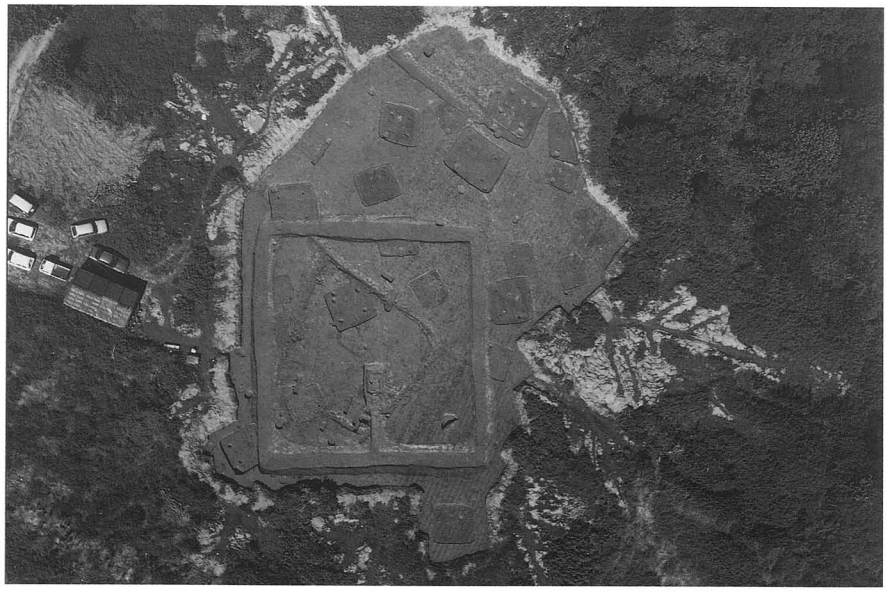
所収遺跡名	種　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
北西原遺跡 第１次調査		旧石器時代		旧石器	硬質頁岩のナイフ形石器出土
		縄文時代	土坑２基	縄文土器	早期の陥し穴 黒浜～加曾利Ｂ式の土器片出土 （主体は加曾利ＥⅡ～ＥⅢ式）
	集落跡 古墳	古墳時代 古墳時代 （終末期）	竪穴住居跡 22軒 土坑７基 方墳１基	土師器 鉄釘	古墳時代前期～中期の集落跡 中心は本調査区の東側に展開 １辺約35m、横穴式石室を有する 終末期方墳
		近現代	溝２条 土坑26基		耕作土坑？

写　真　図　版

PL．1　遺跡現況・全景

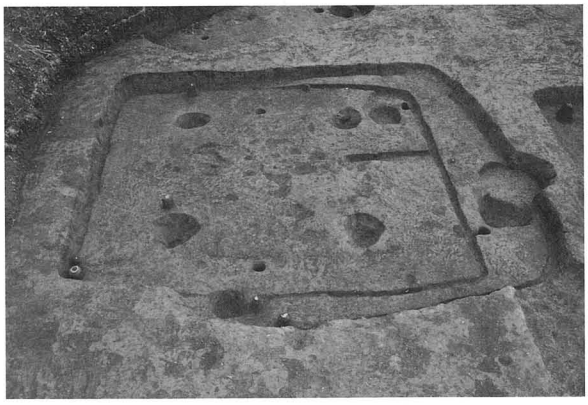
遺跡遠景

調査前遺跡近景

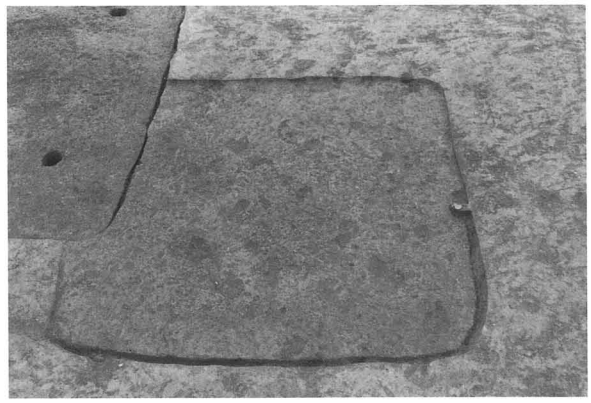


遺構全景

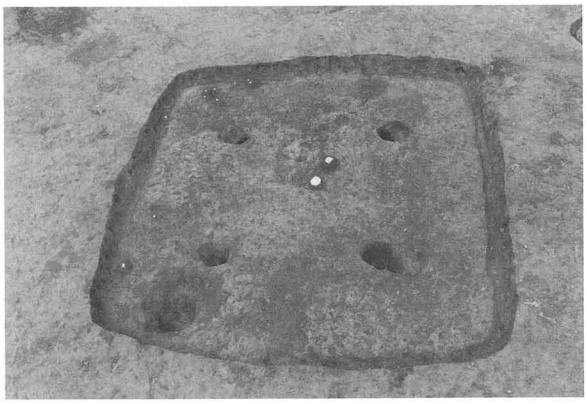
PL.2　遺構全景１（住居跡１）



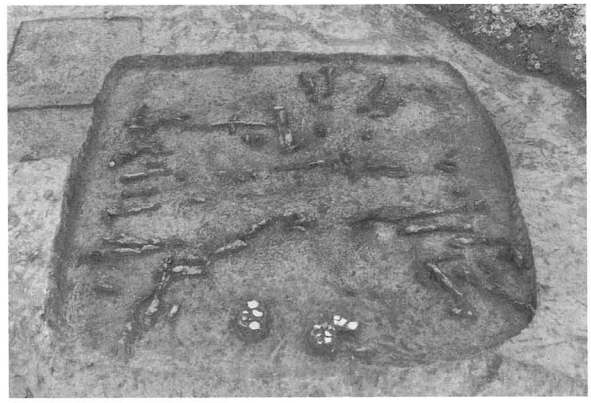
第１・２号住居跡(SI-1・2)、第３号土坑(SK-3)全景



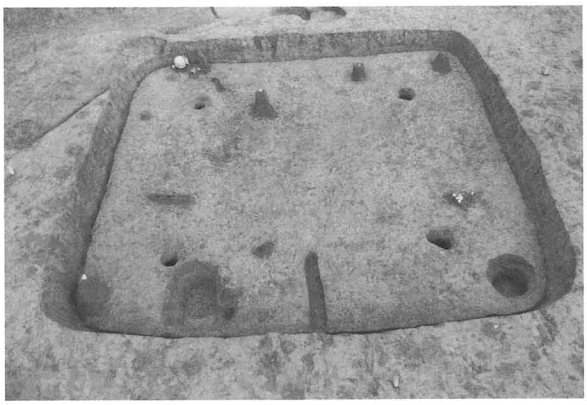
第10号住居跡(SI-10)全景



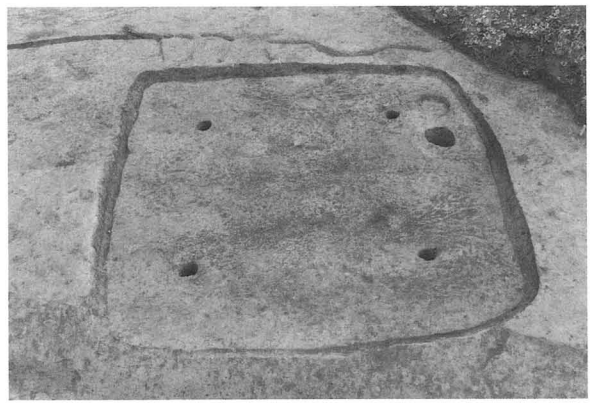
第３号住居跡(SI-3)全景



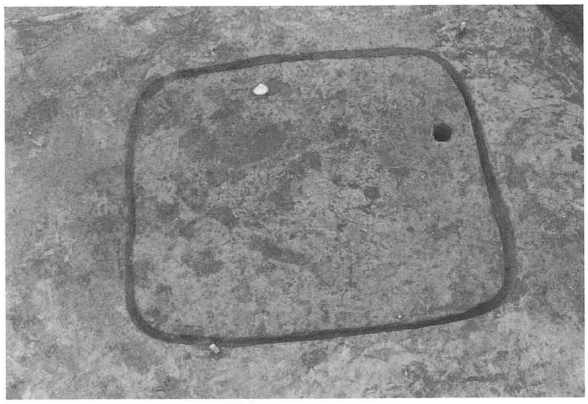
第11号住居跡(SI-11)炭化材･遺物出土状況



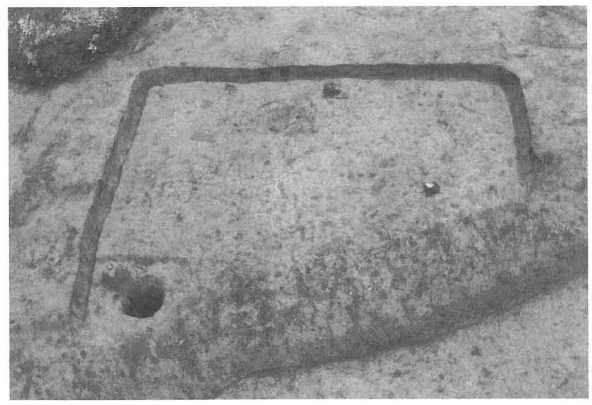
第５号住居跡(SI-5)、第４号土坑(SK-4)全景



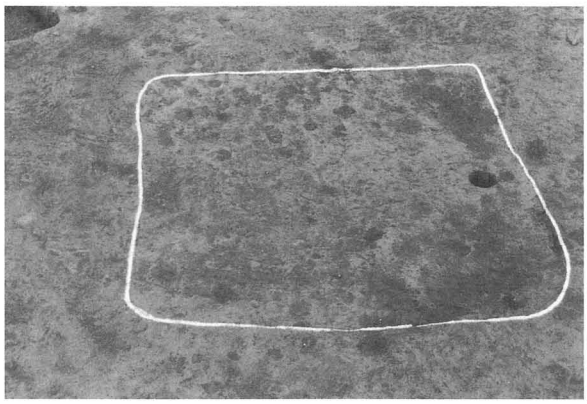
第11号住居跡(SI-11)全景



第９号住居跡(SI-9)全景

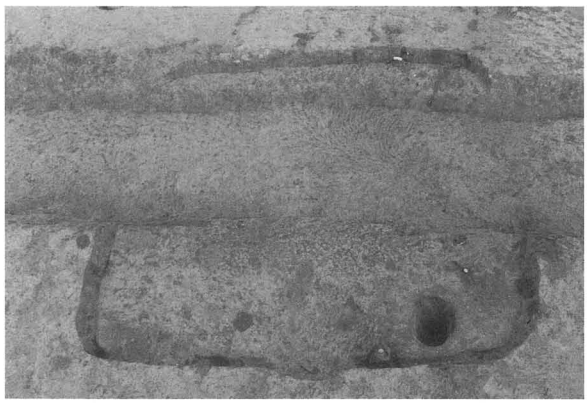


第12号住居跡（SI-12）全景

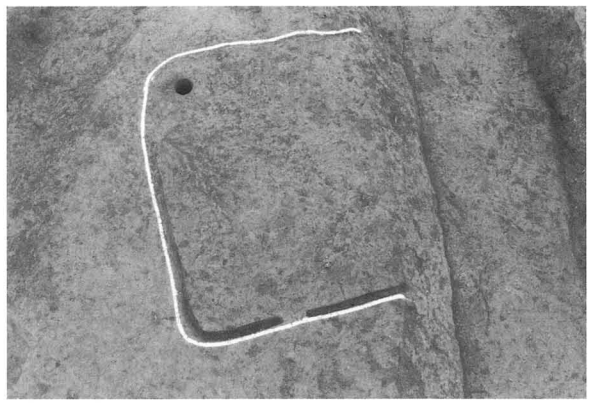


第13号住居跡(SI-13)全景

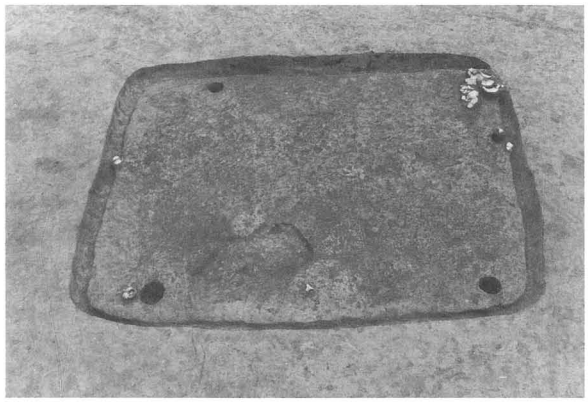
第17号住居跡(SI-17)、第20号土坑(SK-20)全景



第14号住居跡(SI-14)、第６号土坑(SK-6)全景



第18号住居跡(SI-18)全景



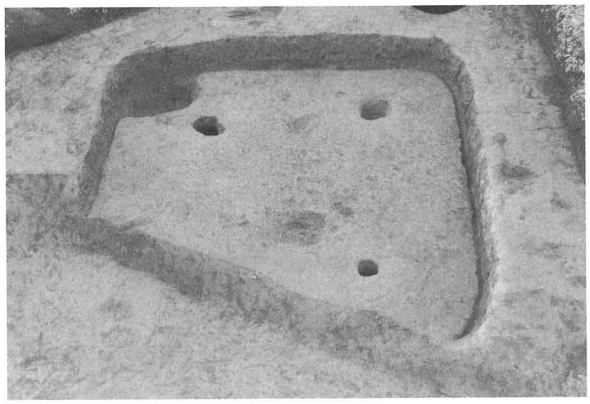
第15号住居跡(SI-15)全景

第19号住居跡(SI-19)全景

第16号住居跡(SI-16)全景

第20号住居跡(SI-20)、第７・11・12号土坑(SK7・11・12)全景

PL.4　遺構全景３（住居跡３・溝・土坑）



第21号住居跡(SI-21)全景

第２号溝(SD-2)、第15･22号土坑(SK-15･22)全景

第24号土坑(SK-24)全景

第33号土坑(SK-33)土層断面

第35号土坑(SK-35)全景

第33号土坑(SK-33)全景

第１号墳(TM-1)全景

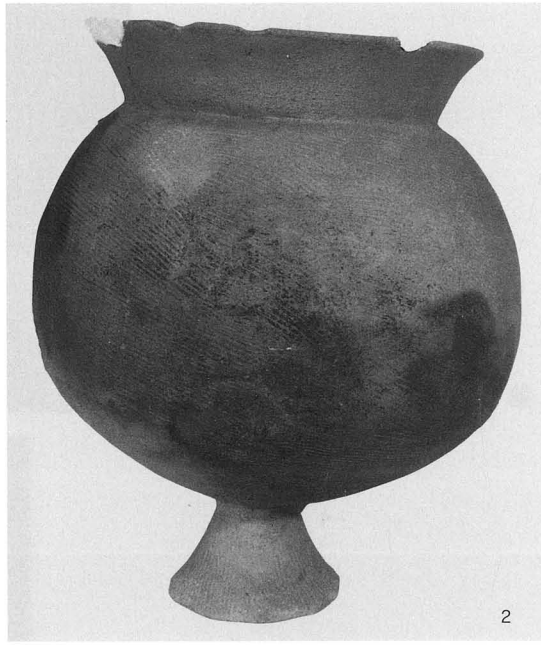
第１号墳(TM-1)
主体部・墓道全景

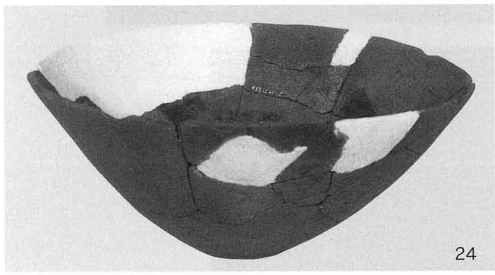
第１号墳(TM-1)
主体部全景

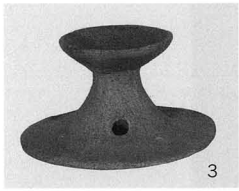
PL.6　土師器

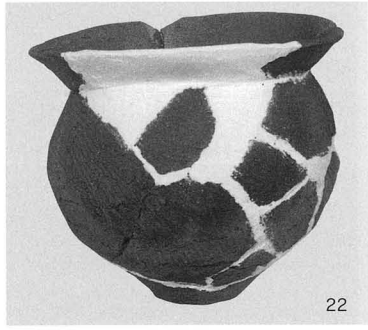
7

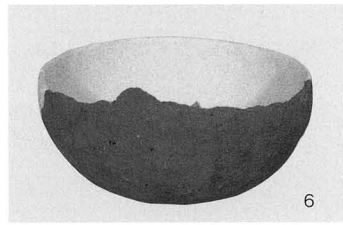
4

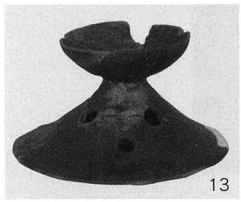

2

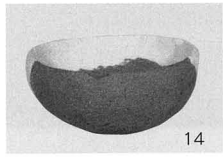

24

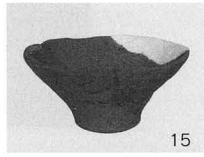

3

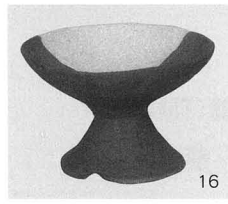

22

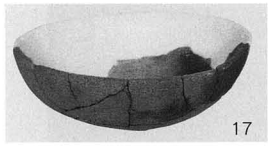

6

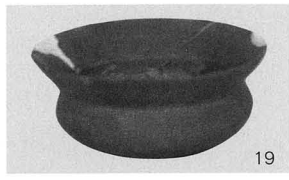

13

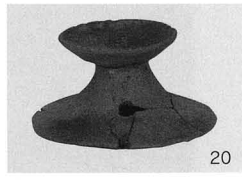

14


15


16

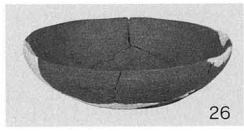

17

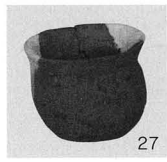

19

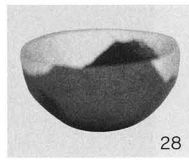

20

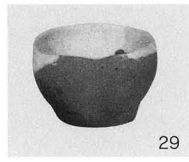
31

25

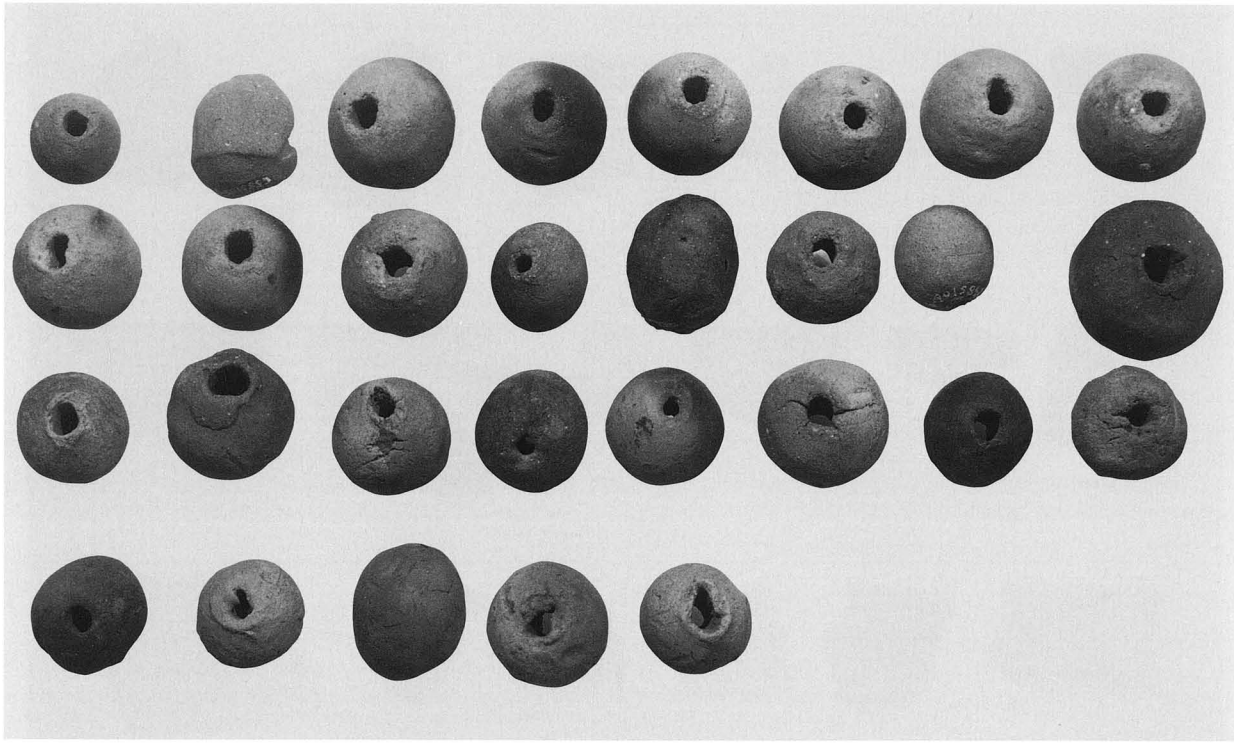

26


27

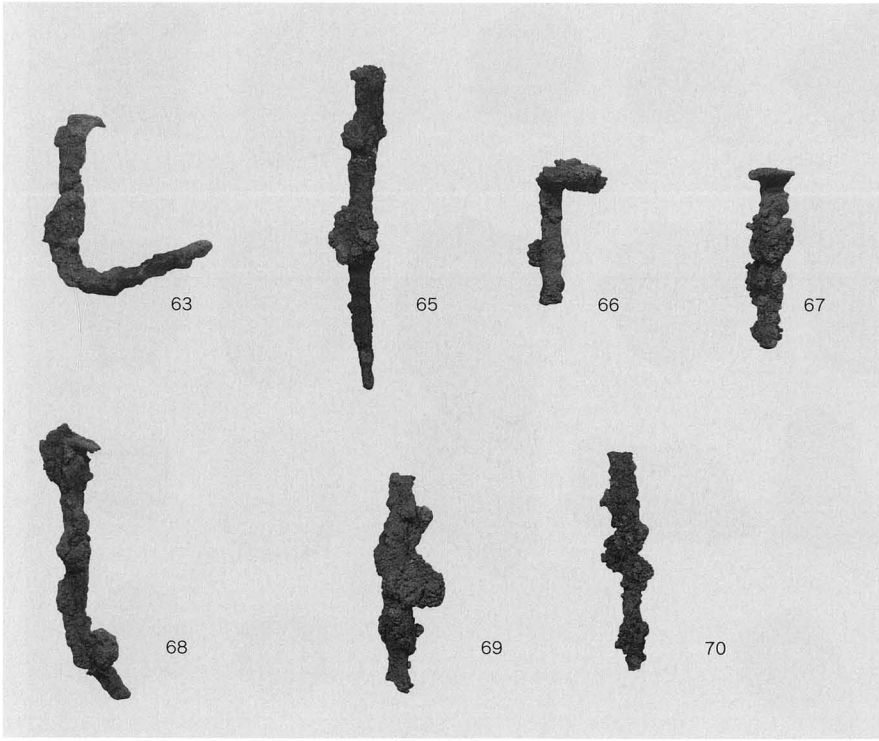

28


29

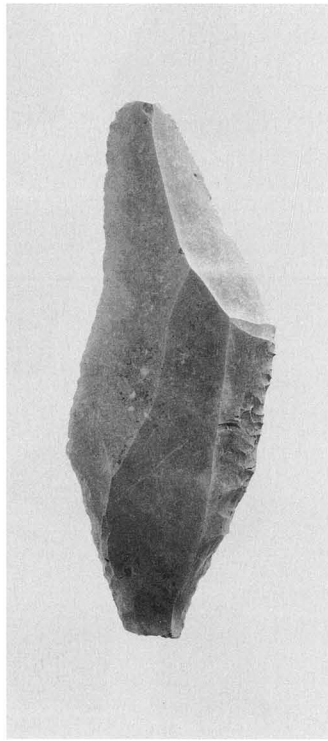
PL.7　土玉　鉄製品　ナイフ形石器



土玉

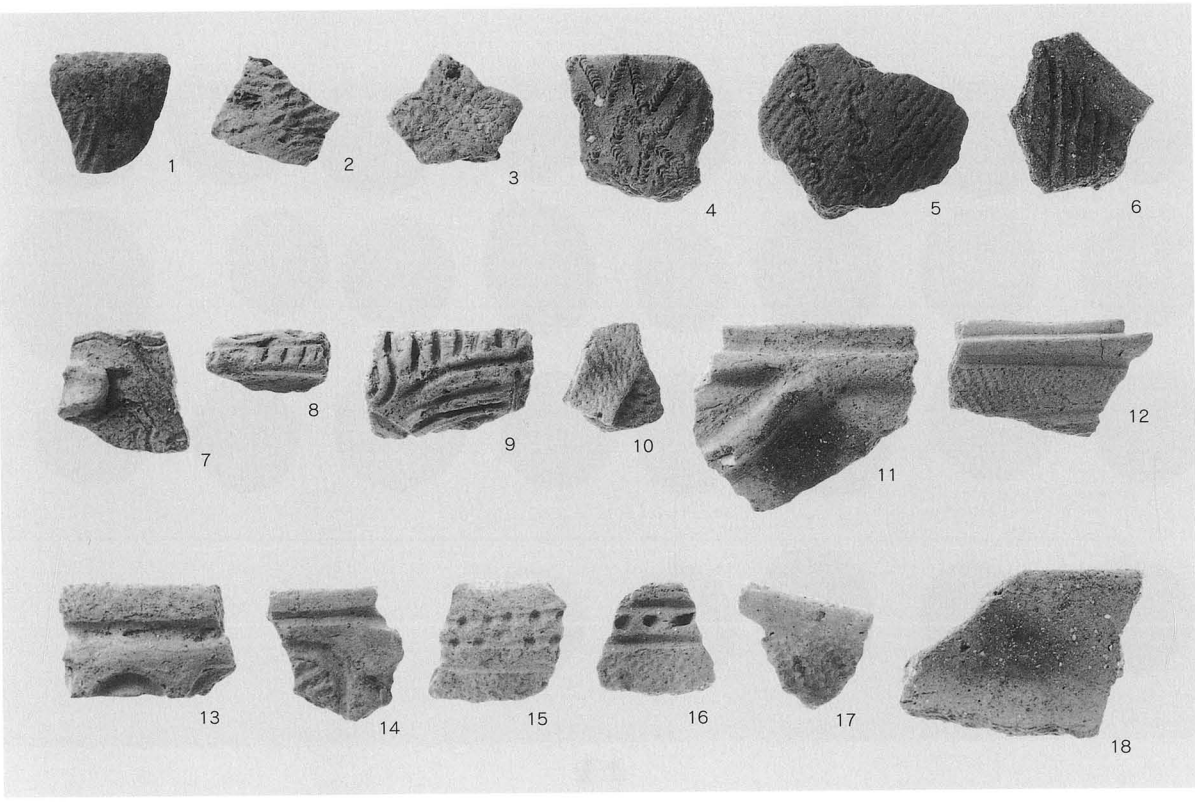


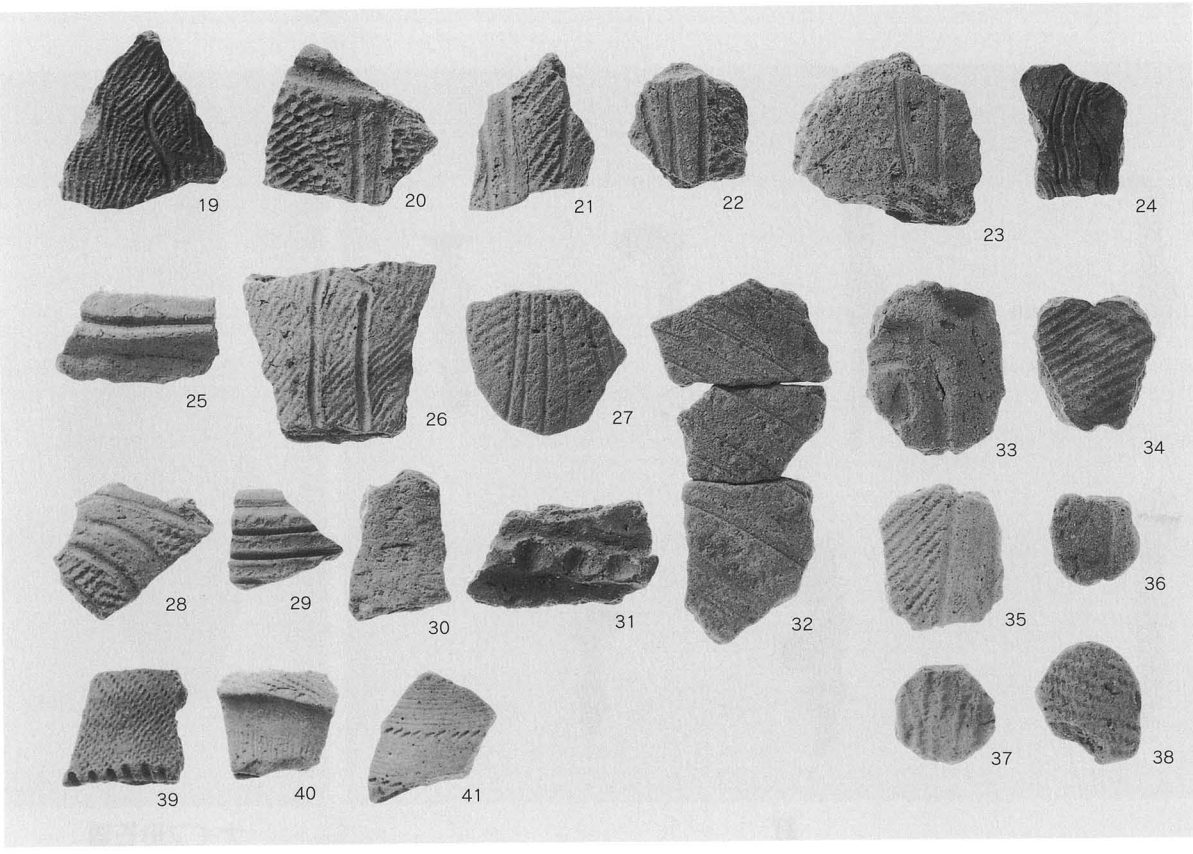
釘



ナイフ形石器

PL.8　縄文土器・弥生土器





北西原遺跡（第1次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書第１集

発　行　日　２００４年３月15日
編　　集　土浦市遺跡調査会
発　　行　土浦市教育委員会
問い合わせ先　上高津貝塚ふるさと歴史の広場
（考古資料館）
〒300－0811
茨城県土浦市大字上高津1843
TEL　029（826）7111
mail：kaizuka@city.tsuchiura.ibaraki.jp
印　　刷　株式会社　横　山　印　刷